

山梨県生産遺跡分布調査報告書

(窯業遺跡)

1990. 3.

山梨県教育委員会

山梨県生産遺跡分布調査報告書

(窯業遺跡)

1990. 3.

序 文

本調査は文部省から補助金を受けて、1987年度から1989年度までの3年間にわたり、山梨県内の焼き物の窯跡を調査した報告書であります。補助金の事業名は『生産遺跡分布調査』で、主として古代より近代までの焼き物の窯跡の分布調査を行いました。

本県は古来より焼き物の生産活動についての記録や伝承は極めて少なく、近世甲斐の代表的地誌である『甲斐国志』にも、甕焼き・土器・土鍋などの産地が僅かに4カ所記載されているだけで、「本州ニ陶工ハ無シ」とあります。今日、窯業地域として知られているものは、江戸時代後半に盛んになった若草町加賀美や、明治初期におこった甲府市里垣・甲運地区、あるいは双葉町龍地の瓦製造ぐらいいしか見当たりませんが、現在、これらの地でさえも製造業を営んでいる家は僅かで、多くは瓦間屋や瓦葺職人などへ転業しております。

今回の調査では、境川村で古墳時代後期6世紀末～7世紀前半の、須恵器を生産した登り窯が発見されたのをはじめ、白鳳時代の瓦窯では、敷島町天狗沢窯、甲府市川田窯などを調査し、その広がりや窯遺構の遺存状態の確認調査を行いました。奈良時代では、甲斐国分寺・尼寺などに瓦を供給した甲府市桜井町土器遺跡を調査し、近くに幾つかの窯が存在したことも明らかとなりましたが、既に削平をうけて窯本体は消滅し、灰原だけが残っていたものであります。平安時代では、須玉町大小久保遺跡で土師器を焼いたと思われる平窯が、町教育委員会によって発掘されておりますが、この近くに布目瓦や須恵器を焼いた窯の存在も想定されております。中世の窯跡は、遺跡としても文献上でも発見することができず、皿・坏・土鍋などの土師質土器がどこで生産されたのか分かっておりません。

江戸時代後半になって甕や瓦、あるいは土人形などの生産が活発となり、各地に窯が築かれたようですが、有田の磁器、瀬戸の陶器、常滑甕などの運搬が盛んとなるにつれて衰退し、中央線の開通によって多くの窯は閉じられたと言われます。

今回の窯跡分布調査によって、本県の窯業史の一端が把握できたものと思われませんが、このほかにまだまだ多くの窯跡が地中に眠っているものと思われれます。本書を窯業遺跡の基礎データとしてご利用いただくとともに、更に充実した内容になりますよう、今後ともご尽力をお願いする次第です。末筆ながら、本調査にご協力いただいた市町村教育委員会、窯跡の地権者、直接作業に当たられた方々に厚く御礼申し上げます。なお、窯跡出土炭化材の鑑定に当たられた東京都埋蔵文化財センター千野裕道氏には、ご多忙のところ貴重な成果をお寄せいただき幸甚に存じております。

1990年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

例 言

- 1、本報告書は、文部省の補助金を受けて、1987年度、1988年度、1989年度の3年計画で実施した『生産遺跡（窯業遺跡）分布調査』の報告書である。
- 2、本報告書は末木 健が編集し、第I章～第IV章は末木 健が、付録は財団法人東京都埋蔵文化財センター千野裕道氏が執筆した。
- 3、写真撮影は末木 健が行ったが、小倉焼窯跡出土品の撮影は長谷川毅郎（日本写真家協会会員・東京写真専門学校講師）による。
- 4、調査の採集品・出土品・写真・図面は、山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 5、本調査の分布調査・参加者は次のとおりである。

＜1987年度＞ 小田切絹子、渡辺鈴子、飯田美代子、宮川真由美、戸田富士子、小林敬子、斉藤さつき、深田淡路、小林佐津恵、宮川好子、春田永子、長田すみ子、田中春美、佐野靖子、八房静江、小川苗美、竜沢みち子、弦間千鶴、小林としみ、＜1988年度＞石原はつ子、梅林はなの、田中弘子、長田久江、長田くみ子、長田可祝、出月遊亀子、水川志津子、奥水久子、斉藤チトセ、五味宮子、吉野美恵子、丸茂貴江、丸茂たつ子、丸茂ふさ子、長田和子、矢崎悦子、出月満寿江、矢崎ます子、宇野文子、＜1989年度＞出月遊亀子、長田久江、石原はつ子、梅林はなの、宇野和子、小林としみ、長田明美、長田くみ子、保坂吾良吉、飯室力、内藤賢一、中込よしみ、矢崎米子、矢崎ます子、小林敬子、小林よ志子、米山八重子、米山とくの、斉藤多喜子、斉藤つね子、斉藤百代、土屋ふじ子、塩島富美子、中沢典子、中沢美智子、出月満寿江、江川勝子、塩島博夫、内藤真知子、雨宮穂波

- 6、この調査にあたっては、次の組織や方々に御指導及び協力をいただいた。記して謝意を表したい。

文化庁記念物課、同山崎信二・佐久間豊・松村恵司、境川村教育委員会、境川村文化財審議会委員、敷島町教育委員会、甲府市教育委員会、同信藤裕仁、甲府市市史編纂室数野雅彦、須玉町教育委員会、同山路恭之助、双葉町教育委員会、双葉町宇津谷諏訪神社総代、双葉町郷土研究会、若草町教育委員会、同町誌編纂室、増穂町役場長沢みなぶ、甲府市愛宕神社、高根町教育委員会、同雨宮正樹、谷口彰男、大柴宏之、中込茂樹、小池正蔵、甲斐地窯研究家丹後裕美、帝京大学山梨文化財研究所、同波木井市郎・河西学、相川春樹、吉田貞臣、内田勇、小林正博、丸茂恒夫、清水正博、小林愛造、岡亮一、春田正長、春田昭吾、竜沢勲、久保幸平、相田泰雄、重田紀子、太田孝、東京都教育庁文化課蟹江康子（願不同・敬称略）

目 次

序 文			
第 I 章 調査経過	1	
第 1 節 調査目的	1	
第 2 節 調査方法	1	
第 3 節 調査組織	1	
第 II 章 窯業遺跡の分布	2	
第 1 節 遺跡分布	2	
第 2 節 窯業遺跡一覧表	3	
第 III 章 窯業遺跡の概要	5	
第 1 節 古代の窯	5	
1、下向窯跡 5	2、牛居沢窯跡 7
3、天狗沢瓦窯跡 13	4、川田瓦窯跡 25
5、上土器瓦窯跡 31	6、大小久保遺跡 40
7、前田遺跡 46	8、大坪遺跡十郎橋地点 48
9、荒神山遺跡 50	10、権現堂遺跡 52
11、上ノ段遺跡 55		
第 2 節 中世・近世の窯	57	
12、信玄焼窯 57	13、武骨焼窯 57
14、宇津谷峠腰窯跡 59	15、宇津谷諏訪神社窯跡 66
16、加賀美瓦窯跡 70	17、下積翠寺瓦窯跡 72
18、平林瓦窯跡 73	19、境瓦窯跡 74
20、下条南割窯跡 74	21、一蓮寺窯跡 75
22、龍地窯跡 76	23、下向瓦窯跡 76
24、不動窯跡 79		
第 3 節 近代の窯	80	
25、秋山焼窯跡 80	26、愛宕焼窯跡 83
27、小倉焼窯跡 84	28、東洞瓦窯跡 100
29、甲運瓦窯跡 101	30、里垣瓦窯跡 102
31、龍地瓦窯跡 103	32、甲斐ヶ根焼窯跡 104
第 IV 章 結 語	105	
付 編 1、牛居沢窯跡における炭化材の樹種について	107	
2、天狗沢窯跡における炭化材の樹種について	110	

第I章 調査経過

第1節 調査目的

本県は古代より窯業生産活動が未成熟で、目立った産業として取り上げられた事がなく、わずかに、江戸・明治時代になって瓦などの生産が、甲府盆地や茅ヶ岳の裾野の粘土を使って起こされたにすぎない。しかし、古墳時代の埴輪・須恵器、白鳳時代～奈良時代の古代寺院の屋根を葺いた布目瓦の生産は、県内で行われていたはずである。たしかに、須恵器窯ではないかと言われていた境川村の牛居沢窯、同村下向山窯、寺本院寺の瓦を焼いた川田窯などは、数少ない山梨の窯として取り扱われてきたが、発見されたり調査された年代が十数年前ということもあり、しかも正確な資料が残されていないなど、謎に包まれている部分が多かった。

そこで、文化庁の理解と協力をえて、県内の窯業遺跡分布調査を、生産遺跡分布調査として行う計画を立案し、1987年度より国庫補助金を受けて、3年計画で分布調査を実施することとした。

第2節 調査方法

調査は①市町村教育委員会への周知の窯の問い合わせ、②過去の調査で発見されている地区の詳細分布調査、③窯跡推定地の試掘調査という3段階の方法で行った。①は64市町村への問い合わせに対して、回答が11市町村から寄せられている。その内訳は古墳時代2、奈良時代1、平安時代1、近世1、近代5、現代6、不明2の合計18地点である。②は1989年11月の一週間、分布調査作業員によって、旧来より知られている窯跡周辺の踏査を行った。③の試掘調査は、初年度5カ所、2年度4カ所、3年度2カ所の合計11カ所を調査した。試掘方法は窯跡推定地にトレンチを設定し、遺構の有無を確認する方法である。遺構の確認のみに重点を置いたため、遺構の一部しか調査をしていないので、全体の構造が不明なものも多い。また、詳細な分布調査で発見された窯跡推定地は、壁体などが採集できた地点のみを窯跡とした。また、境川村下向窯跡、甲府市川田窯跡、甲府市上土器窯跡の地中レーダー調査も行ったが、期待された成果は得られなかった。

第3節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会 教育長 川手 千興
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター 所長 磯貝 正義
調査担当者 山梨県埋蔵文化財センター 主査・文化財主事 末木 健
作業員（分布調査・整理作業）

別に記載（例言中）

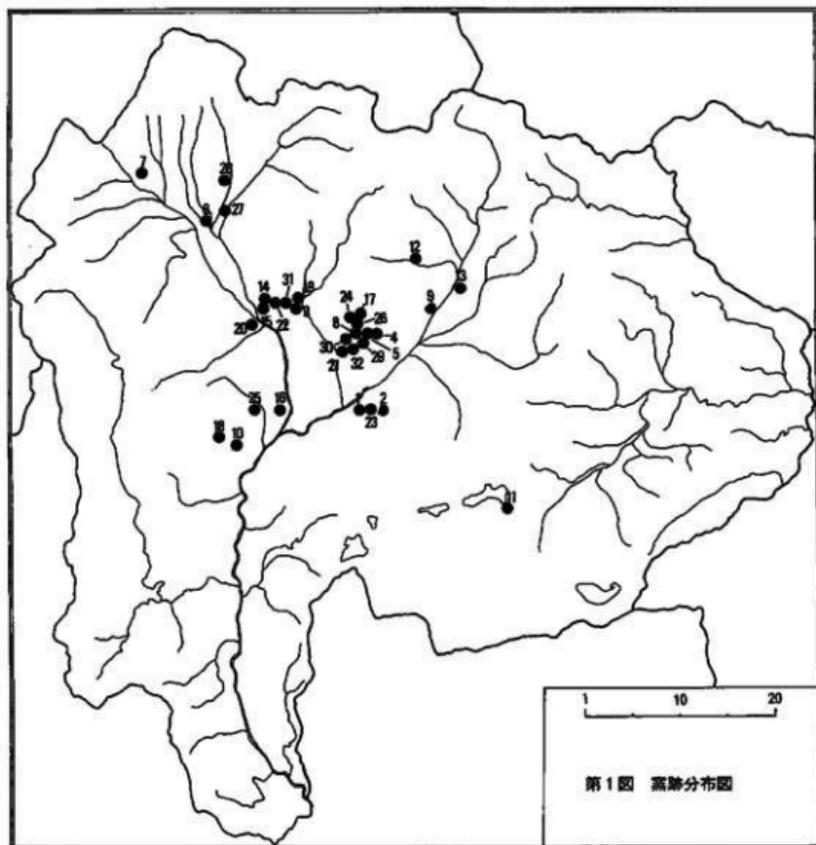
調査協力者

別に記載（例言中）

第II章 窯跡遺跡の分布

第1節 遺跡分布

窯跡の分布は、分布図に見られるように、甲府盆地を中心にして八ヶ岳山麓にまで分布している。甲府盆地では、甲府市東部の甲運・里垣地域を中心として、古代・近世・近代の窯が築かれる。この地域は広範囲に水性粘土が得られる。甲府市中心部の近代の窯は、甲府北部の花崗岩風化土を運んで製作されたものであるが、地元の土も混ぜられた可能性もある。赤坂台の周辺の窯は、茅ヶ岳山麓の粘土を使用したもので、近代に明野村に築かれた瓦窯などもこの山麓の粘土を利用したものであろう。八ヶ岳山麓の窯は山麓の土を使用したものであるが、粘土の量が少なく、長時間大量の生産を行うことが出来なかったようである。



第2節 窯業遺跡一覧表

No.	窯跡名	所在地・土地所有者	時代	生産品	備考
1	下向窯跡	東八代郡境川村三柵 字下向 三柵共同墓地	古墳時代	須恵器(壺・高坏)	不明
2	牛居沢窯跡	東八代郡境川村藤袋字 牛居沢(竜沢敷)	古墳時代	須恵器	3基
3	天狗沢瓦窯跡	中巨摩郡敷島町天狗沢 (相川春樹 吉田貞臣)	白鳳時代	須恵器 軒丸瓦・平瓦・丸瓦	3基
4	川田瓦窯跡	甲府市川田町245-2 (重田紀子 他)	白鳳時代	軒丸器・平瓦・丸瓦	不明
5	上土器瓦窯跡	甲府市桜井町字上土器237・ 246番地(内田勇・山田哲)	奈良時代	軒丸瓦・軒平瓦・ 平瓦・丸瓦	3基 以上か
6	大小久保遺跡	北巨摩郡須玉町下黒沢 字大小久保(就中城工部跡内)	平安時代	土師器(坏・蓋・壺)	8基
7	前田遺跡	北巨摩郡小淵沢町下笹尾 字前田	平安時代	土師器(壺)	2基
8	大坪遺跡 十郎橋地点	甲府市橋根町十郎橋地点 十郎川左岸	平安時代	土師器(坏・皿)	不明
9	荒神山遺跡	山梨市東576	平安時代	土師器(坏・皿)	3基
10	権現堂遺跡	南巨摩郡増穂町春米 字権現堂	平安時代	泥塔	1基
11	上ノ段遺跡	南都留郡河口湖町上ノ段			1基
12	信玄焼窯	東山梨郡牧丘町西保	中世(?)	茶碗・土鍋・玩具	不明
13	武骨焼窯 (信玄焼窯)	塩山市三日市場3237 (真島孝三)	江戸時代 安政元~元治初期	茶碗・壺・鉢・玩具	不明
14	宇津谷峠の腰 窯跡	北巨摩郡双葉町宇津谷 字峠の腰1314	江戸時代 (文化・文政)	壺・鉢・播鉢・玩具 *甲斐国志*年貢明細	1基
15	宇津谷 諏訪神社窯跡	北巨摩郡双葉町宇津谷 藤塚 諏訪神社境内	江戸時代 (文化・文政)	茶碗・鉢・播鉢・壺 *甲斐国志*年貢明細	1基
16	加賀美瓦窯	中巨摩郡若草町加賀美	江戸時代 (享保元年~)	瓦	30~40基
17	下積翠寺瓦窯跡	甲府市下積翠寺町1054・ 1190・1094・457-1番地他	江戸時代 (元治元年~)	瓦 *年貢明細目録	不明
18	平林瓦窯跡	南巨摩郡増穂町平林 字椿島	江戸時代 (弘化年間)	瓦・播鉢・祠	不明

19	境瓦窯跡	中巨摩郡敷島町境字西川 神明社南側	江戸時代 弘化年間～	瓦	不明
20	下条南割窯跡	韭崎市下条南割 所在地不明	江戸時代 (文化年間)	甕 *甲斐国志	不明
21	一連寺窯跡	甲府市太田町5-6付近 所在地不明	江戸時代 (文化年間)	土器 *甲斐国志	不明
22	龍地窯跡	北巨摩郡双葉町竜地 所在地不明	江戸時代 (文化年間)	土鍋 *甲斐国志	不明
23	下向瓦窯跡	東八代郡境川村三割 (清水正博)	江戸時代	瓦	1基
24	不動窯跡	甲府市塚原町字不動 小字茶碗屋	江戸時代?	鉢・蓋	不明 (1基)
25	秋山窯跡	中巨摩郡甲西町秋山1136 (古郡計也)	明治時代	日用雑器、陶器(壺・甕・鉢・置物・茶碗外)	不明
26	愛宕窯跡	甲府市愛宕町141付近 愛宕神社境内	明治時代 9年2月～	日用品・花瓶	不明 (消滅)
27	小倉窯跡	北巨摩郡須玉町小倉2738 (丸茂恒夫)	明治時代	日用雑器、陶器(壺・甕・鉢・播鉢・茶碗外)	3基
28	東洞瓦窯跡・外	北巨摩郡高根町村山北割 282外 義見善光・義見市三郎	明治時代～	瓦	2基 (消滅)
29	甲運瓦窯跡	甲府市川田町・桜井町・ 和戸町、石和町松本	明治時代 12年～	瓦年20万枚	不明
30	里垣瓦窯跡	甲府市善光寺・酒折	明治時代 12年～	瓦年8万枚	不明
31	龍地瓦窯跡	北巨摩郡双葉町竜地・ 下今井	明治時代	瓦	不明
32	甲斐ヶ根焼窯跡	甲府市城東(深町)	大正3～ 昭和5	花瓶・菓子器・木食上 人像・御嶽の鈴	不明

県内の窯跡調査の結果は以上の通りであるが、このほかに窯跡と伝えられている場所がありこの調査も実施している。1988年には境川村室屋遺跡・子の神社遺跡・温湯遺跡の3カ所を試掘調査したが、いずれも窯跡と考えられるような壁体・焼土などは検出できなかった。また、高根町清里の三軒茶屋で、かつて大量の土器が発見されたと言われるが、現在では造成され出土場所は明らかではない。また、明治以降は各地に瓦窯が築かれ、ここに取り上げた以外にも明野村、須玉町、櫛形町などで操業されたという伝えがある。さらには、近代になって活躍を始めた各地の陶芸作家も多いが、紙面の都合上、これらを網羅することはできなかった。

第三章 窯業遺跡の概要

第1節 古代の窯

1. 下向窯跡（しもむこう）

場所 東八代郡境川村三柵字下向 三柵共同墓地内

時代 古墳時代

製品 須恵器 坏蓋・高坏・甕など

曾根丘陵の一角、標高392mの坊ヶ峰の裾が、北側の甲府盆地に突き出している、その先端に小丘がある。小丘の上に口開塚が位置し、横穴式石室の石材が散乱している。窯跡は小丘の南面にあったと言われ、発見年代は明らかではないが、地元の清水新吾氏が墓壇を掘り下げた際に、大量の焼土と須恵器が出土し、その断面には蒲鉾状に焼土の輪が確認されたという。このときに採集された遺物は第2図に示してある（橋本博文 1979 「甲斐における須恵器生産」『丘陵』6号）。

この窯跡の確認のために、1987年12月1日～11日の間、遺構確認のための試掘調査を実施したところ、焼土・須恵器などは発見できなかった。このため、地中レーダー探査によって、窯跡の確認を行おうとしたが、レーダーのデータ解析によっても、窯跡の存在を確認することはできなかった。

遺物の特徴（橋本報告より引用）

1) 有蓋高坏(1) 長脚に二段透かしを有する。透かしは長方形のものが二段三方向に切り抜かれ、段を画するように2本の浅い沈線が横走する。脚は長く裾をひき、脚端部は指ナデで若干凹むが、それ程エッジをもっていない。しかし、内側にやや稜をもつ。坏部は浅く、口縁の立ち上がりは短く内傾する。坏部底部内面に軸輪整形による渦痕が残っている。なお、蓋と思われる口縁部破片が坏部内面に逆さになって溶着している。胎土・焼成・色調は大甕に類似する。

2) 坏蓋(2) 口縁部は外方に開いて端部は丸まっている。口縁部と天井部との境の稜が不明瞭であり、天井部に一本浅い沈線が廻る。回転ヘラ削りは天井部の平らな面の小範囲に施されている。色調は灰白色を呈し、表面が脆弱で瓦質に近い焼きである。胎土は前者と同じであるが、若干大粒の砂粒の混入が少ない。復元器高3.9cm、口径15.1cmを測る。

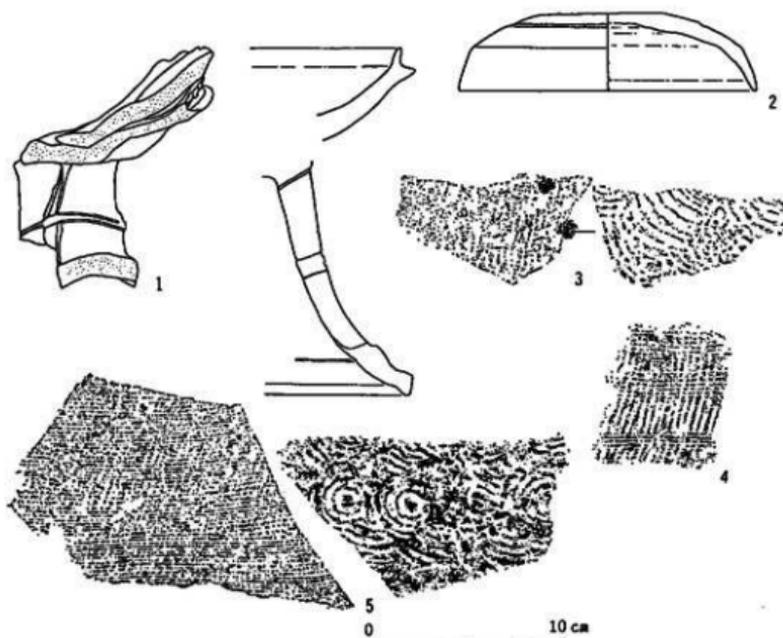
3) 大甕(3～5) 胴部破片において、内面の青海波文は未調整で、外面の平行叩目はそのままのものと、カキ目が粗く入るもの、カキ目が叩目を完全に消しているものの三者が存在する。器厚10～19mmと厚手で、胎土中に後背地母岩である石英閃緑岩の径1～8mmの砂粒がかなり入り不良である。焼成は良好で、色調は鼠色を呈する。

以上、特に有蓋長脚二段透かし高坏と、坏蓋の諸特徴から、田辺昭三氏の陶器編年によるTK209型式に比定される。

参考文献 橋本博文 1979 「甲斐における須恵器生産」『丘陵』6号



1-下向窯址 2-牛居沢窯址 3-子の神社窯址 4-手古松山田窯址 5-小黒板熊野神社窯址



第2図 下向窯址出土須恵器

2. 牛居沢窯跡（うしいざわ）

場所 東八代郡境川村藤袋字牛居沢

時代 古墳時代

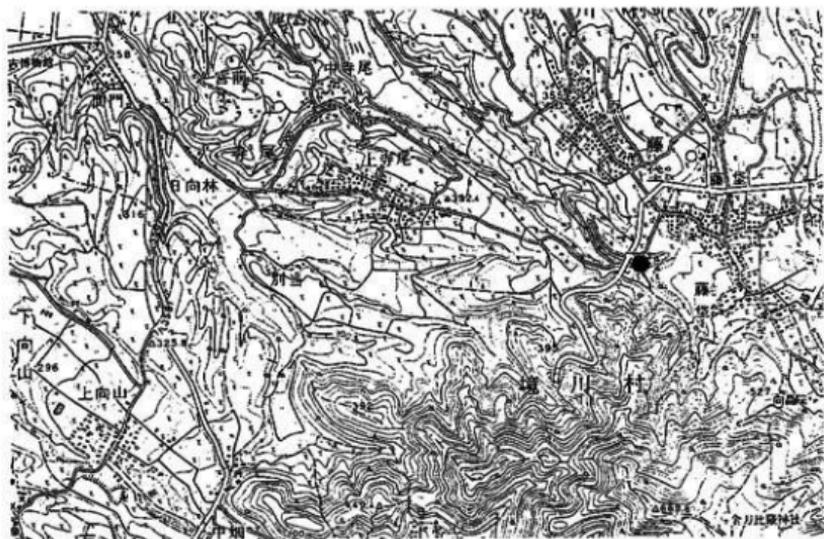
製品 須恵器 坏・蓋・高坏・甕・壺・鉢

境川村役場の西側、芋沢川をまたぐ金川曾根地区広域農道の金比羅橋のたもとに位置し、曾根丘陵の台地上面から僅か10m程下った、標高350m程の南西斜面に窯が3基並んで検出された。『境川村誌』（1978）にもその存在が記述されている。遺跡は寺尾と藤袋を結ぶ旧道（車通行以前の道）の開削によって発見されたものであるが、正確な調査が行われたことはなかった。

この遺構確認のために、試掘調査を1987年11月10日より27日まで行い、3基の窯跡を検出することができた。調査着手時の旧道はブッシュになっており、遺構の位置は不明であったので、3本のトレンチを等高線や旧道に沿って設定した。除草・表土除去を行ったところ、旧道のつづらおれのカーブで焼土が検出され、焼土と灰の中から須恵器破片が出土した。これを1号窯とし、この西側の窯を2号、東の窯を3号と命名した。いずれも無段登り窯である。

① 遺構

1号窯一現存全長5.5m、幅1.2mで、このうち灰原が2mほどある。灰原からは須恵器及び木炭、壁体などが出土している。窯底の傾斜は15度である。焼成部窯底から受け部のある須恵器坏破片が出土し、創業時期を決める手掛りとなった。



第3図 牛居沢窯跡位置図

2号窯—現存全長3m、幅1.4mで、窯の焼成室のみが残り、燃焼室、灰原は後世の擾乱によって破壊されている。壁体の一部及び窯底は赤色に焼けており、相当堅くなっている。窯底には礫が階段状に2～3段並べられ、その付近から赤色の須恵器甕破片が出土している。窯底の角度は約30度である。

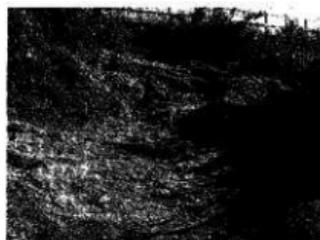
3号窯—調査長2m、幅1.3mで、焼成部煙道あたりは擾乱を受けており、焼成部・灰原は未調査である。窯底の傾斜は28度、内部より須恵器の坏・蓋・甕破片が出土している。

② 遺物

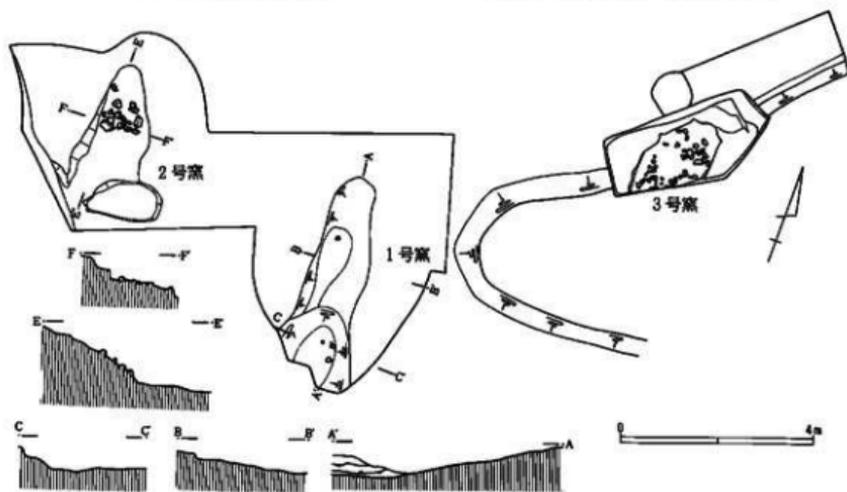
1号窯窯底発見の須恵器坏破片が創業時期を示すものと考えられる。この須恵器は、口径10cmの低く内傾した口縁部があり、受け部は短く水平に付けられる。このほか受け部がない坏及び坏蓋、脚部に沈線と稜をもつ高坏、甕、鉢などがある。陶器編年ではⅡ-6、愛知県猿投窯編年では岩崎17号窯式（7世紀第3四半期）におかれる。1～3号窯はほぼ同時期の操業と推定できよう。



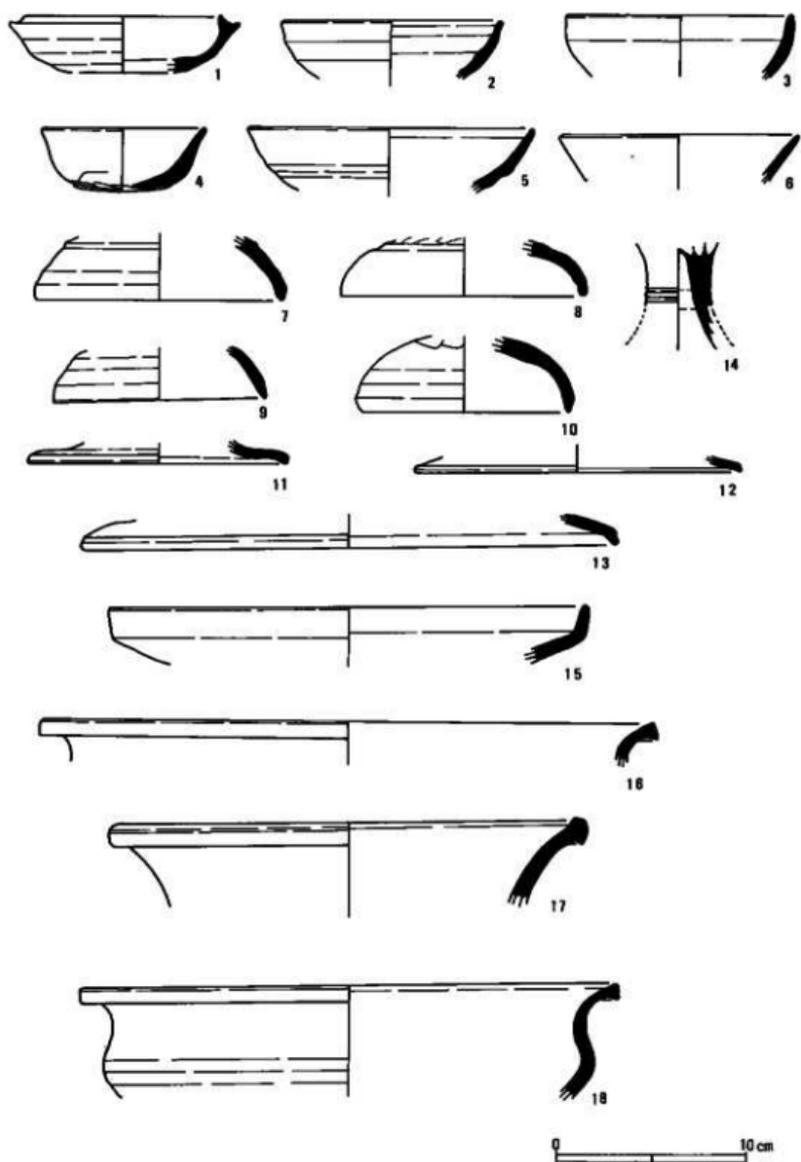
牛居沢窯遺景（中央斜面）



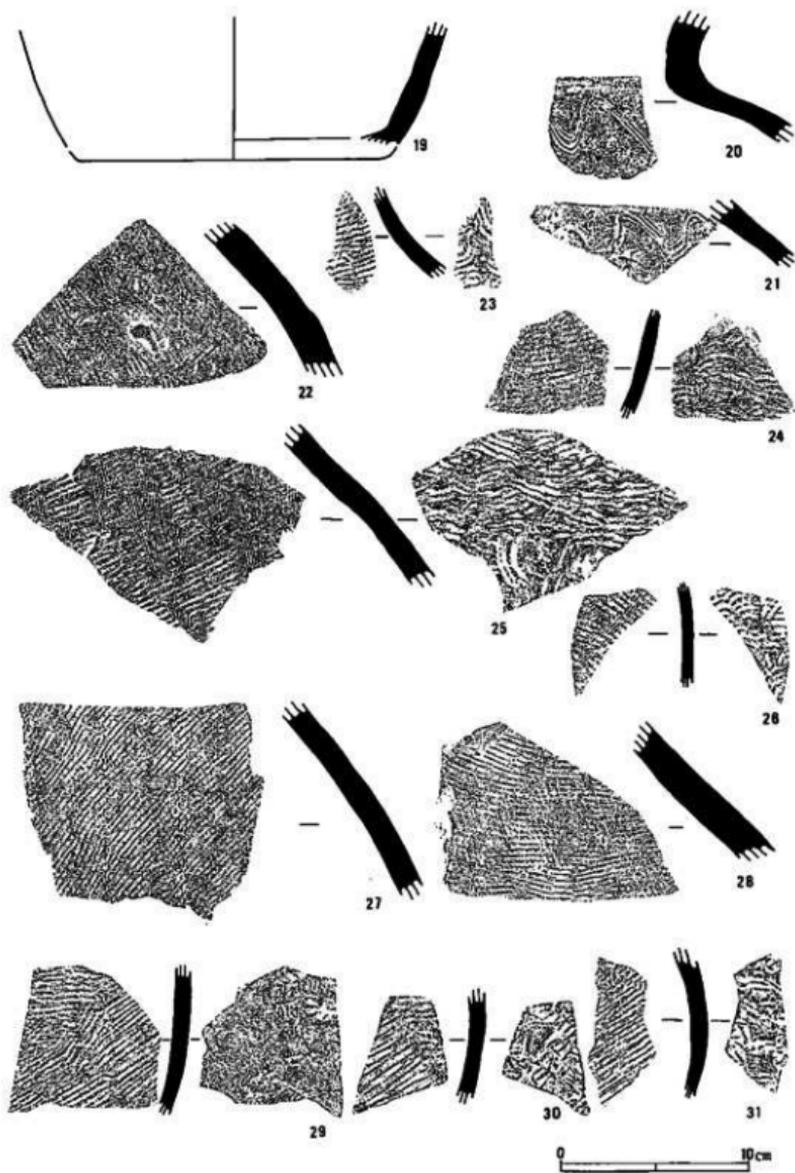
牛居沢1号窯(手前)2号窯(中央上)



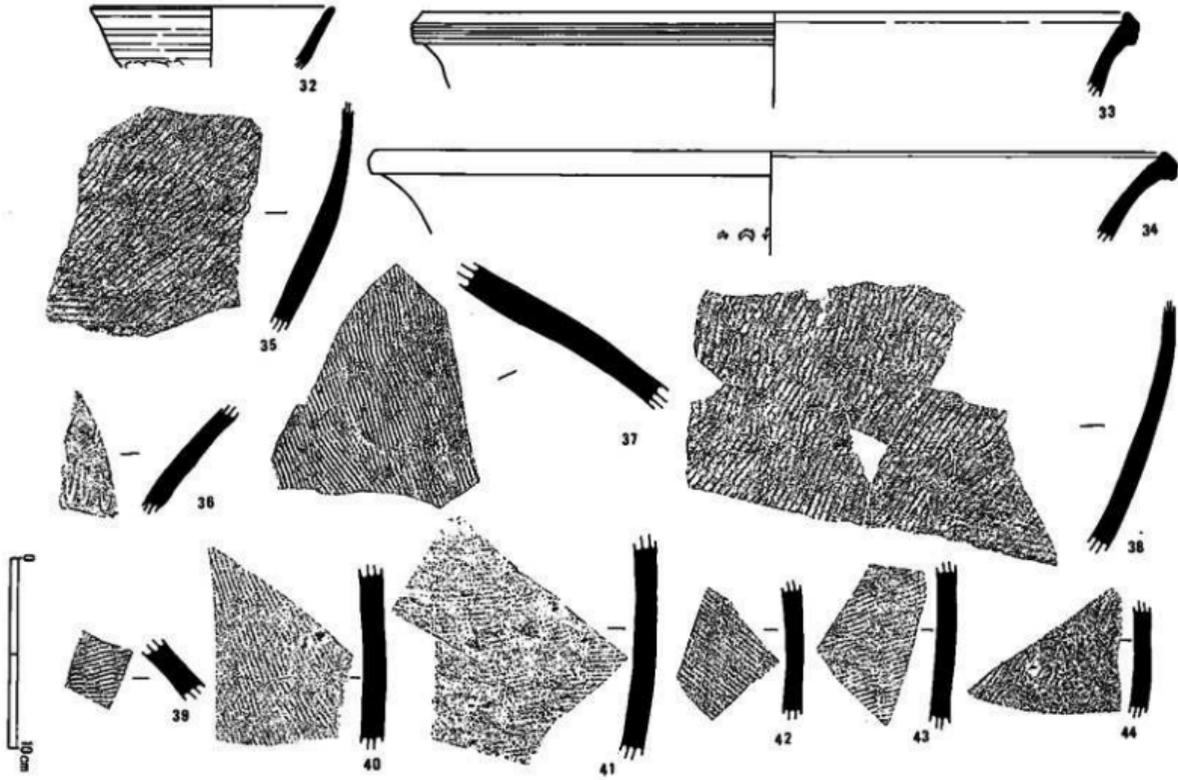
第4図 牛居沢窯全体図



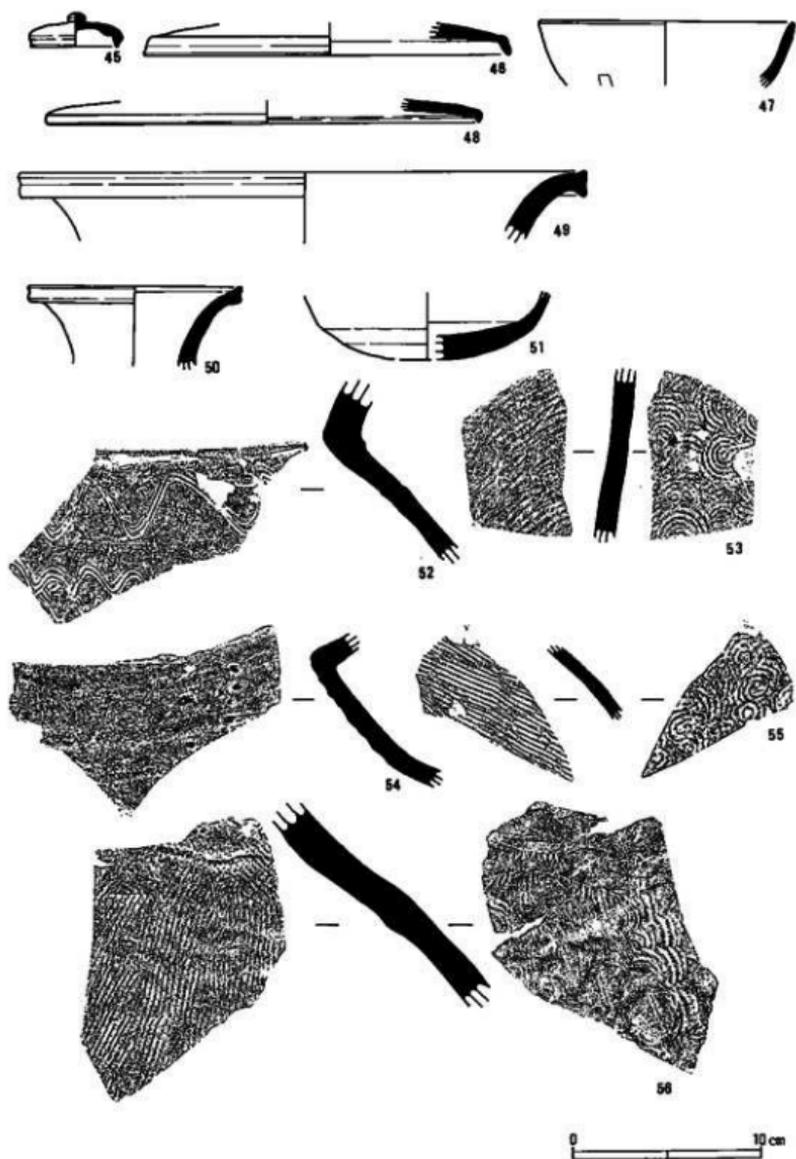
第5圖 牛居沢1号窯出土遺物1



第6图 牛居沢1号墓出土遺物2



第7图 牛腰沱2号新出土器物 1



第 8 图 牛居沢 3 号冢出土遺物 1

3. 天狗沢瓦窯跡（てんぐさわ）

場所 中巨摩郡敷島町天狗沢字北川

時代 古墳時代（白鳳時代）

製品 瓦（軒丸瓦・平瓦・丸瓦）・須恵器（坏・高坏・鉢・壺・甌・円面硯）

甲府市西側に隣接する敷島町天狗沢の丘陵南斜面に位置している本窯跡は、町教育委員会が昭和61年～63年に行った3次にわたる発掘調査で、3基の窯跡とそれを取り囲む溝を検出した。また昭和63年度には、山梨県埋蔵文化財センターが生産遺跡部分布調査の一環として、周辺の試掘調査を行い、窯跡の広がりを確認した。

検出された遺構の規模は次のとおりである。

1号窯 窯の全長9m、幅80～90cm、窯の内部は7段の階段があり、焼成部は4m、燃焼部と灰原は段差がない無段構造をしている。現存する壁は高いところで80～90cmほど残っており、地下式無階有段登り窯構造である。焼成部の床は傾斜が約22度である。灰原からは長さ8m、幅40～60cmの排水溝が南側に掘られ、また、窯の北側には逆U字の溝が巡らされている。これらの溝は雨水や地下水から窯を守る施設であろう。遺物は灰原及び溝中から出土しており、灰原には焼土、木炭、須恵器、瓦などが大量に検出された。窯内部からは瓦が若干出土しているが、燃焼部上面には2号窯から掻き出された瓦が堆積していた。

2号窯 1号窯の北西にあり、1号窯を取り巻く溝を埋め立てて造られている。全長約5m、幅1.75mで、1号窯に比べ幅広い窯である。焼成部には段が無く、燃焼部はコの字形に石が並べられている。窯の掘り込みは浅く、半地下式無段登り窯構造である。燃焼部には完形の平瓦



第9図 天狗沢瓦窯跡（1. 天狗沢 2. 墳瓦窯跡）位置図

が敷き並べられており、あたかも天井から崩落したままのように見受けられる。この窯の灰原は掘り込みがなく、燃焼部の下方に広がっている。この窯から出土した平瓦はほとんどが格子状叩目をもっており、1号窯が平行叩目の平瓦ばかりである点と大きく異なる。

3号窯 1号窯の北東に発見された窯で、全長5.4m、幅1.4m規模で、燃焼部と焼成部の境界は明確でなく、直線的な傾斜で続く。壁はほとんど削平されており、部分的に5～10cmが残るにすぎない。床には瓦、須恵器が粘土とともに塗り込められており、2～3枚の層が認められる。窯の南には丸瓦を連結した排水口が敷設され、その排水口の先端は1号窯を取り巻く1号溝に注がれている。

大溝 3号窯の北側に発見された溝で、幅2.5mのV字形の断面をしている。溝は台地の高い地区に向かって幅・深さが増し、南西側の低いほうに向かって狭く、浅くなり、金山神社の裏で消失する。溝の中からの遺物は3号窯の北側部分で最も多く、瓦・須恵器・礫などが出土している。

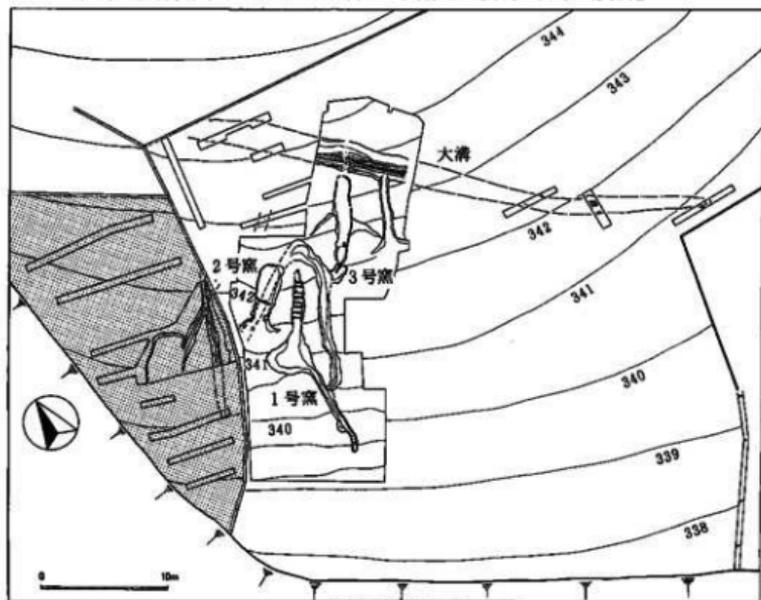
2号溝 2号窯西側の試掘調査では、1号窯操業中に不良品で埋めたてられ始めた2号溝がある。この溝は途中で、着物の袖状に膨らんでおり、ここに遺物が集中して廃棄されていた。

出土遺物

瓦（軒丸瓦2種、平瓦、丸瓦一行基式・玉縁式）、須恵器（坏・高坏・鉢・盤・甕・硯）

参考文献 敷島町教育委員会 1988 『天狗沢窯跡発掘調査概報』

敷島町教育委員会 1988 「天狗沢瓦窯跡第2次調査見学会資料」



第10図 天狗沢瓦窯跡全体図



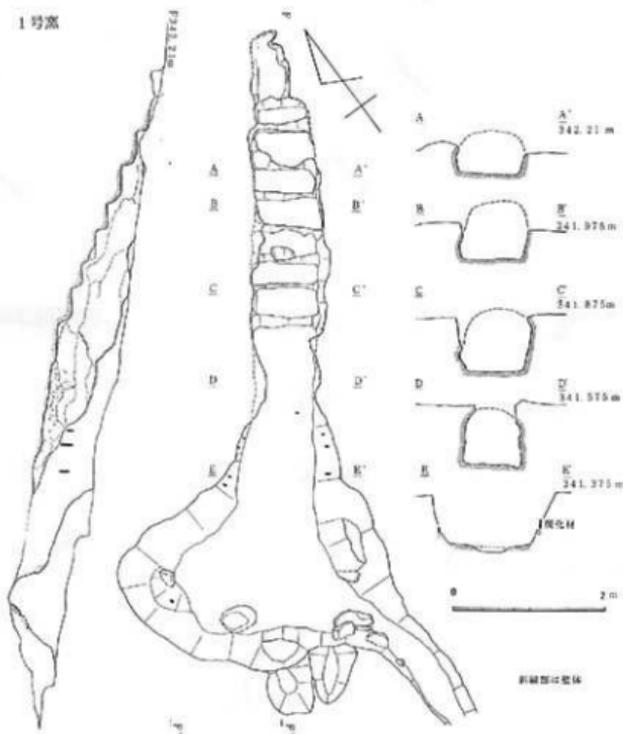
天狗沢1号窯



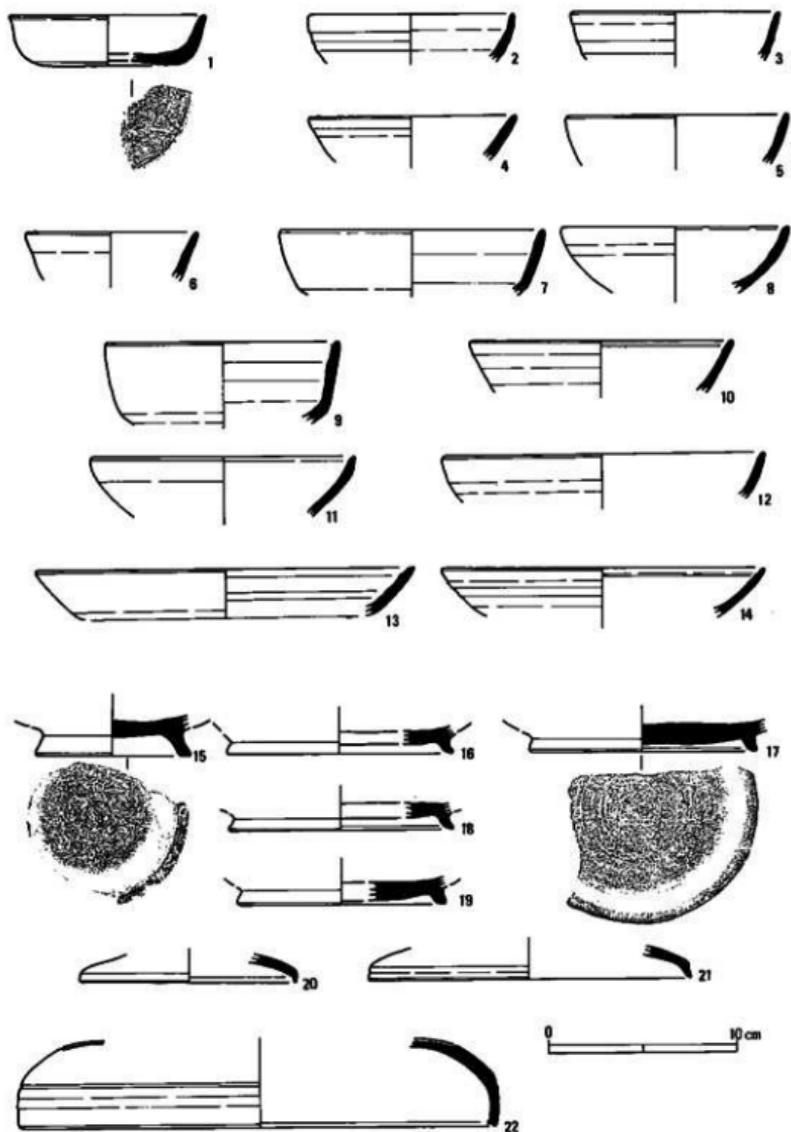
天狗沢2号窯



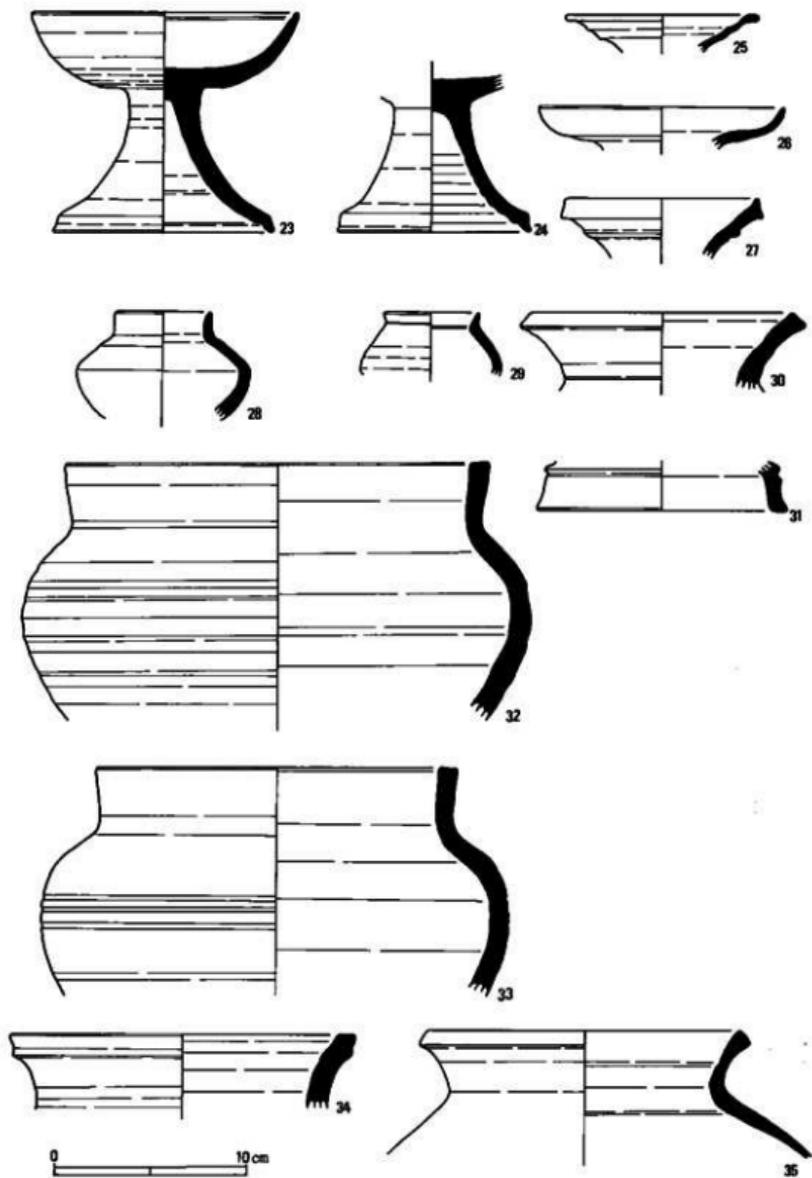
天狗沢3号窯



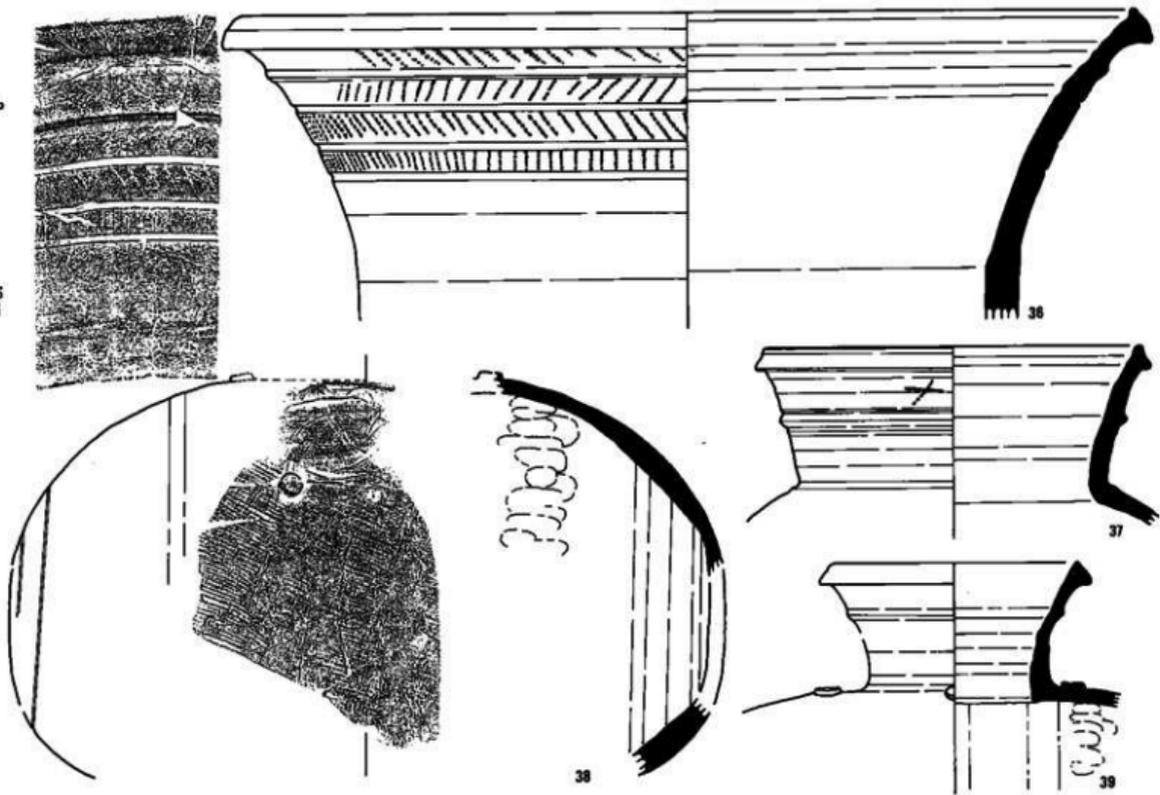
第11圖 天狗沢1号窯



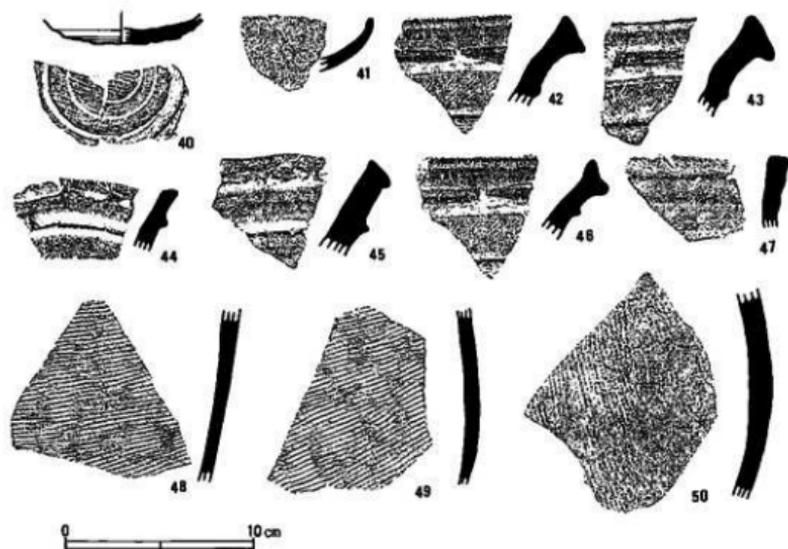
第12图 天狗沢瓦窯出土遺物 1



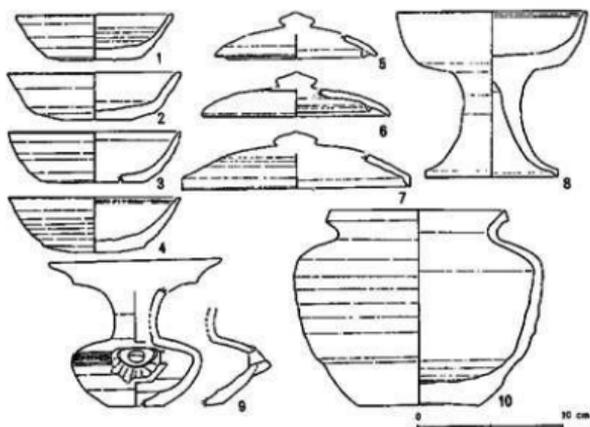
第13圖 天狗沢瓦窯出土遺物 2



第14圖 天狗沢瓦葺出土遺物 3

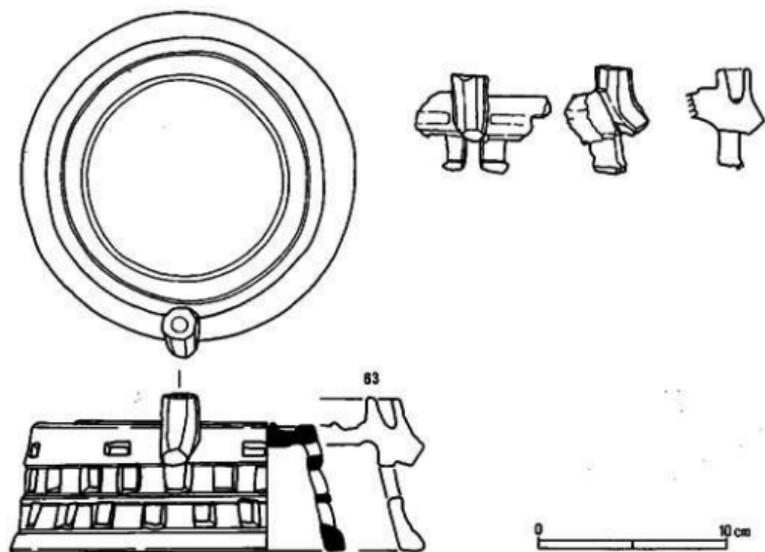


第15図 天狗沢瓦窯出土遺物 4

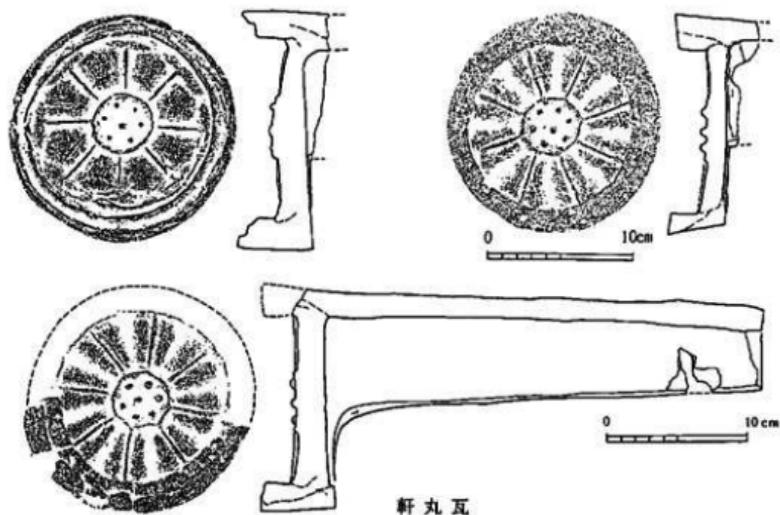


須恵器 (1/4) (10は歪みを推定復元)

第16図 天狗沢瓦窯 (1988. 報載より)

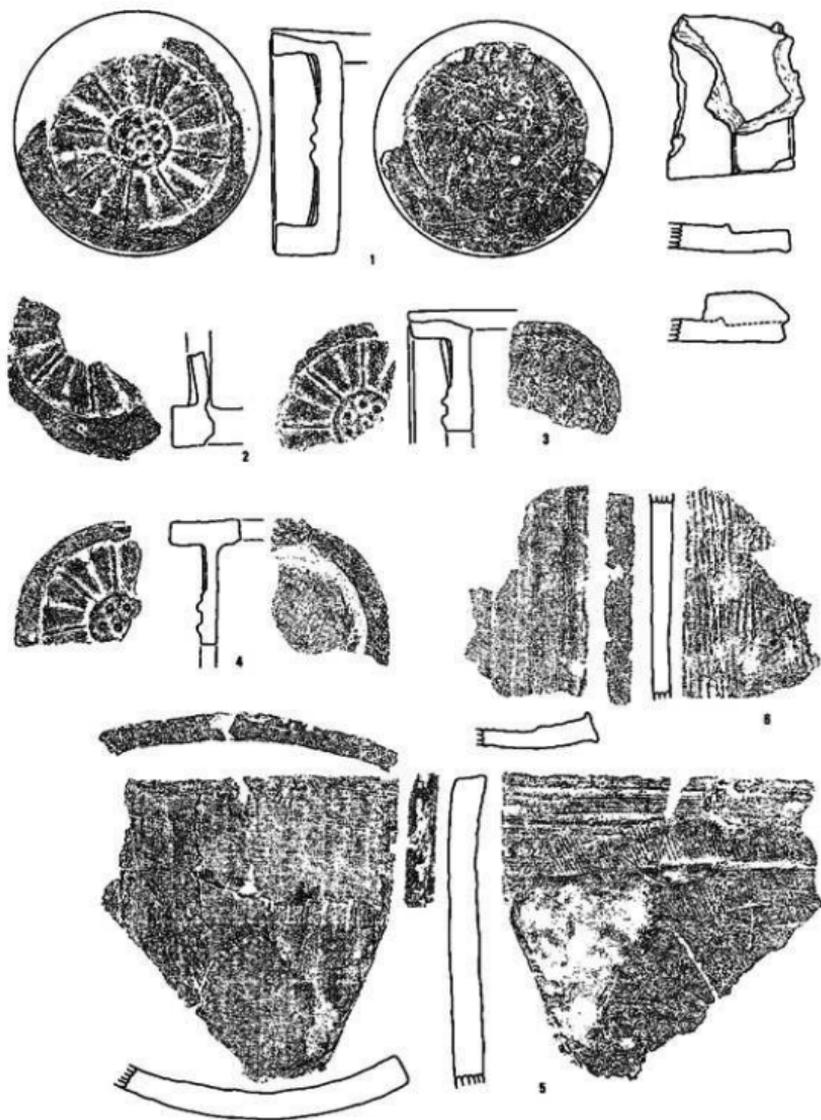


第17回 天狗沢瓦窯出土遺物 5 陶碗



軒丸瓦

第18回 天狗沢瓦窯出土遺物 6



第19圖 天狗沢瓦窯出土遺物 7



第20圖 天狗沢瓦窯出土遺物 8

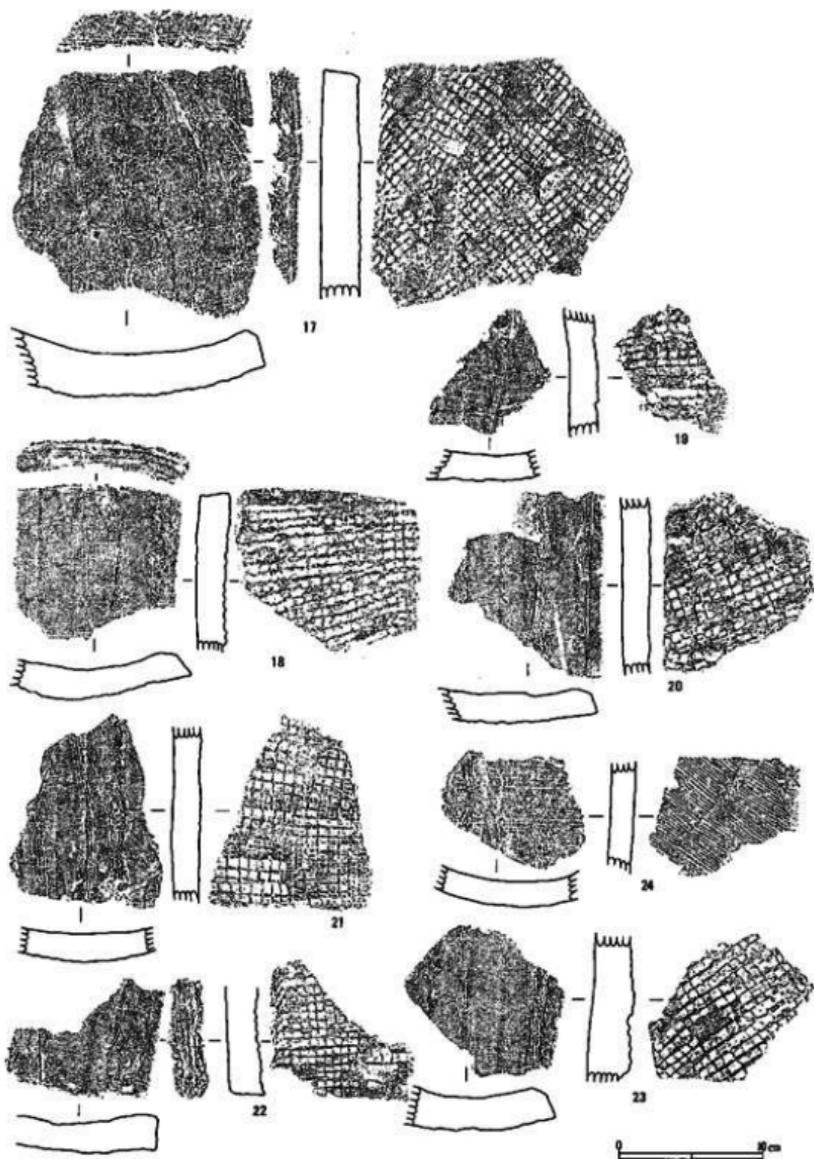


14

15

16

第21圖 天狗穴瓦屋出土遺物 9



第22图 天狗沢瓦窯出土遺物10

4. 川田瓦窯跡（かわだ）

場所 甲府市川田町245-2

時代 古墳時代（白鳳時代）

製品 瓦（軒丸瓦・平瓦・丸瓦・鷓尾・埴）

甲府市東部の平坦地にあり、盆地東縁を流れる笛吹川の支流、平等川の氾濫によって形成された微高地の縁に立地する。この付近一帯は良質の粘土が採取されるところから、古代より窯業生産地として注目されていたものと思われ、近代までにも幾つかの窯が存在した。

川田窯は昭和23年、中島正行氏によって発見された窯で、微高地の裾を流れる水路中より軒丸瓦、平瓦、鷓尾などが採取されている。



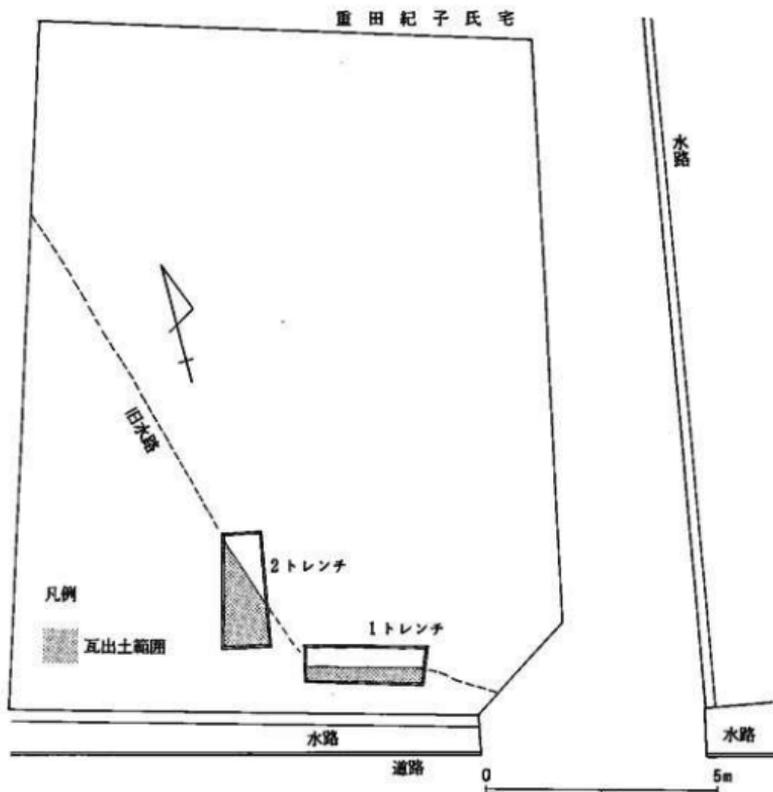
第23図 川田瓦窯跡位置図 1



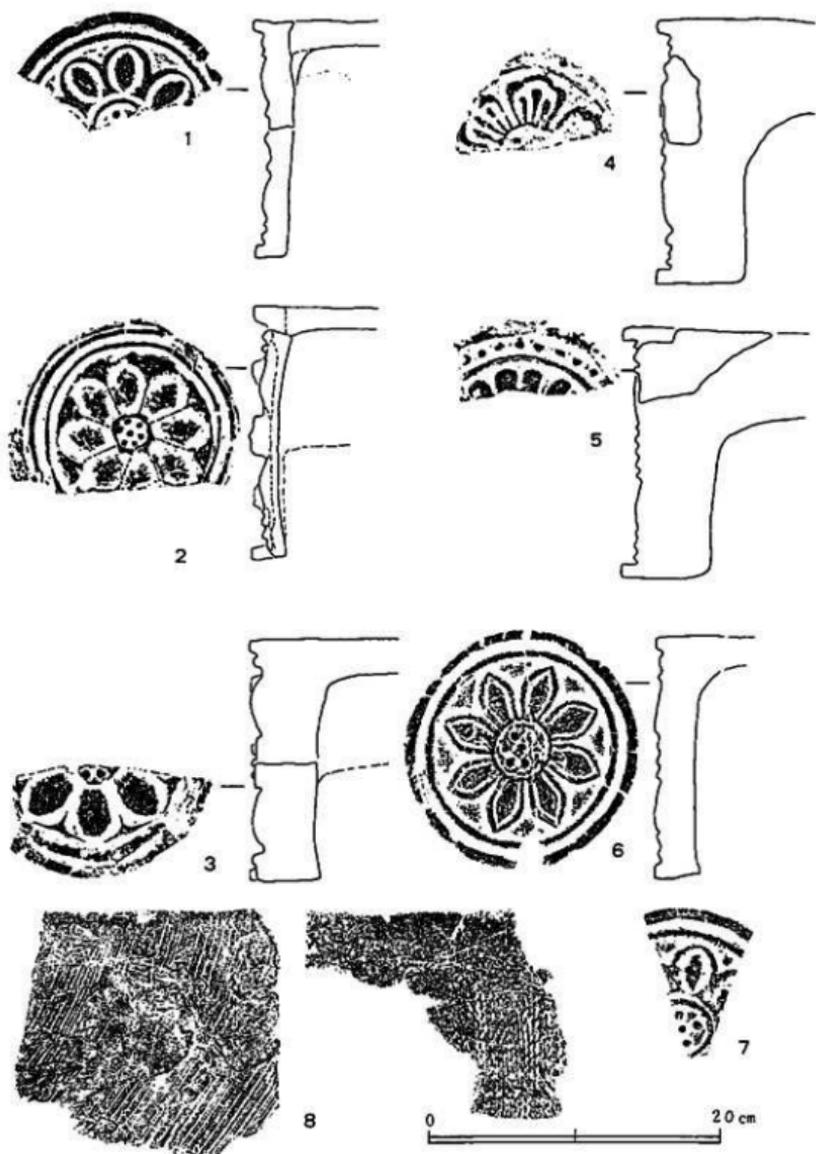
第24図 川田瓦窯跡位置図 2

中島氏は「現場の周囲から出土された多くは古瓦であり、瓦こそ発見されていないが、ほとんど廃品となつたらしい形跡の瓦ばかりである点、それが層をなして堆積された箇所のある点、或は丸瓦製作用の型らしいものの出土、窯爐口に積み重ねられた煉瓦らしく、矩形立体の瓦が発見されたこと。」などから「古窯跡であることは違論のない事実である」と報告している。氏の採集品中には、窯の中で溶着した平瓦もあり、窯跡であることは確実であるが、平成1年11月21・22日に試掘調査を実施したところ、水路に近い部分から焼土・炭・瓦などが大量に出土した。トレンチは2本をL形に設定した。中島氏の調査地区と今回の試掘調査地区はほぼ同地区と考えられるが、窯本体は戦後間もない粘土採取によって削平され、一部の遺構も検出できなかった。

微高地は平坦面よりも約1m程高く、窯は南斜面に構築されていたものと思われる。窯は瓦



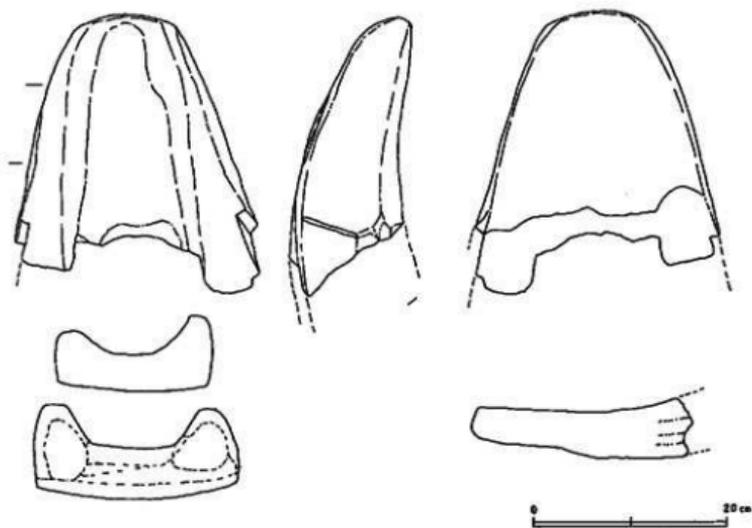
第25図 川田瓦窯トレンチ位置図



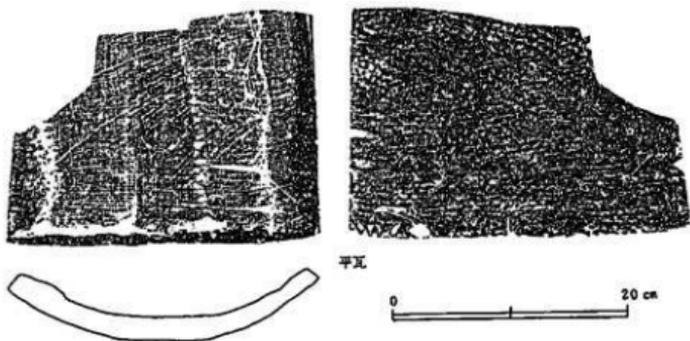
第26图 川田瓦京跡表面採集軒丸瓦実測图 (1948, 中島氏採集)

の散布域の広がりから、1基だけではなく3～5基位の数が存在したであろう。この窯が登り窯か平窯なのかは判然とせず、窯址群が存在したと思われる場所は完全に削平されているので検証の術がない。

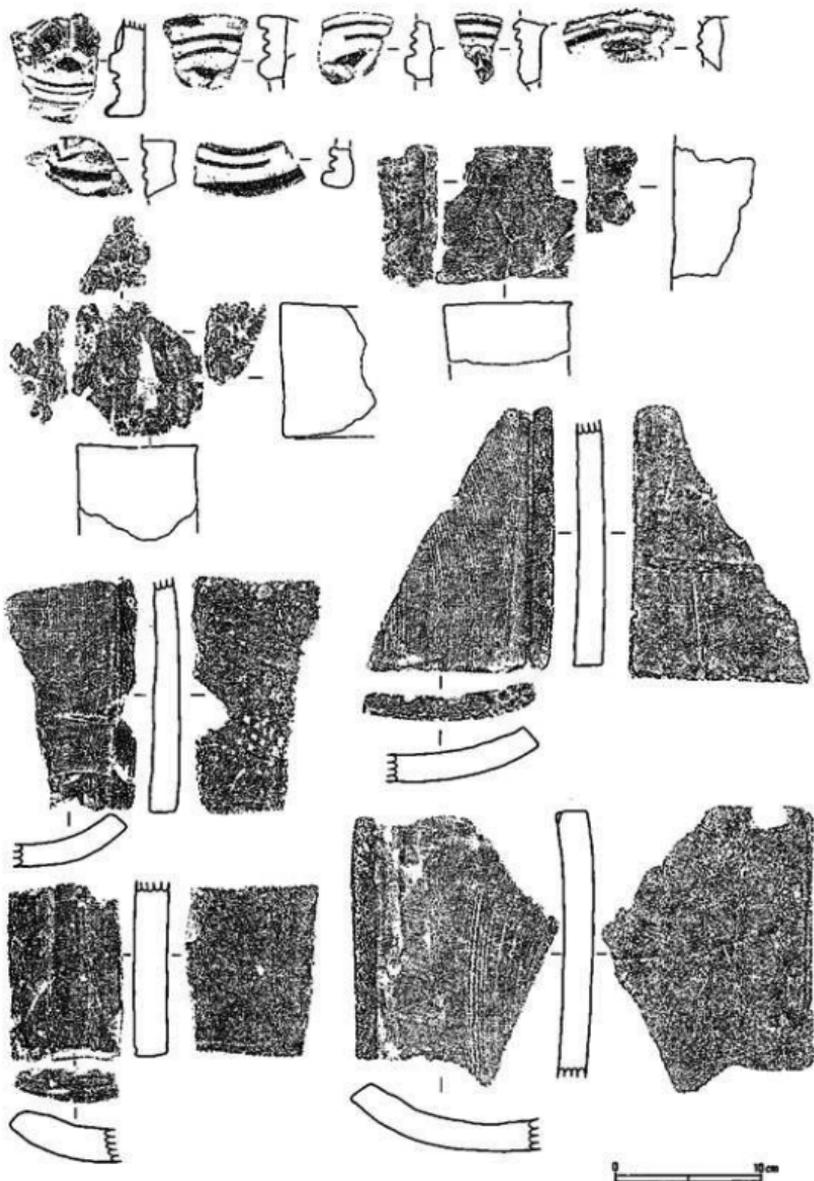
参考文献 中島正行 1948「甲斐国分寺瓦窯址発見経過報告」『郷土研究2号』



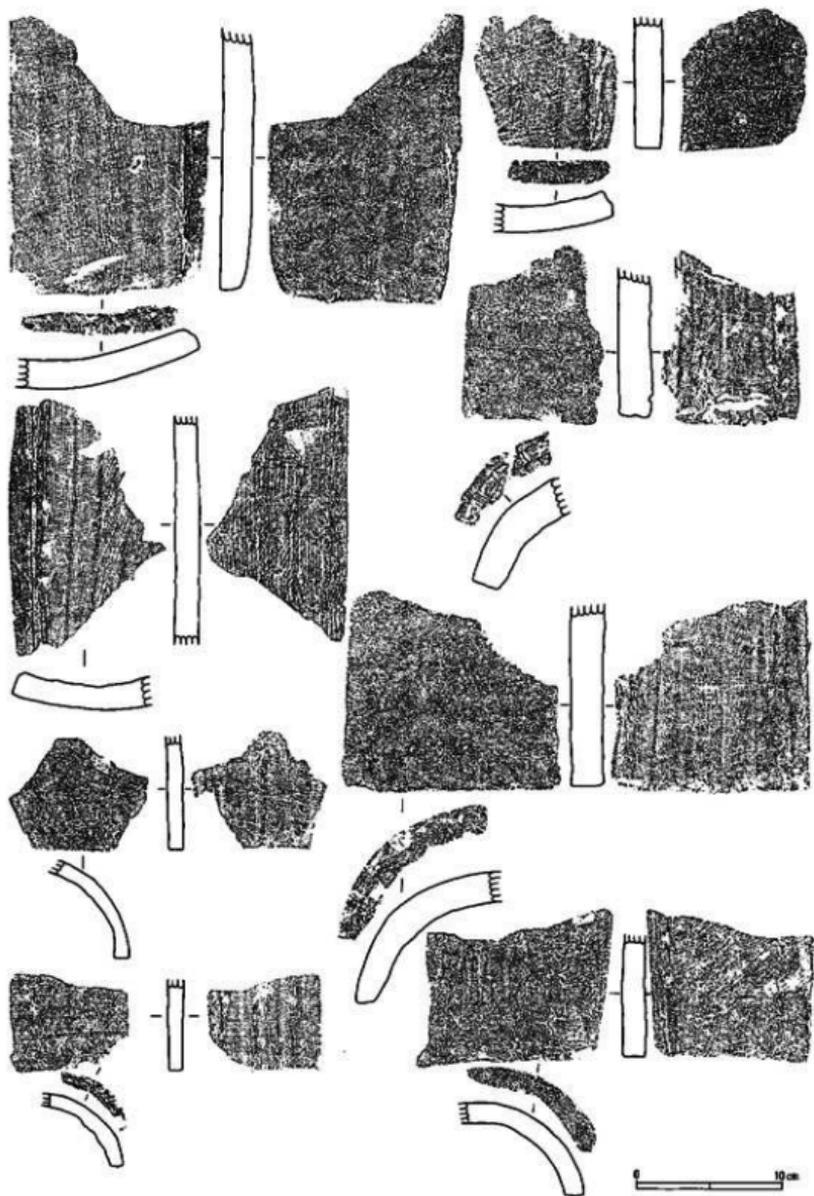
川田瓦窯跡採集陶瓦実測図 (1948. 中島氏採集)



第27図 川田瓦窯採集平瓦



第28圖 川田瓦窯出土瓦 (1989)



第29圖 川田瓦窯出土瓦(1989)

5. 上土器瓦窯跡(かみどき)

場所 甲府市桜井町上土器246・273番地他

時代 奈良時代～平安時代

製品 瓦(軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦)

1985年の甲府市内遺跡分布調査によって発見された遺跡で、1987年に市史編纂委員会により1号窯が発掘され、1988年には生産遺跡分布調査によって1号窯の西側の2号窯の調査が行われている。

1号窯

1号窯の報告は甲府市史資料編第1巻に記載されているので、これを一部引用する。

「立地環境 本遺跡は大蔵経寺山の南麓に広がる平地の一角、平等川や大山沢川が形成した沖積地上にあり、標高は約263mである。ブドウ園内に存在する本遺跡の北側には、東西に国道140号線が走り、南側にはJR中央線が併走している」

遺跡の調査は第32図に示したようなトレンチが設定され、このうち6号、7号トレンチから瓦・焼土ブロックなどの集中区が発見され、調査報告では、ここが窯の灰原と推定している。

「灰原は6号トレンチ内内側と7号トレンチ内に位置する。東西8メートル、南北6.5メートルの広範囲にわたって壁体、焼土、炭化物層を伴う瓦の集中散布が確認され、多量の瓦が10～15センチほどの厚さではほぼ水平に層をなして堆積していた。また、7号トレンチの中央やや西より瓦と壁体が濃密に堆積した場所が検出された。やや偏平のブロック状の壁体が1.7メートル



第30図 上土器瓦窯跡位置図1

ル×1.3メートルの範囲に積み重なるようにして集中しており、その上層・下層から、多量の瓦が出土した。」

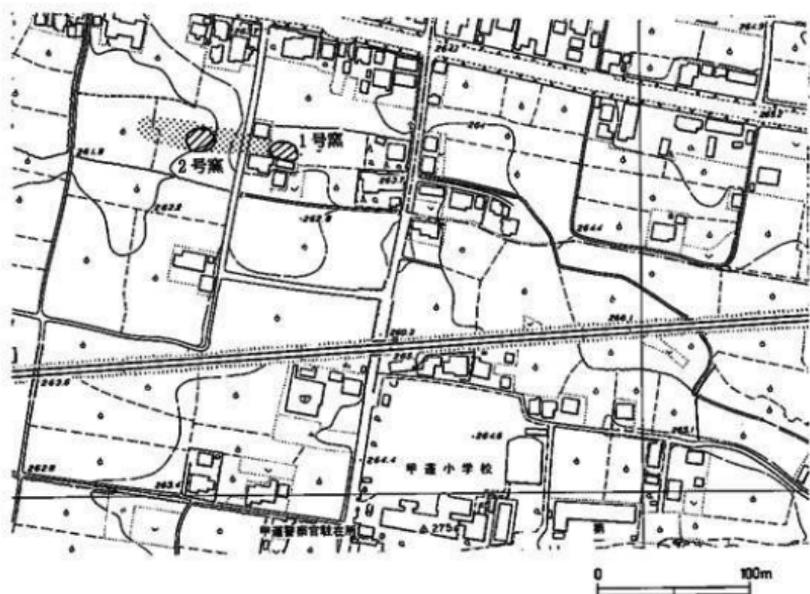
2号窯

1988年12月1日～9日の間、甲府市板井町上土器273番地の20㎡を、内田勇氏の承諾をえて発掘調査を行った。本窯址は1号窯の西側、約50mに位置し、更にその西側にも1～2カ所の瓦集中区が存在することがボーリング・ステッキによる調査で判明していることから、かつては瓦窯が微高地の南面に並べて構築されていた可能性がある。

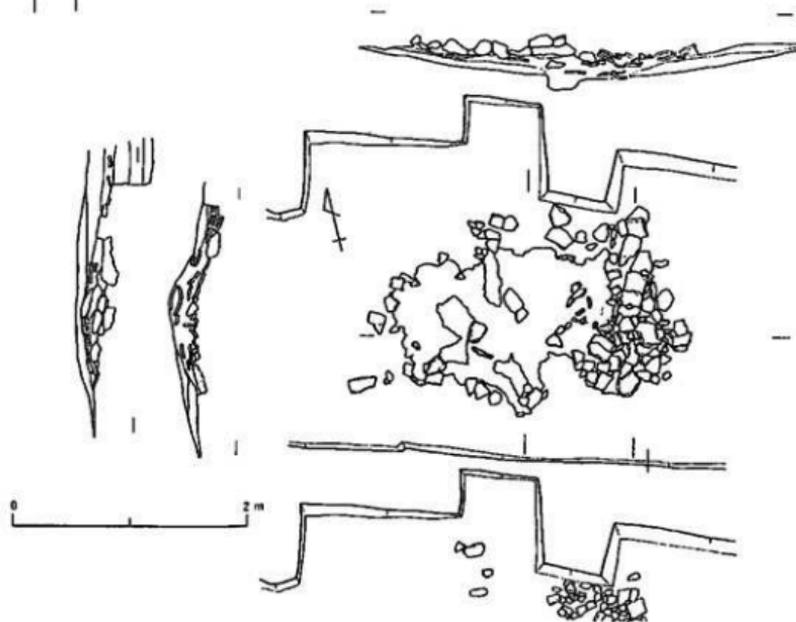
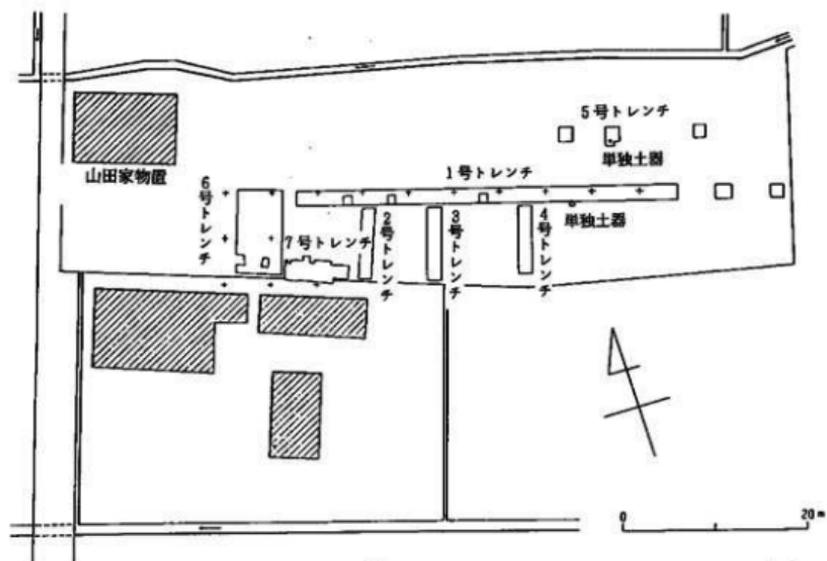
本窯址は、甲府市の調査した窯の灰原より西側のぶどう園中にある。表土は5cm程で瓦・土師器・焼土・灰・壁体が敷き詰められたような面が検出される。その規模はおよそ6㎡位である。焼土の下は暗灰色の砂質土となるが、この中からも壁体・瓦・土師器などが出土している。地山は灰白色粘土層であり、トレンチ調査の結果、南側の溝が走っている可能性があった。窯はかつて微高地上に立地していたのであろうが、土採取によって削平されてしまい、灰原だけが残ったと想定できる。

出土遺物は、甲斐国分寺と同範の軒丸瓦と軒平瓦が出土しているが、このほかに平安時代の軒丸瓦も出土しており、伴出土器も古墳時代前期及び平安時代に属している。

これら1号窯・2号窯の灰原検出状態を観察すると、①遺物が表土直下から面的に出土する。②表土直下の遺物を含む層と下層では土質が大きく異なること、③伴出土物は大部分が平安時



第31図 上土器瓦窯址位置図2

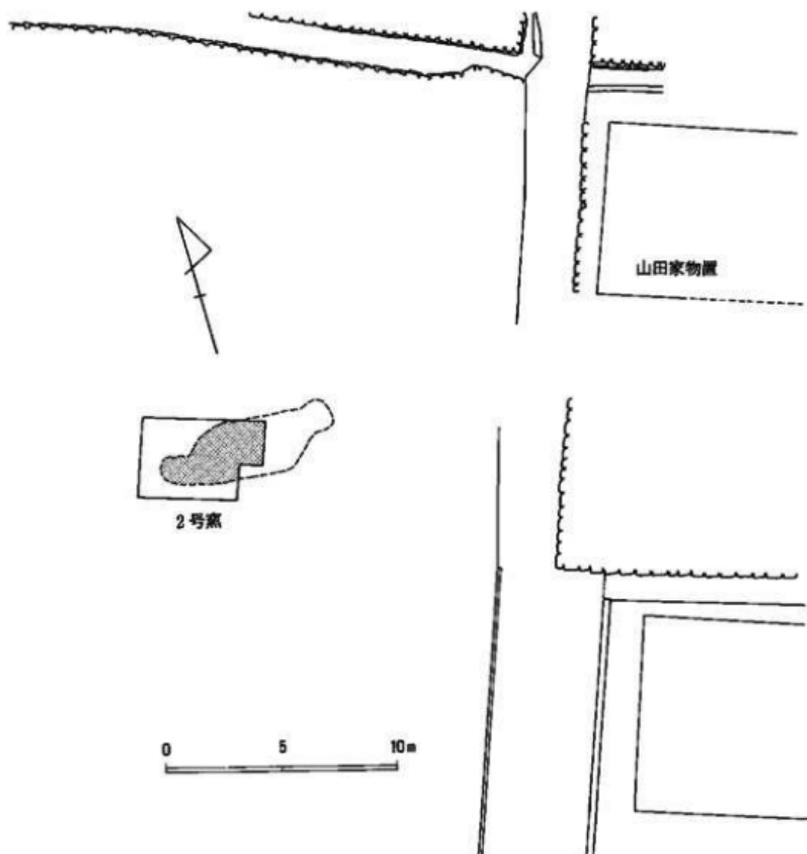


第32図 上土器遺跡7号トレンチ遺物出土状況

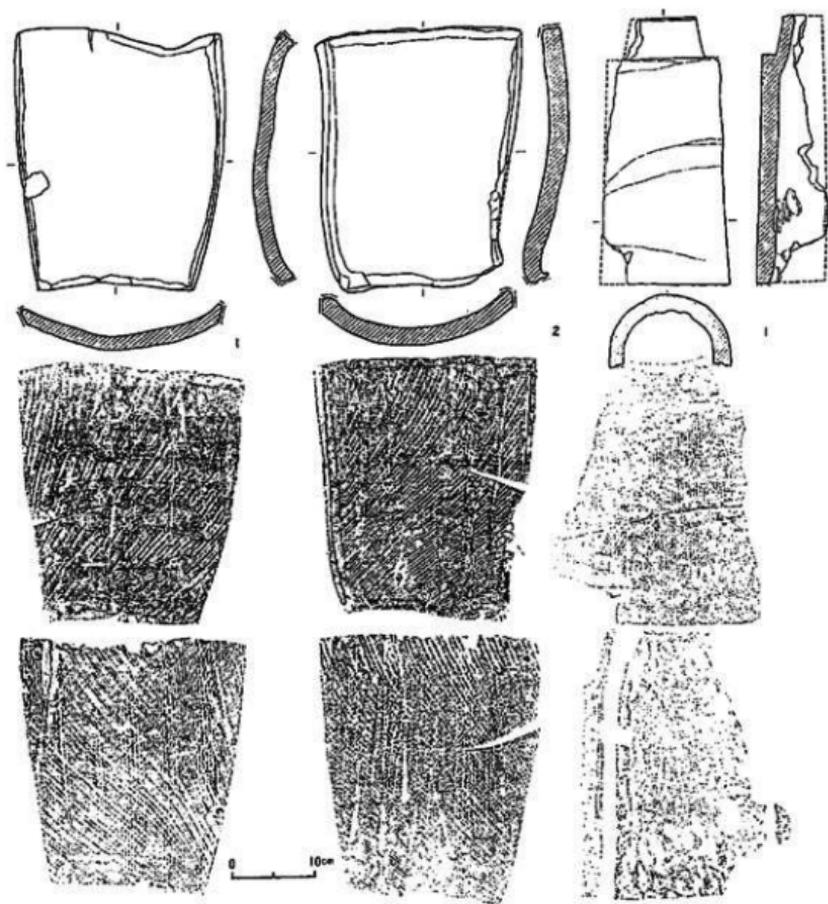
代土師器・須恵器であること、などの特徴がある。出土遺物の豊富さから、灰原である可能性が最も高いが、①～③の問題点からすれば、奈良時代の灰原であるという結論には達せず、平安時代の国分寺補修瓦製作址という事になろう。ただ、表土直下の瓦・焼土・壁体ブロックの面が、どのようにしてできあがったかという点の説明は不足している。本遺跡が近代の瓦生産に粘土を供給するために、旧来の微高地を削平されたことは既に述べたが、このときに、窯が破壊された訳で、粘土中にあった窯の壁体・瓦・焼土や住居址中の土器は、粘土と区別されて1カ所に廃棄されたとも考えられる。1号窯・2号窯どちらも南側に水路状の溝があり、この溝付近が廃棄場所として選択されたのではなかろうか。

文献 1989『甲府市史』資料編第1巻

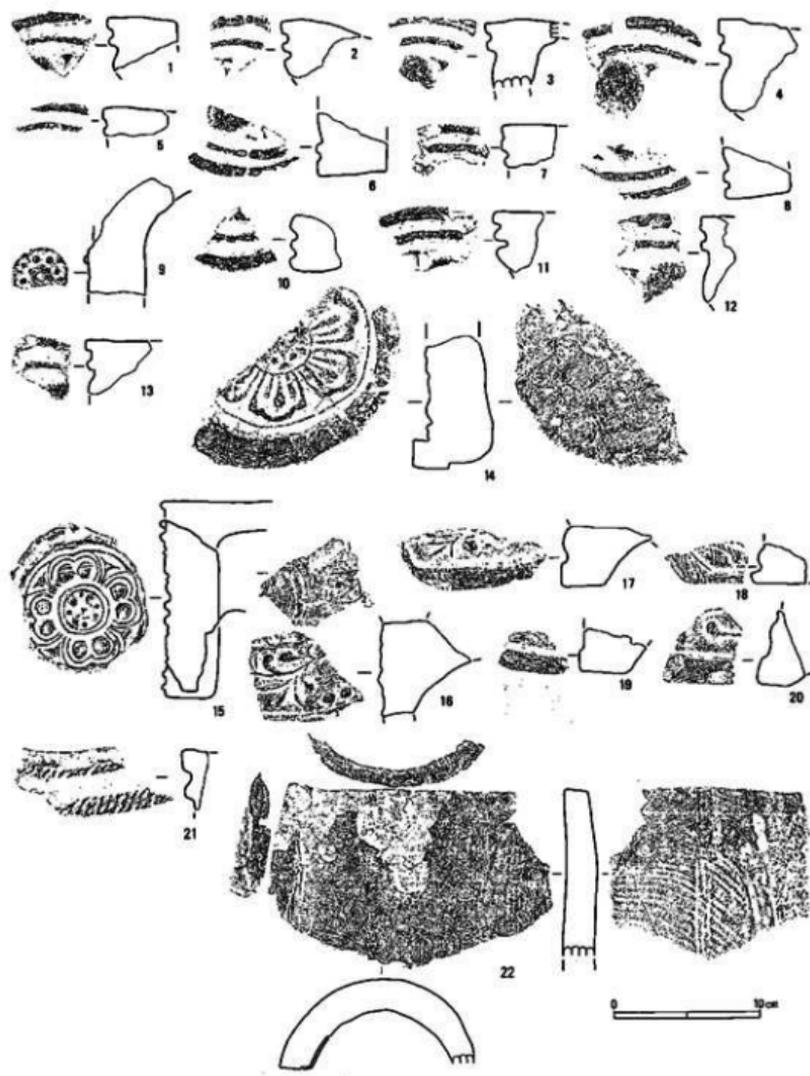
末木 健 1989『年報5』山梨県埋蔵文化財センター



第33図 上土器2号窯調査位置図



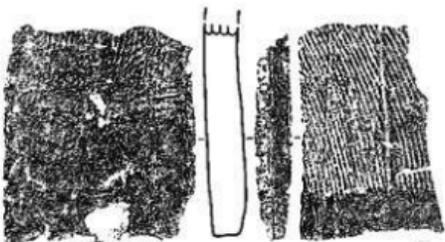
第35图 上土器瓦甕 (1号窯出土遺物2)



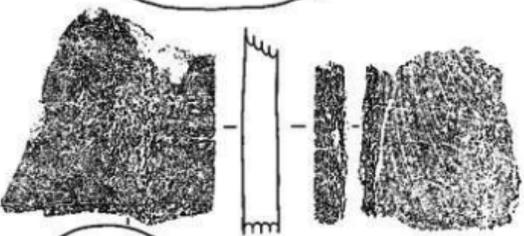
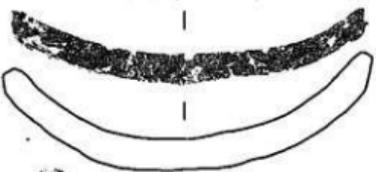
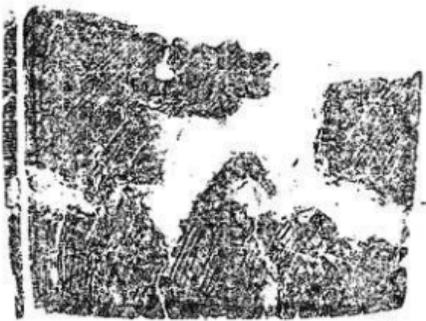
第36图 上土器瓦甃(2号甃出土遗物1)



23



24

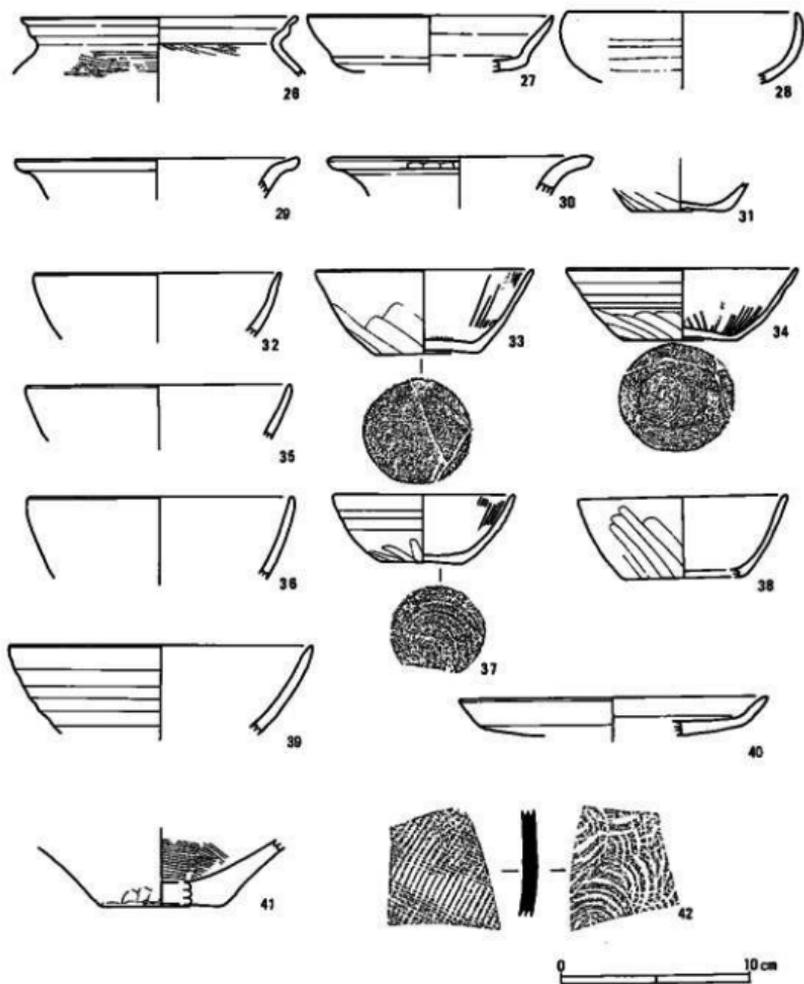


25



第37圖 上土器瓦片（2号黑出土遺物2）





第38图 上土器瓦器 (2号窟出土遗物 3)

6. 大小久保遺跡(だいしょうくぼ)

場所 北巨摩郡須玉町下黒沢字大小久保

時代 平安時代

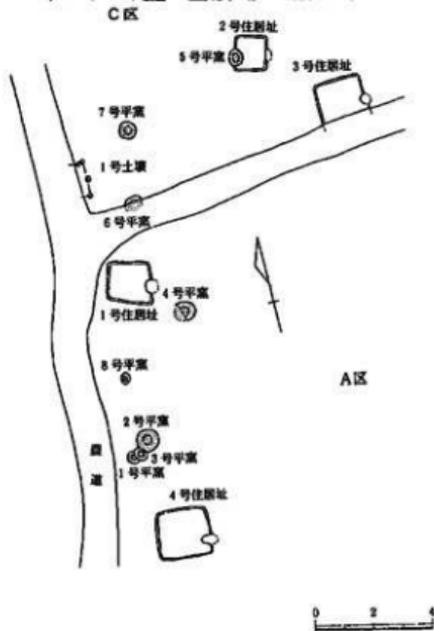
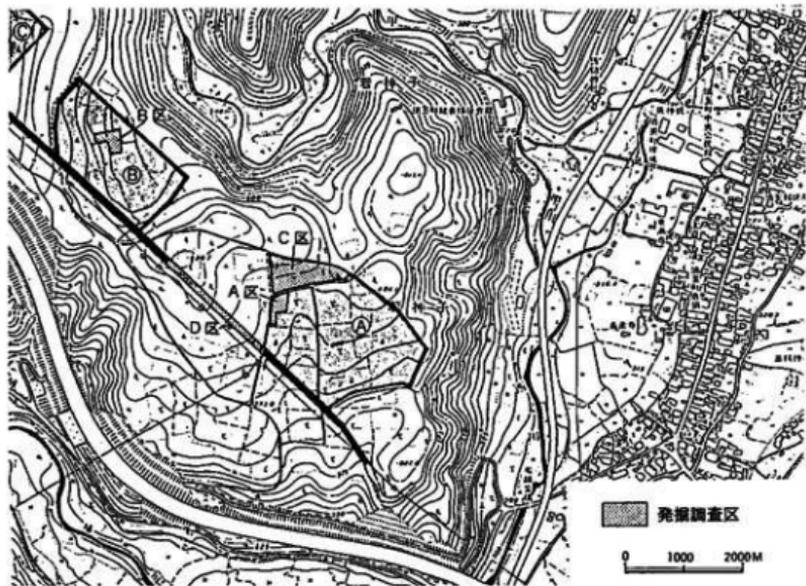
製品 土師器(坏・甕)

「本遺跡は国道141号線と中央自動車道が交差する地点の北西で、若神子の集落の真西にあたり、北を甲川、南を鳩川にはさまれた標高400mの台地上、八ヶ岳南麓の東端に立地する」(報告書より)。遺跡からは4軒の住居址と8基の平窯が発見されている。平窯は直径1～2.6mの円形・楕円形・隅円方形のプランを呈し、深さ30cm～75cmの皿状の土坑である。内壁面は焼土が見られ、底部にも焼土の堆積が見られる。また、覆土中間にも焼土層がレンズ状に堆積しているものが観察される。内部からは坏・甕などの土師器が検出されており、土師器製作に使われた窯と考えられている。

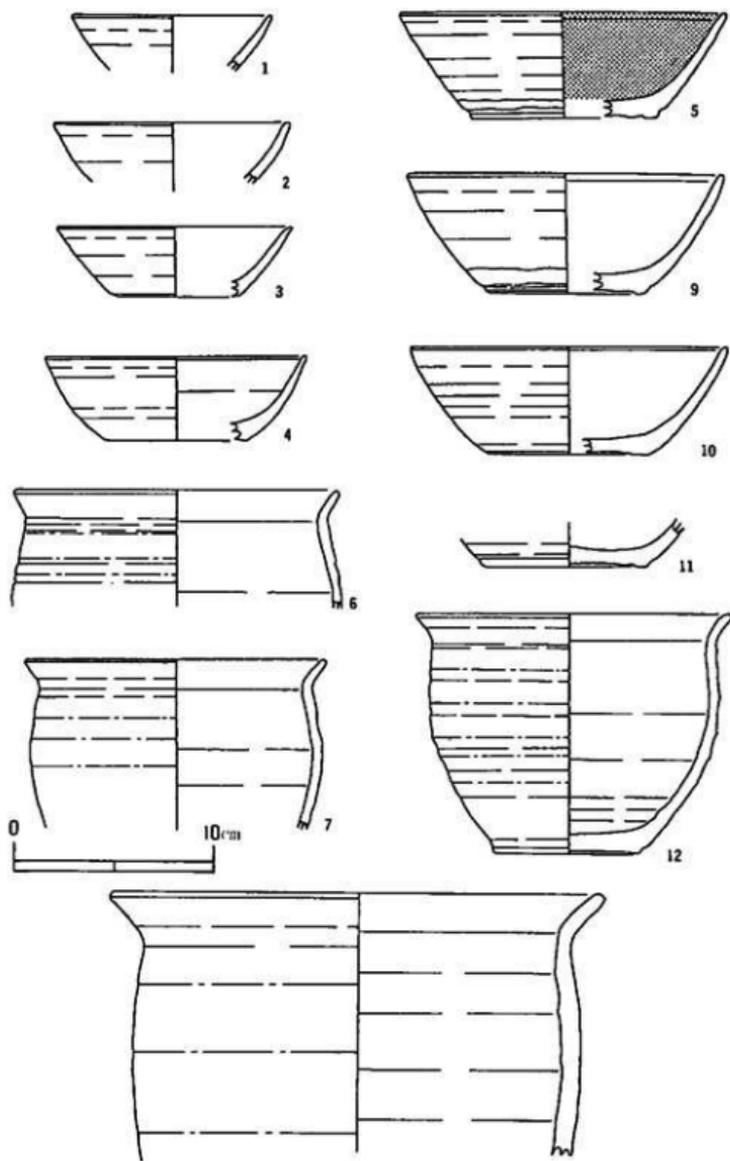
文献 山路恭之助 1983 『大小久保遺跡』 須玉町教育委員会



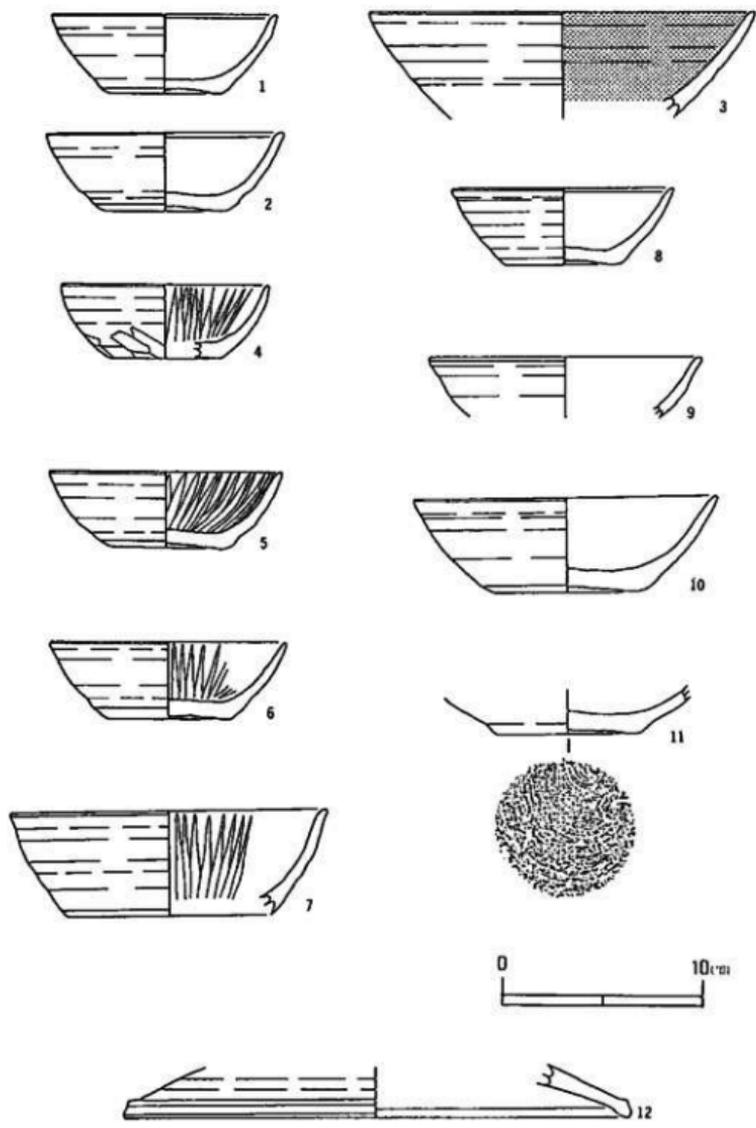
第39図 大小久保遺跡位置図1



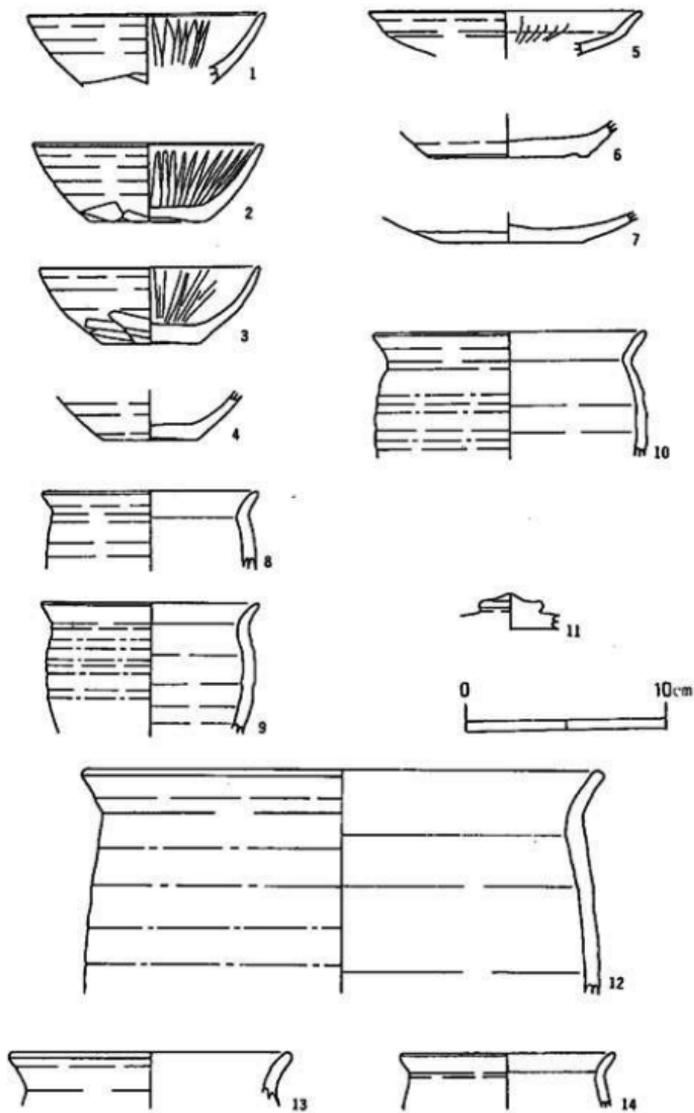
第40图 大小久保遺跡位置圖2 全体圖



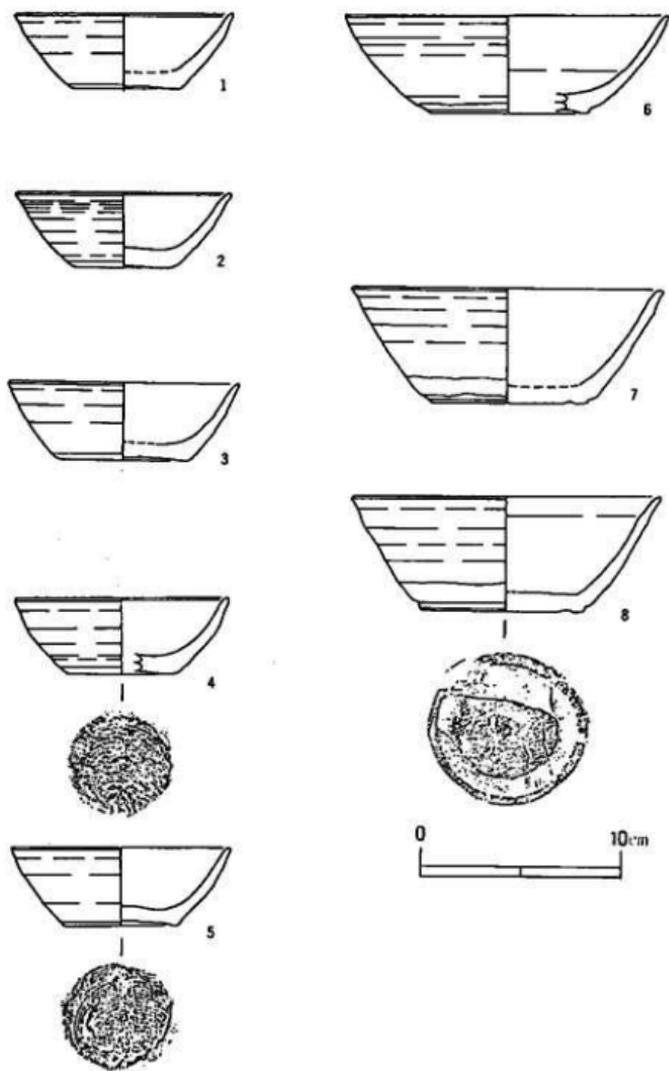
第41图 大小久保遺跡 1号平蓋(1~8)、2号平蓋(9~12)出土遺物実測図1



第42图 大小久保遗址 3号平窟(1~3)、4号平窟(4~12)出土文物实测图2



第43圖 大小久保遺跡 5号平甕(1~12)、6号平甕(13~15)出土遺物実測図3



第44圖 大小久保遺跡 7号平高(1~8)出土遺物実測圖4

7. 前田遺跡(まえだ)

場所 北巨摩郡小淵沢町下笹尾字前田

時代 平安時代

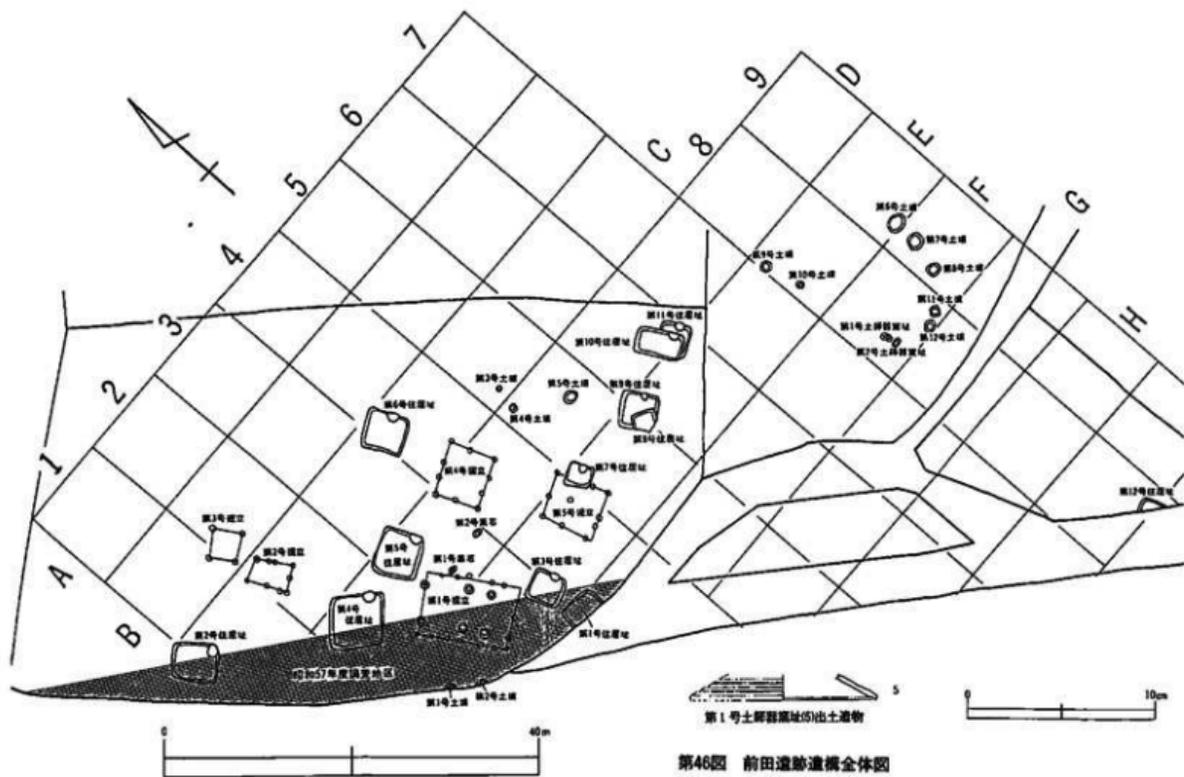
製品 土師器(坏・蓋)

八ヶ岳山麓の標高770mの台地上にあり、その台地上には平安時代集落と土師器製作用平窯があった。窯は2基あり、1号窯は1.4×2.6mの不整楕円形を呈しており、覆土には焼土・炭化物・灰・土師器坏・坏蓋が出土している。2号窯は1.5×2.2mの楕円形を呈し、覆土中からは焼土・灰・土師器坏破片などが出土している。遺構は住居群の南東部にあり、住居群からは若干離れて造られている。

参考文献 佐野勝広 1985 『前田遺跡』 小淵沢町教育委員会



第45図 前田遺跡位置図



第46图 前田遺跡遺構全体図

8. 大坪遺跡十郎橋地点(じゅうろうばし)

場所 甲府市横根町十郎橋南(左岸)

時代 平安時代

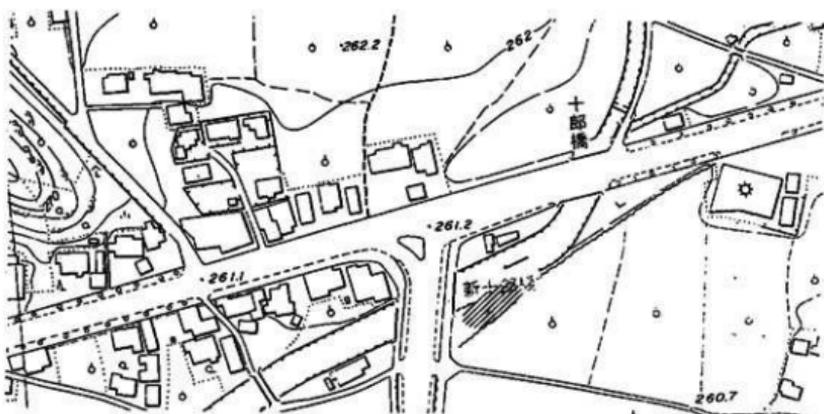
製品 土師器(坏・皿)

甲府市東部の平坦地、標高261mの十郎川左岸に位置する。1975年5月に大坪遺跡発掘調査中に、河川工事が行われており、この時、法面に土坑状の落ち込み断面が検出された。土坑内には土師器坏、焼土、灰などが充填されていた。この遺構が窯跡なのか灰原なのかは明らかではないが、近くに生産遺構が存在する可能性は高い。土師器は平安時代中頃の坏・皿、及び内黒坏で、内面に暗文の施される坏もある。

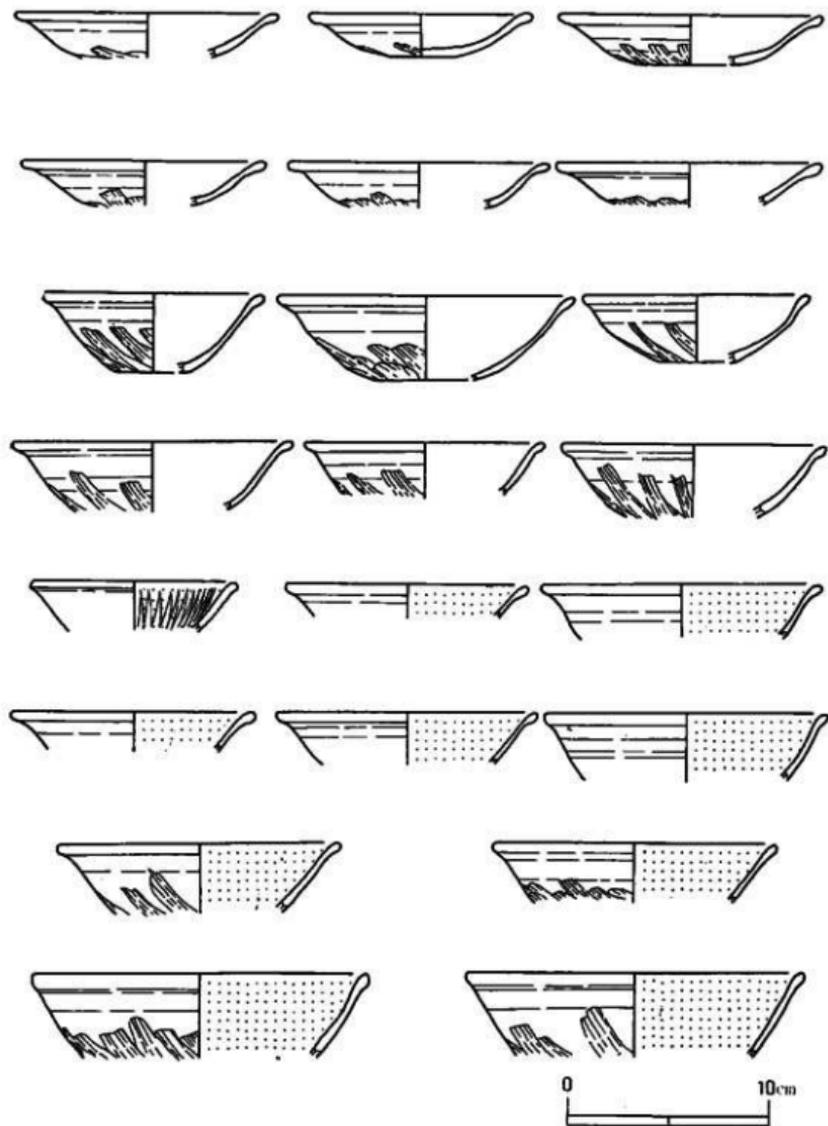
参考文献 山梨県遺跡調査団 1976 『大坪』



第47図 大坪遺跡十郎橋地点位置図1



第48図 大坪遺跡十郎橋地点位置図2



第49图 大坪遺跡十郎橋地点出土遺物

9. 荒神山窯跡(こうじんやま)

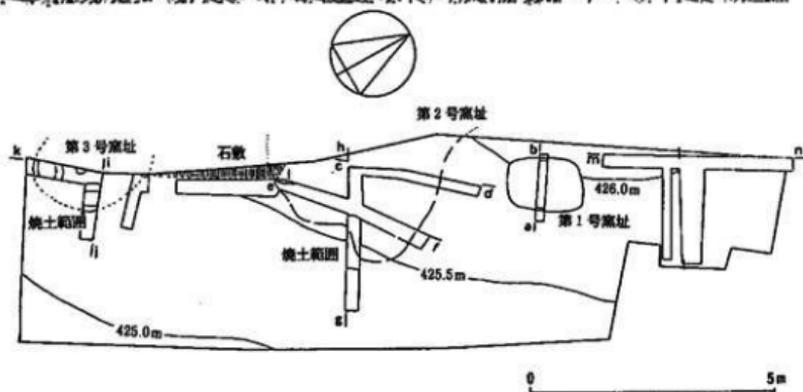
場所 山梨市東576番地

時代 平安時代後期

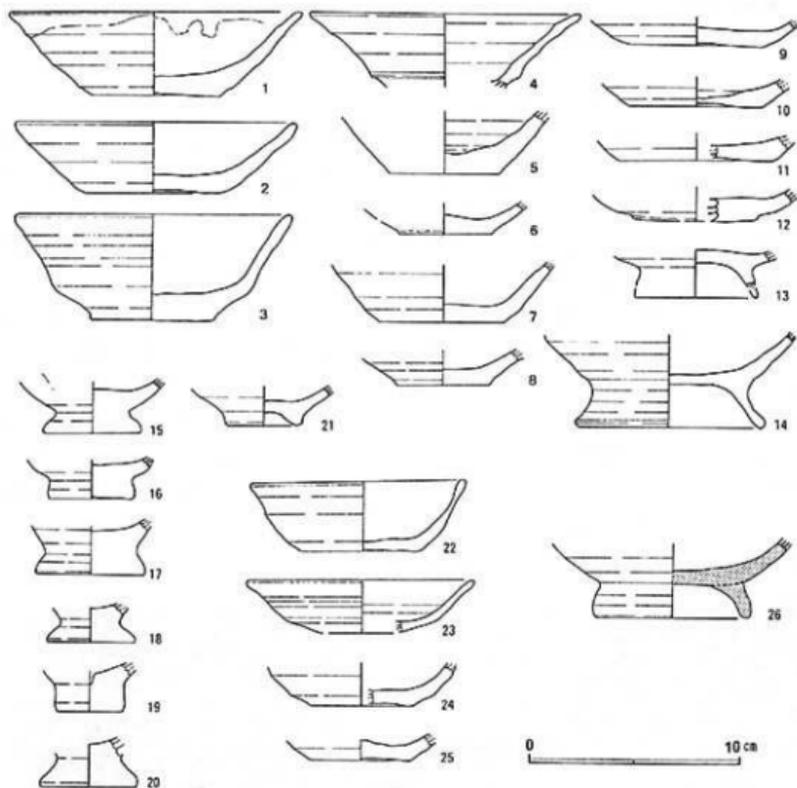
製品 土師質土器 環・皿

山梨市の北西、笛吹川右岸の荒神山南斜面の標高426mに立地する。ブドウ園で削平された部分より、3カ所の焼土が検出され、周辺より土師質土器が採取された。

参考文献 山梨市教育委員会 1987 『荒神山』



第50図 荒神山窯跡全体図(報告書より)



第51図 荒神山窯跡 出土遺物（第2号窯址1～21、第3号窯址22～25、26はm-nサブトレンチ内出土）



荒神山窯跡遠景



荒神山窯跡1号窯址位置

10. 権現堂遺跡

場所 南巨摩郡増穂町春米字南山

時代 平安時代後期

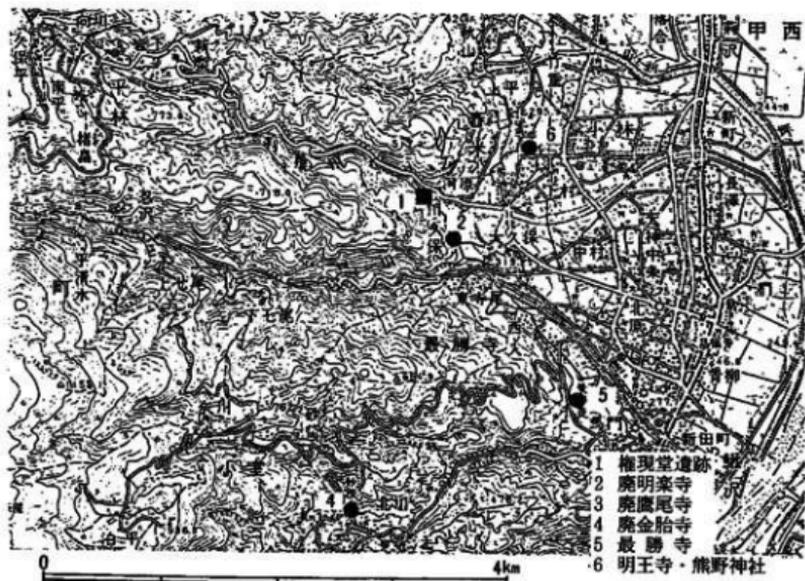
製品 宝塔形泥塔、土師質土器 坏・皿

甲府盆地南西部、櫛形山の山裾に位置しており、標高390mの緩斜面に立地する。宝亀元年(770)創建の寺伝をもつ明王寺の寺域地にあり、古絵図によれば周辺には権現堂、大日堂、鐘樓堂などの建物が存在していた。また、明王寺に伝えられる権現堂廻りは、「貞應三年二月十五日甲斐国西郡高林内中尾権現宮之全願主阿闍梨長慶」(1224)の銘があり、国指定重要文化財に指定されている逸品である。

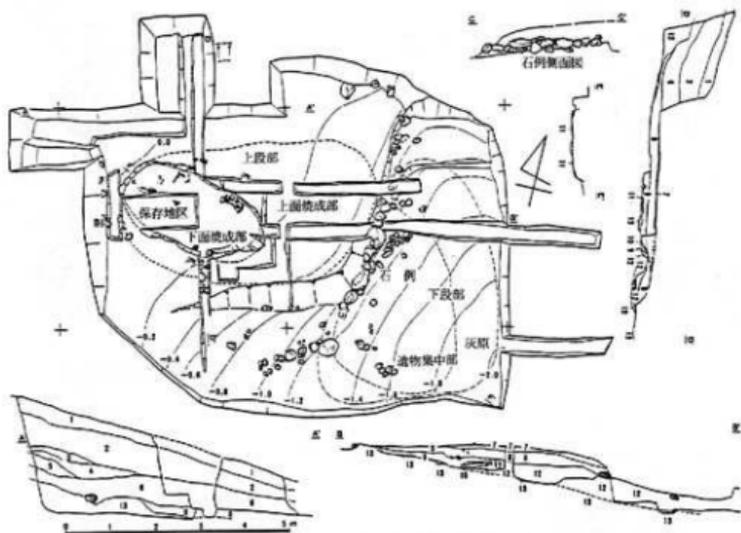
本遺跡は町教育委員会が昭和60年～62年の3年間にわたっておこなった学術調査の結果、発見されたもので、平安時代の仏教文化(泥塔供養)を知るうえで、全国的にも注目されている遺跡である。

泥塔は山の斜面を5m×5mの方形に造成した平坦面中央の土坑で焼かれたもので、土坑は3.2×1.6m、深さ20cmの規模で、この上面にも焼成面が存在した。土坑及びこの周辺から焼土・灰・炭とともに泥塔・土師質土器が出土している。出土した泥塔の破片数は1198点で、完形品に復元できたものはないが、高さ11～12cmの宝塔形である。

参考文献 増穂町教育委員会 1989 『権現堂遺跡』



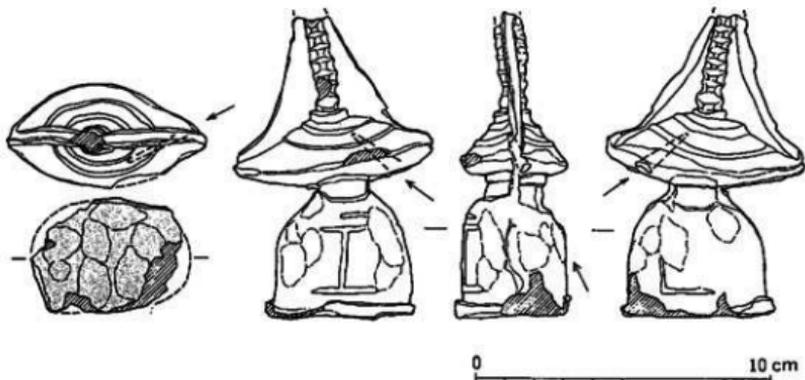
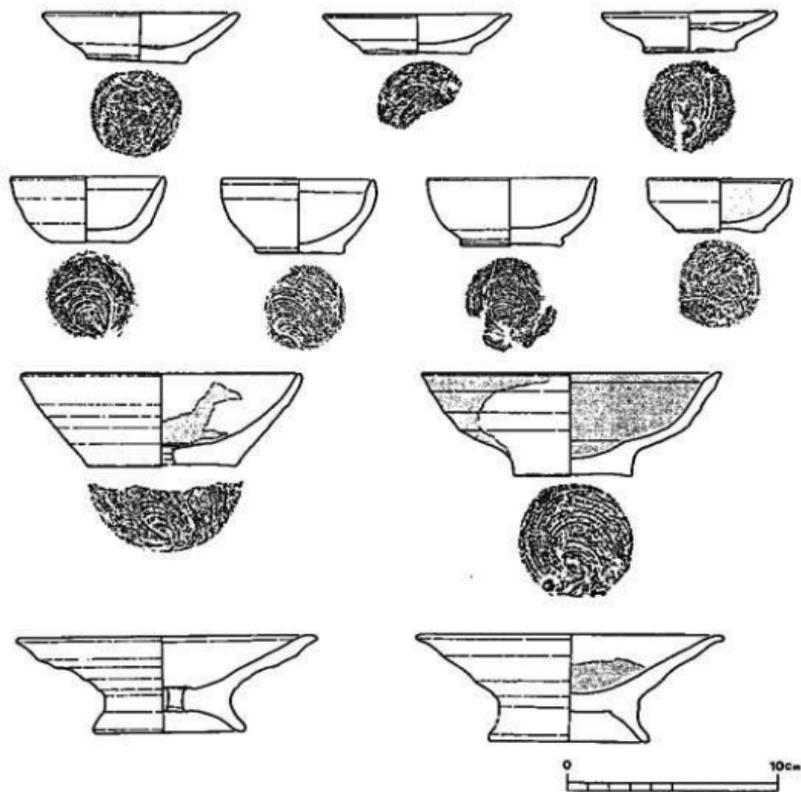
第52図 権現堂遺跡位置図(報告書より)



第53図 権現堂遺跡平面・断面図(報告書より)



第54図 権現堂遺跡(報告書より)



第55図 権現堂遺跡出土遺物（報告書より）

11. 上ノ段遺跡(うえのだん)

場所 南都留郡河口湖町船津字上ノ段

時代 平安時代後期

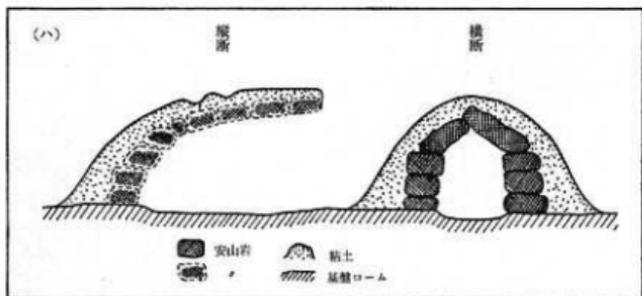
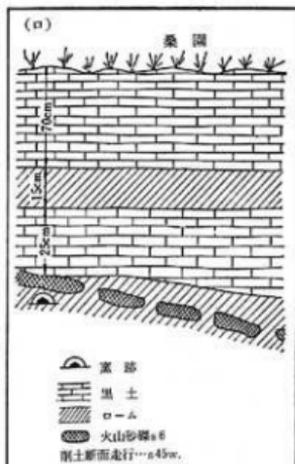
富士山北麓の河口湖南側にあり湖より一段高くなった台地上に立地する。昭和初期に民家の移転によって偶然に発見されたもので、報告者の仁科義男氏は「現在の桑園表面から窯の上端までは約1米十糎余を有したもので、窯はその口を西北に開き、全く水平に造られていた。遺物としては粘土塊・土器破片・木炭・灰分等で、是等はその内部や周囲から検出しているが、断面の各層中には土器片の包含を見なかった」また、「側壁及上蓋は数個の安山岩（付近には溶岩のみ存す）にて造形され、これを全体に粘土でもって被覆したもので、上方より之を見れば恰も布団を被りて仰臥せるが如き形態にして全く水平の位置をとれり。長さ九五糎、高さ（口元中央ニテ内径）三五糎、幅（口元中央ニテ内径）四五糎」と報告している。

図及び報告文を読んで判断する限り、平安時代の竪穴住居に設置された竈のように考えられる。出土土師器も坏・甕形土器などであり、住居の竈内部や周辺に散布していた物ではなからうか。

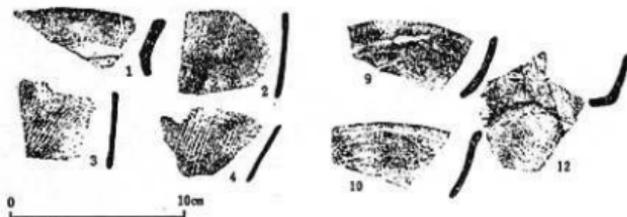
参考文献 仁科義男 1932 「富士山麓の古代窯跡について」『山梨県史蹟名勝天然記念物調査報告』七



第56図 上ノ段遺跡位置図



河口湖町上ノ段遺跡 (イ 地形図、ロ 断面図、ハ 縦横断面)



第57図 上ノ段遺跡 (報告書より)

第2節 中世・近世の窯

12. 信玄焼窯

場所 東山梨郡牧丘町西保

時代 中世(?)～近世

製品 茶碗・土鍋・土製玩具

現在では窯の位置は明らかではないが、次のように伝えられている。

「この焼物は、東山梨郡西保地方にて製作された焼物で、その創始は武田信玄の殖産奨励によって起こったものと伝えられている。焼物は茶碗・土鍋その他土製玩具であったが、現在は製作されない。」(遺跡の位置は近代の瓦窯業跡)

参考文献 1936 『山梨県総合郷土研究』



第58図 信玄焼窯跡位置図

13. 武骨焼窯 (信玄焼窯) (ぶこつ)

場所 塩山市三日市場3237 (真島孝三)

時代 江戸時代 安政元年(1854)～大正初期

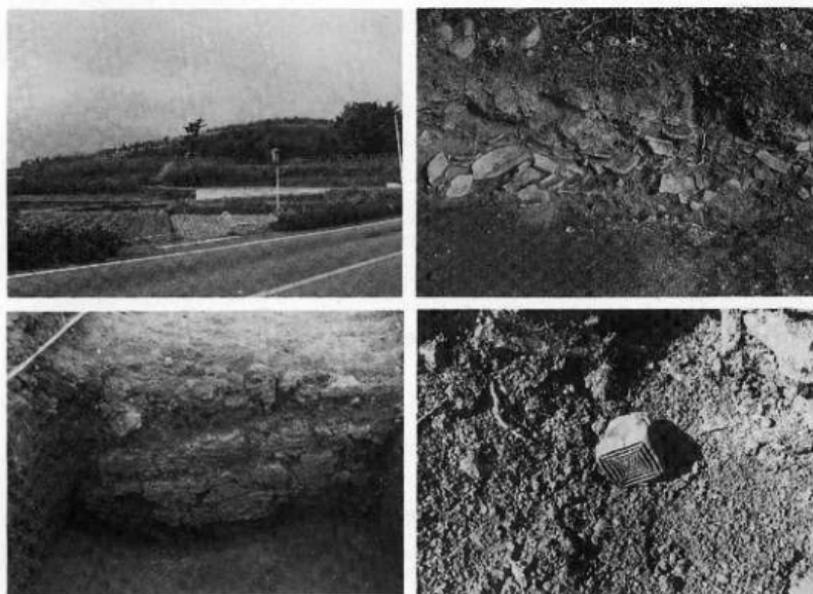
製品 人形・日用品雑器

安政元年(1854)、真島幸右衛門は江戸日本橋より三日市場に移り住み、信玄焼・武骨焼を作った。幸右衛門は真島家の次男で、江戸に住んでいるときは鳩笛を作っており、<鳩の定助>と呼ばれていた。

参考文献 丹後裕美 1989 「武骨焼」 『山梨百科事典』山梨日日新聞社



第59図 武骨焼窯跡位置図



宇津谷沖の腰窯跡・遠景 (左上) 灰塚断面 (右上) 窯内 (左下) 印判形製品 (右下)

14. 宇津谷・峠の腰窯跡

場所 北巨摩郡双葉町宇津谷字峠の腰1314 (小林正博)

時代 江戸時代 文化・文政年間

製品 甕・鉢・播鉢・内耳土器他

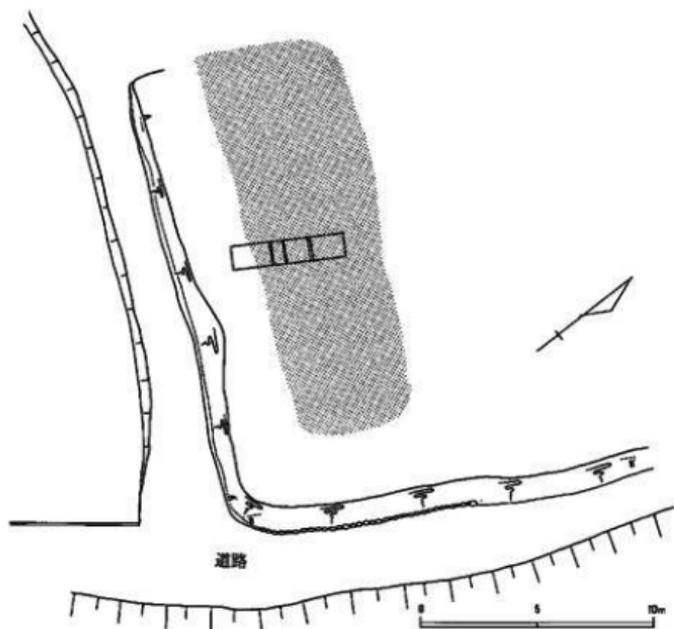
茅ヶ岳西南麓の先端にできた円丘の南面斜面、標高380mに位置する。農道の建設によって、大量の甕破片が出土することが知られていたが、年代や構造について明らかではなかった。1989年11月15日～29日の間調査を行い、登り窯1基を検出した。また、灰原は窯の両側と南側にあり、多量の甕破片が出土している。窯の規模は幅約1.2m、高さ1m以上、長さは現存する部分で12m以上である。正確な規模は藪のため測量できない。

本窯跡は『甲斐国志』の巻百二十三付録第五に「『甕』北山筋ノ宇津谷村武川筋ノ下条南割ニテ造ルハ水甕ニ用イル」と記載された窯であろう。この窯に関しては、甲斐国志の他にも、同地区にある天香山妙善寺所有文書の年貢割付帳に、文化9年～文政8年までの14年間瓶焼運上の記載が見える(双葉町文化財審議委員保坂吾良吉氏調査)。

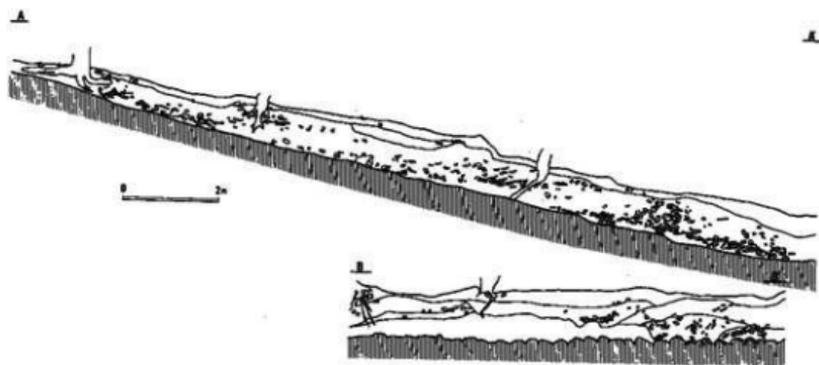
なお、後述する宇津谷・諏訪神社窯は本窯跡と一体の窯と考えられ、茶碗・小鉢などが生産されている。これらには軸を掛けたものが多く、質の高い焼き物を生産していた。



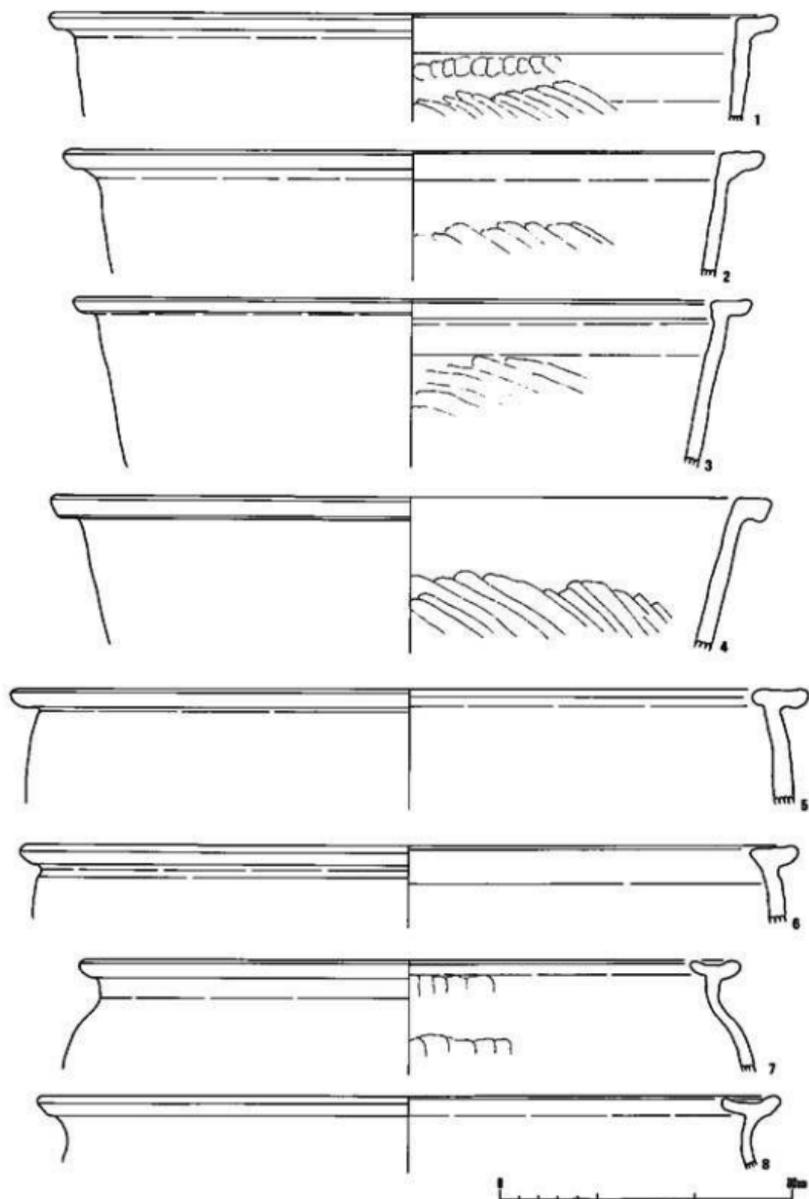
第60図 宇津谷窯跡(1. 峠の腰窯 2. 諏訪神社窯)跡位置図



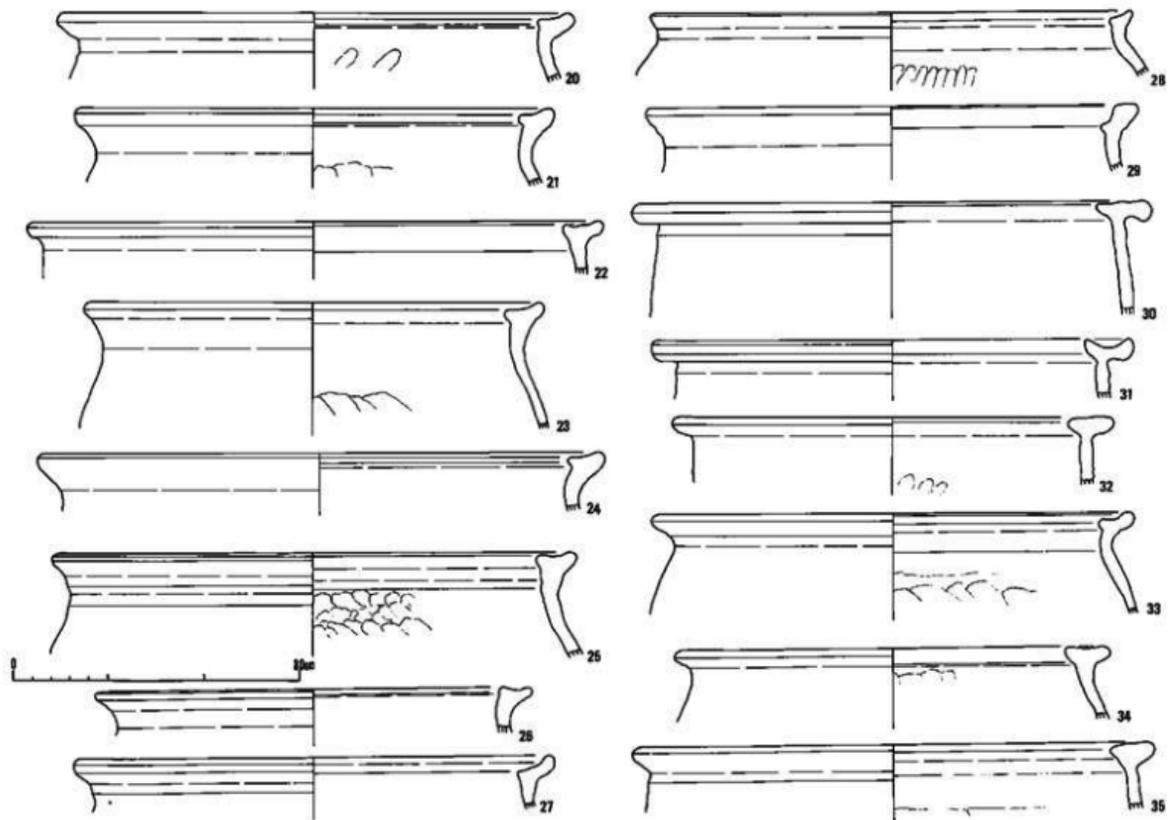
第61図 峠の腰裏トレンチ位置図



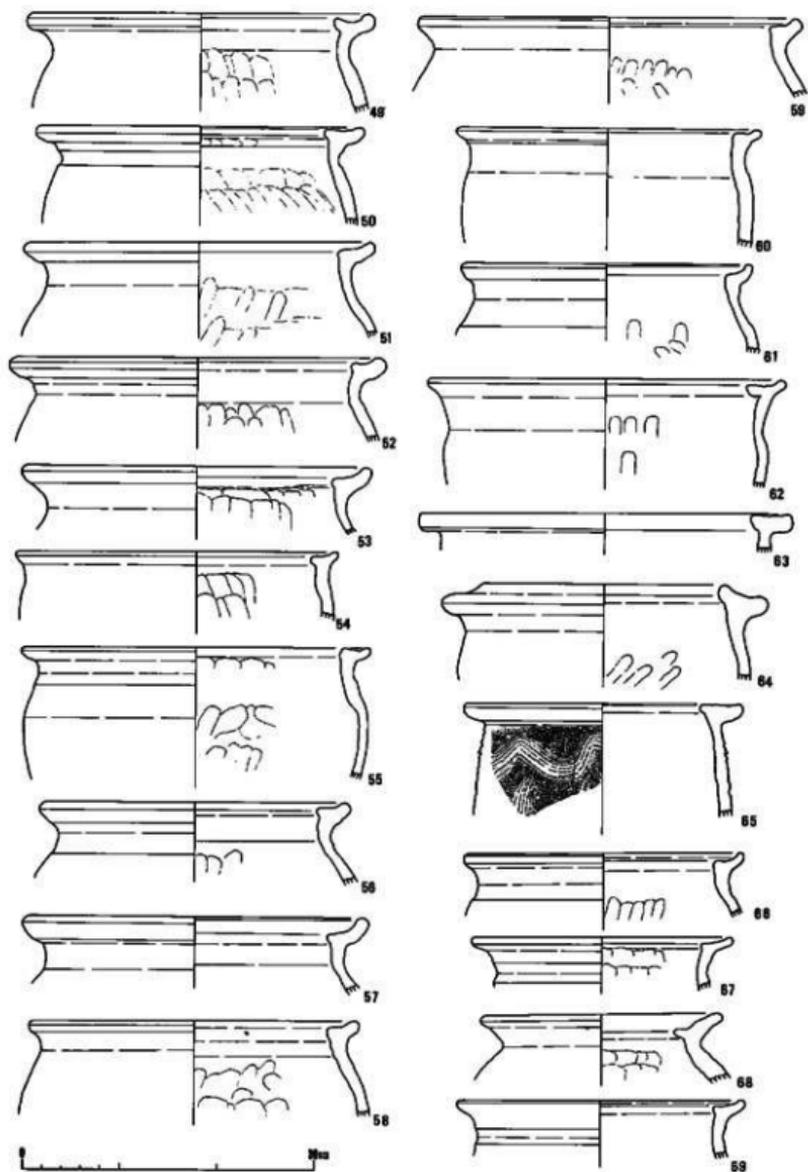
第62図 宇津谷峠の腰裏セクション



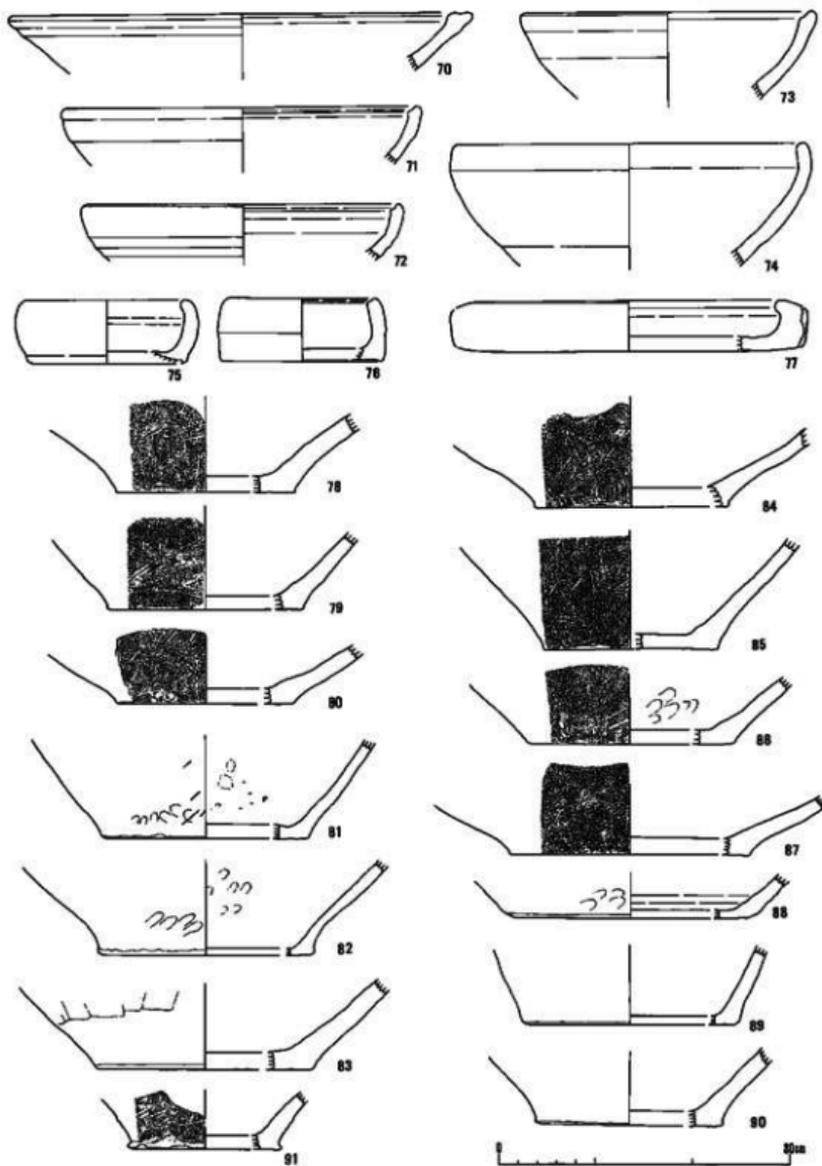
第63図 宇津谷沖の腰窯出土遺物 1



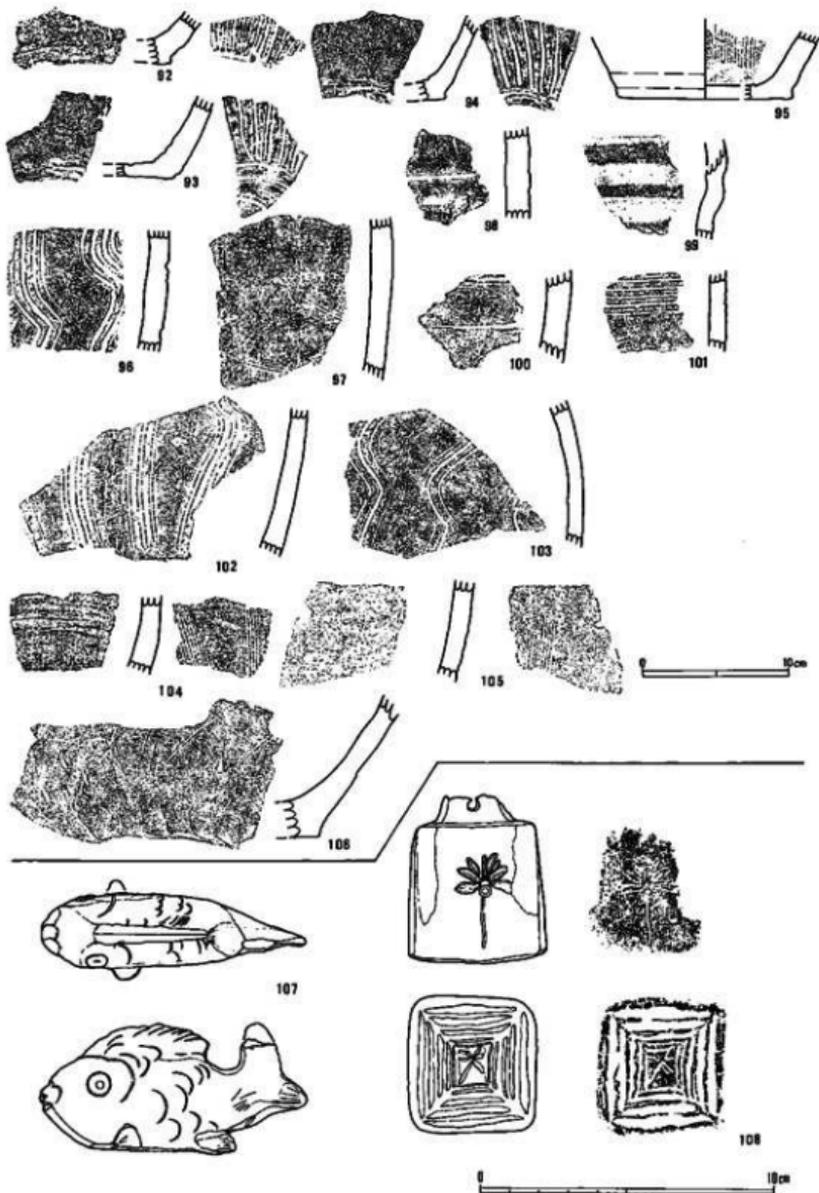
第64図 宇津谷峠の腰窯出土遺物 2



第65図 宇津谷峠の腰高出土遺物 3



第66図 宇津谷峠の腰窯出土遺物 4



第67図 宇津谷沖の腰窯出土遺物 5

15. 宇津谷・諏訪神社窯跡

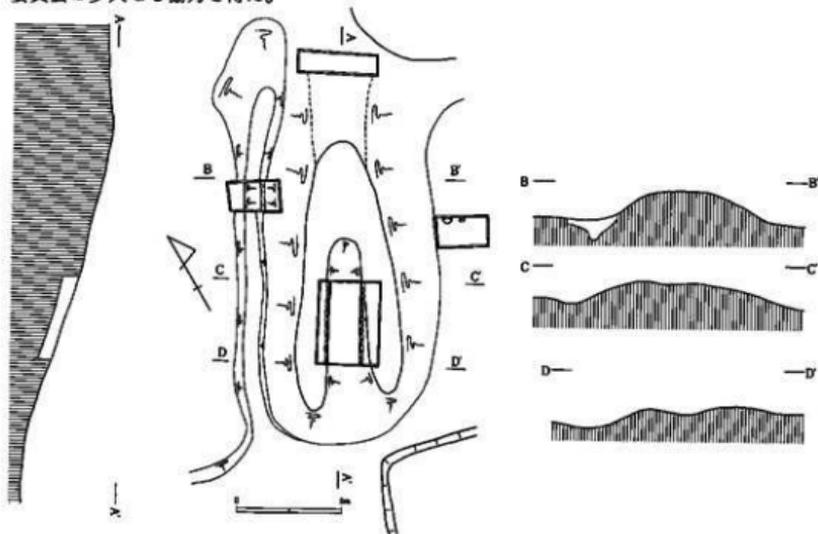
場所 北巨摩郡双葉町宇津谷字藤塚1016-1

時代 江戸時代 文化・文政年間

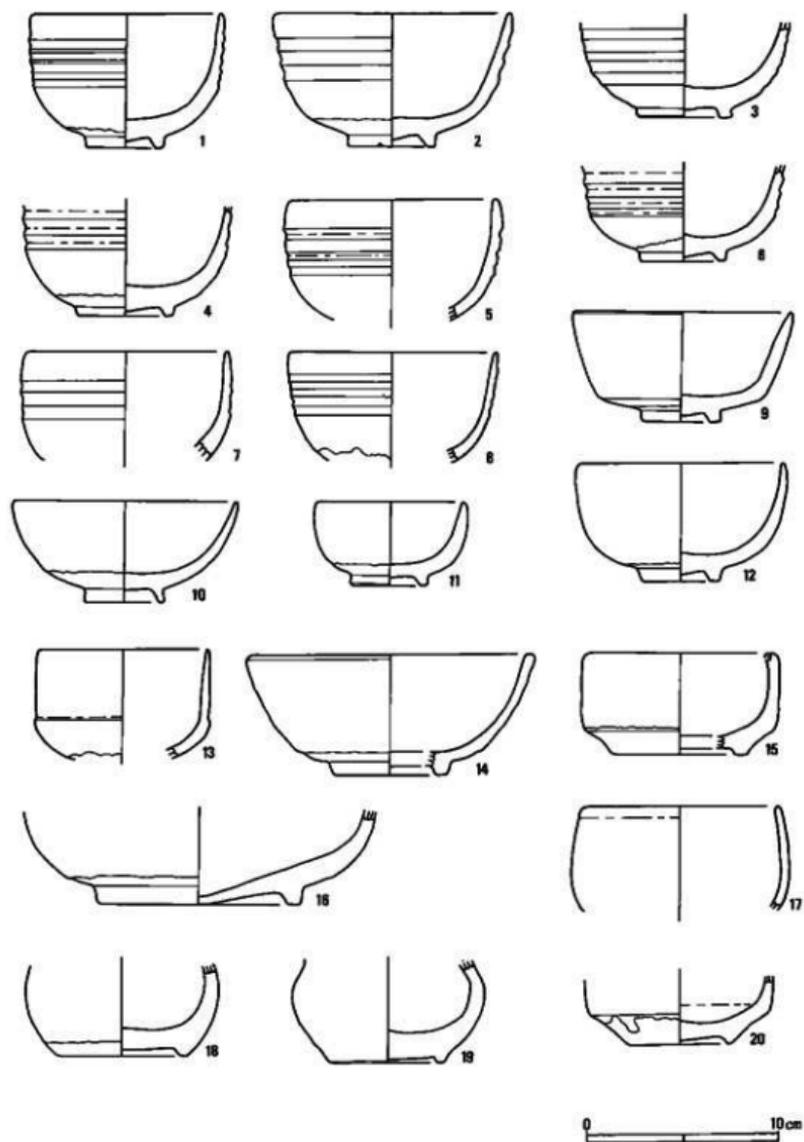
製品 茶碗・鉢

宇津谷・峠の腰窯の南側で、茅ヶ岳南の山麓末端の標高363mに立地する。この窯は郷社諏訪神社の境内地にあることから、その社の名前をとって命名している。窯の規模は全面調査の結果ではないので正確ではないが、1989年11月14日～27日の間試掘調査した結果では、全長15m、窯底幅1.58mの登り窯である。窯壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁面は甕の口縁部をレンガ状に積み上げて構築されている。現存する窯壁は窯底部より85cm～95cm残っているが、天井は総て崩落している。窯内部に壁面を構成する甕口縁部があまり落ち込んでいないことから、天井は竹を編んだ上に粘土でおおった構造をしていたものであろう。傾斜を強くするために北側に盛り土をし、窯の両側にも土を盛り上げている。また、窯に斜面からの表流水がかからないように、西側にV字溝が掘られている。溝は幅170cm、深さ90cmである。窯の東側は全体が低くなっており、特別な溝を掘らなかつたか、あるいは幅広い溝であったのか明らかではない。出土品は釉のかかった茶碗などが多く、江戸時代の甲斐国地方窯の中では、最も優れた焼き物を生産していたと言ふことができ、現存する登り窯としては、保存状態が最も良い窯である。峠の腰窯とほぼ同時期に操業された窯である。

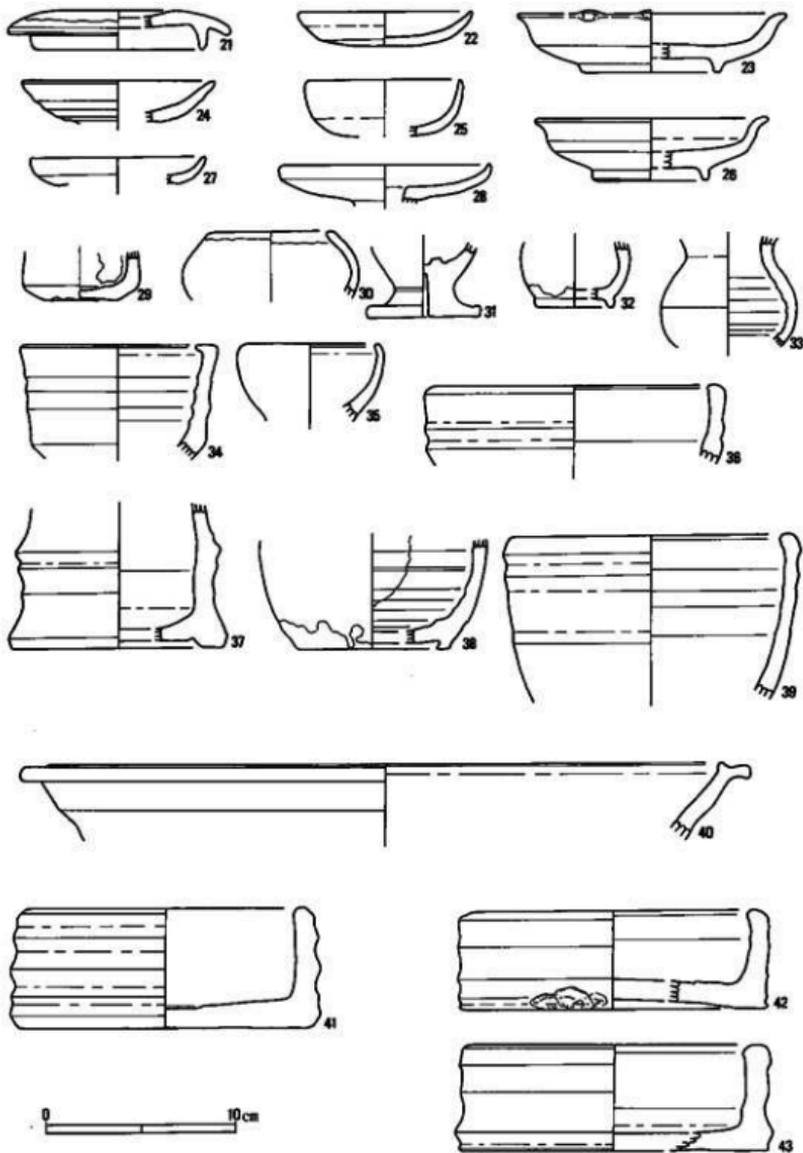
なお、この調査には諏訪神社総代の方々をはじめ、町郷土研究会、町文化財審議会、町教育委員会の多大なる協力を得た。



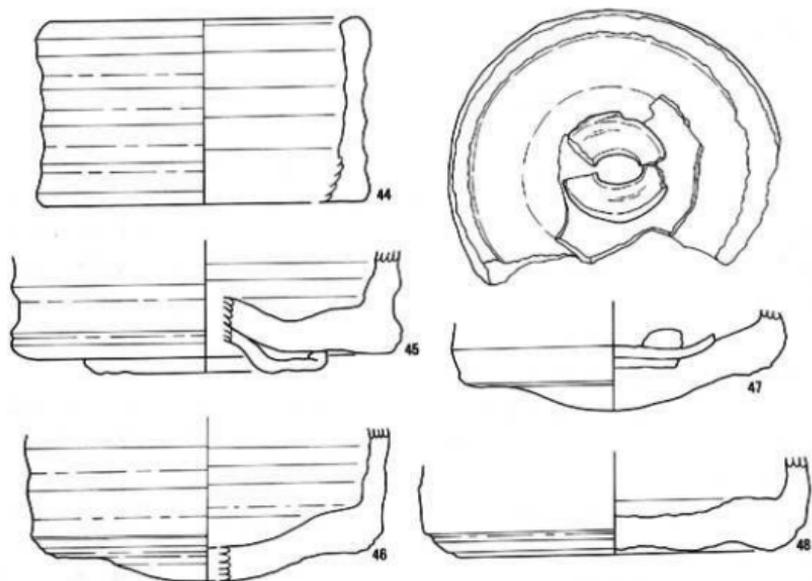
第68図 宇津谷諏訪神社窯跡全体図



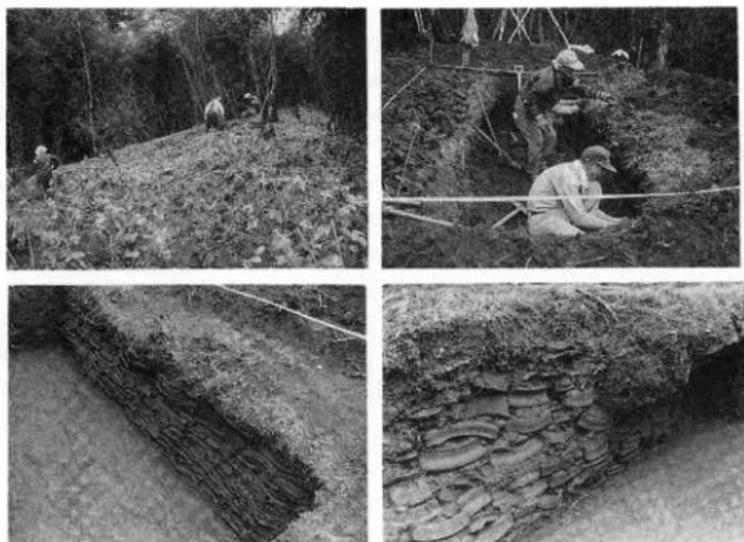
第69圖 宇津谷諏訪神社遺出土遺物 1



第70回 宇津谷諏訪神社出土遺物 2



第71図 宇津谷頭訪神社窯出土遺物 3



宇津谷頭訪神社窯全景（左上）窯内部調査風景（右上）窯内部（下）

16. 加賀美瓦窯跡群

場所 中巨摩郡若草町加賀美・他

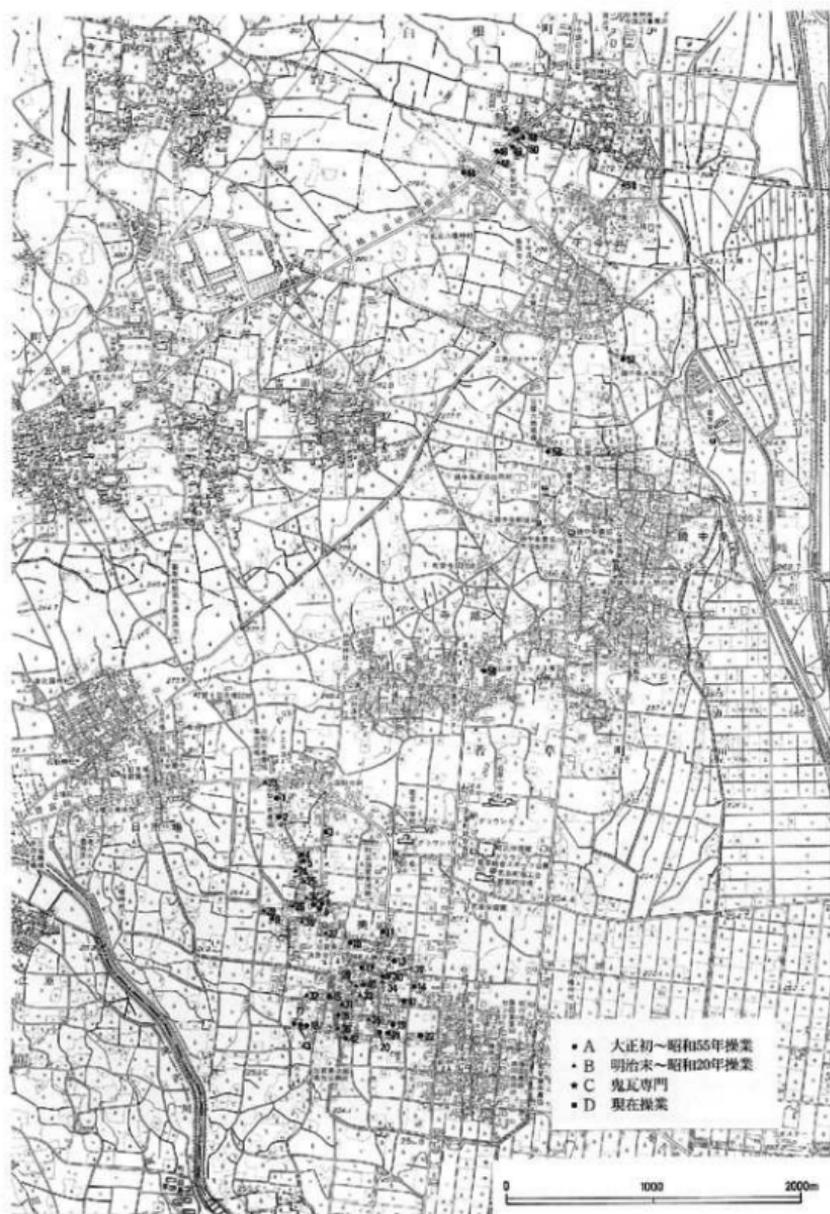
時代 江戸時代(伝)享保元年～近代・現代(大正・昭和)

製品 瓦

甲府盆地西部、釜無川右岸の平坦地で、御勅使川扇状地末端にあたり、良好な粘土層が露出している地域である。この地域の瓦産業は、江戸時代享保元年頃に三河国より技術が伝えられて盛んになったと言われる。文献では、嘉永5年(1852)甲府城修築の時に瓦を納めた「加賀美村瓦屋勝之丞」という名前が残っている(1969『甲府城総合調査報告書』山梨県教育委員会)。明治以降現代に至る瓦屋は下記のとおりであるが、現在操業している家は1軒のみである。この資料は若草町誌編纂室より提供していただいた。

(資料の記載はNo・氏名・荷判・操業期間を示した)

<加賀美地区> 1、名取寿一 2139番地 A 2、野呂瀬綱男 2365番地 A 3、斉藤東 2666番地 A 4、五味国男 3538番地 A 5、五味栄吾 合 2491番地 A 6、名取七雄 合 2789番地 A 7、野呂瀬謙一 合 3548番地 A 8、深沢博義 合 2798番地 A 9、野呂瀬丹吾 2025番地 A 10、深沢紀雄 3414番地 A 11、信田実 3394番地 A 12、石川左京 合 3383番地 A 13、小野仁士 3038番地 A 14、依田敏一 合 3288番地 A 15、依田東 1958番地 A 16、沢登武俊 合 3473番地 A 17、佐野富一 合 1797番地 A 18、澤登一秀 下 1800番地 A 19、千野克彦 3346番地 A 20、沢登八十春 合 3359番地 A 21、深沢義康 合 3387番地 A 22、神山とめ子 3266番地 D 23、野呂瀬充 2341番地 B 24、石川紀 2487番地 B 25、石川義彦 2740番地 B 26、斉藤行雄 3537番地 B 27、青柳敏三 2800番地 B 28、深沢保 2132番地 B 29、深沢元 3444番地 B 30、石川次郎 3302番地 B 31、深沢一雄 3487番地 B 32、小野高男 1952番地 B 33、遠藤 ? B 34、深沢敏治 3309番地 B 35、遠藤敏文 合 364番地 B 36、青柳一仁 3468番地 B 37、小堀つねじ 3388番地 B 38、加賀美長次 3527番地 B 39、石川新次 3303番地 C 40、小野正直 3038番地 C 41、一ノ倉文夫 3321番地 C 42、澤登洋生 852番地 C 43、小野 ? A <下今井地区> 44、斉藤富義 390番地 A 45、野呂瀬精三 498番地 A 46、落合恒雄 473番地 A 47、斉藤悟 495番地 A 48、板倉務 475番地 B 49、今村善次 472番地 B 50、秋山竹雄 496番地 B 51、斉藤協三(移転) B 52、内藤正 66番地 A <鏡中条地区> 53、名取正人 630番地 B <寺部地区> 54、保坂飛光 2014番地 A (第72図参照)

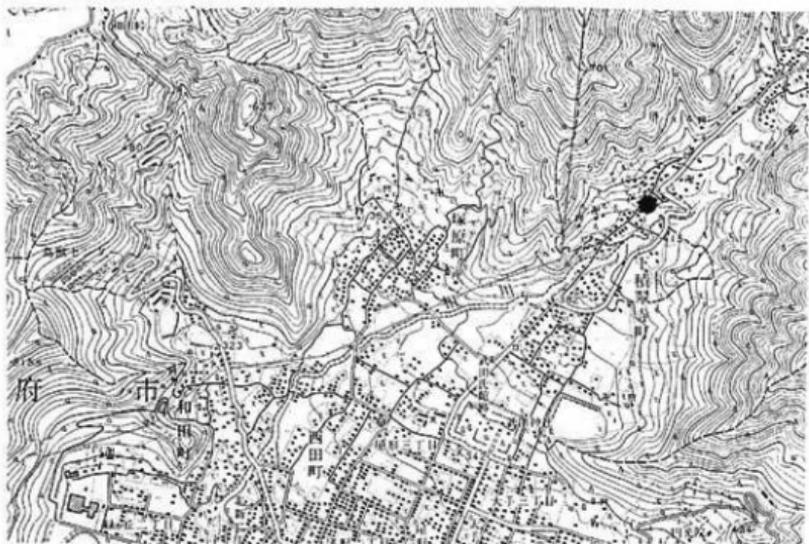


第72図 若草町内瓦窯跡位置図

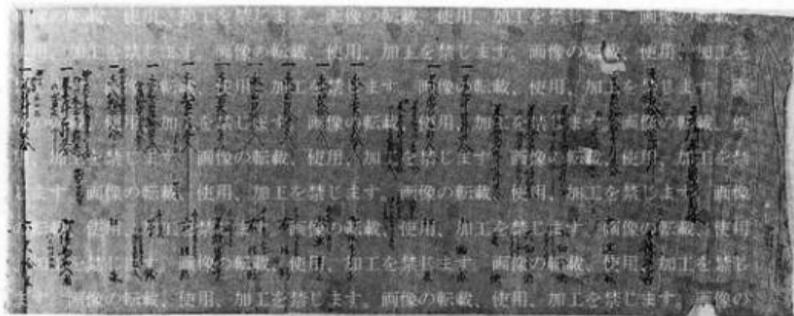
17. 下積翠寺瓦窯跡(しもせきすいじ)

元治元年の下積翠寺村年貢皆済目録に、「瓦焼庵運上」とある。下積翠寺中組に瓦製造業が数軒あったと言われ、457-1、1054、1094、1190番地がその跡という。

参考文献 甲府市史編纂室 『甲府市史』史料編 第5巻 近世IV



第73図 下積翠寺瓦窯跡位置図



元治元年 下積翠寺村年貢皆済目録

18. 平林瓦窯跡(ひらばやし)

場所 南巨摩郡増穂町平林字楮島

時代 江戸時代 弘化年間頃

製品 瓦 播鉢 祠

甲府盆地の南西にある楯形山の中腹、標高850mの尾根上に立地する。楮島2493番地深沢親



第74図 平林瓦窯出土遺物



第76図 平林瓦窯跡位置図

氏の屋敷内にある、陶製祠背面に刻まれた「弘化三年」の銘によって、この窯の操業時期を知ることができる。この祠の材は、窯跡から採取された瓦破片と同じもので、茶褐色を呈し、赤褐色顔料を塗って焼き上げられた特徴をもっている。瓦の供給先は明らかではないが、平林水室神社は、かつて鷹尾寺と言ひ宝亀元年に創建されたという伝えをもつ名刹であったが、明治初年の神仏混濁禁止令によって廃寺となり、今は神社だけが残ったものであるところから、鷹尾寺に運ばれた可能性が高いであろう。

19. 境瓦窯跡 (さかい)

場所 中巨摩郡敷島町境字西川 村社神明社の南側 (位置は第9図参照)

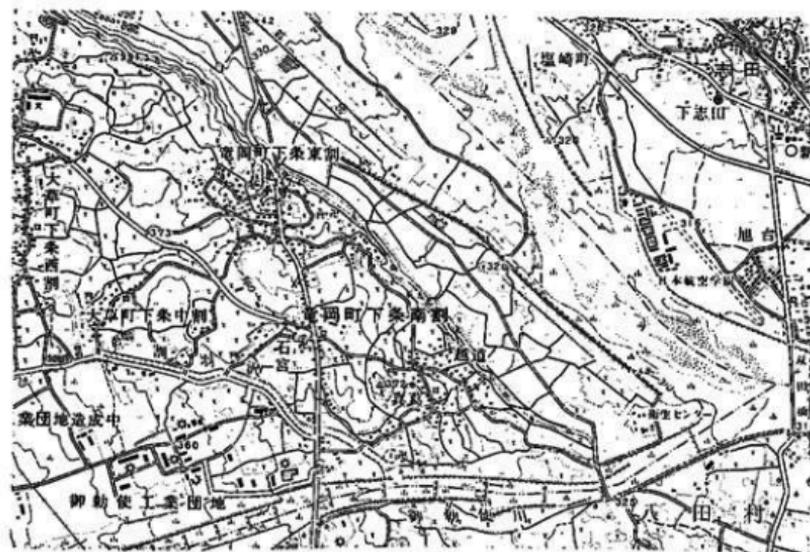
時代 江戸時代 弘化年間～明治35年頃

製品 瓦

甲府城修理に瓦を供給した窯で、古文書に「弘化三年 巨摩郡境村瓦師富吉 職人久兵衛」の名が見える。参考文献 1969 『甲府城総合調査報告書』山梨県教育委員会

20. 下条南割瓦窯跡 (しもじょうみなみわり)

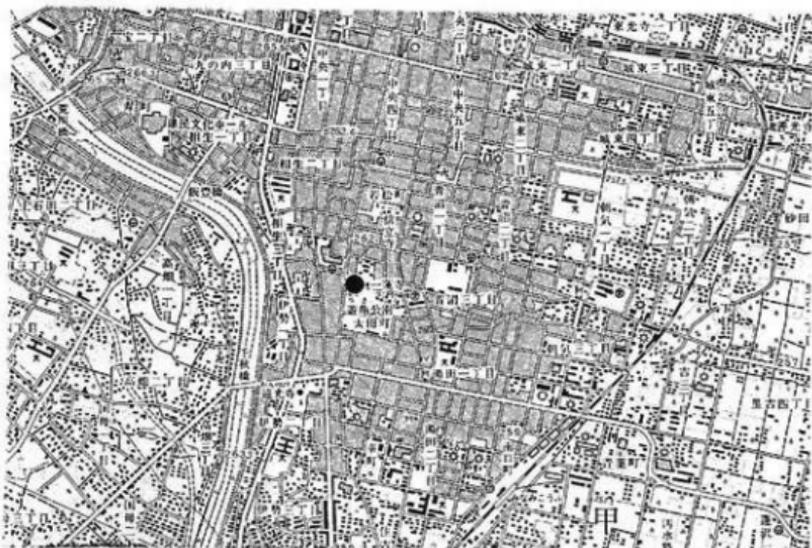
甲斐国志巻之百二十三付録第五に「武川筋ノ下条南割ニテ造ルハ水壘ニ用ケル」と見える。現地踏査を行ったが発見できなかった。



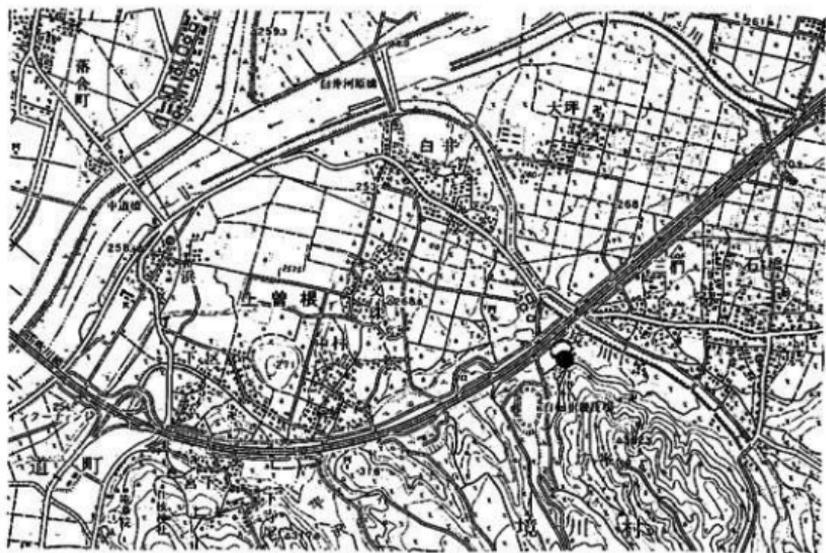
第76図 下条南割窯跡位置図

21. 一蓮寺窯跡(いちれんじ)

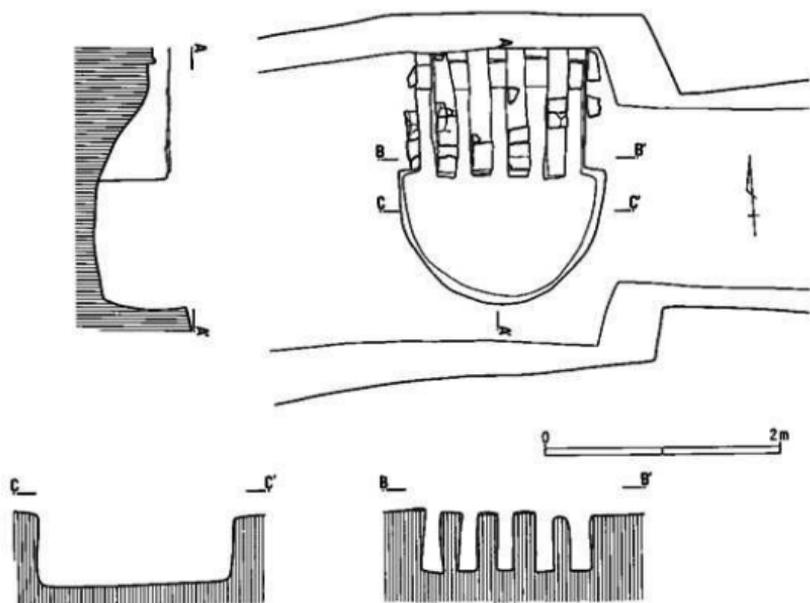
甲斐国志卷之百二十三付録第五に「府中一蓮寺ノ寺家町ニテ作ル土器種々ナリ」と見える窯。現在は住宅地となっており場所は不明である。



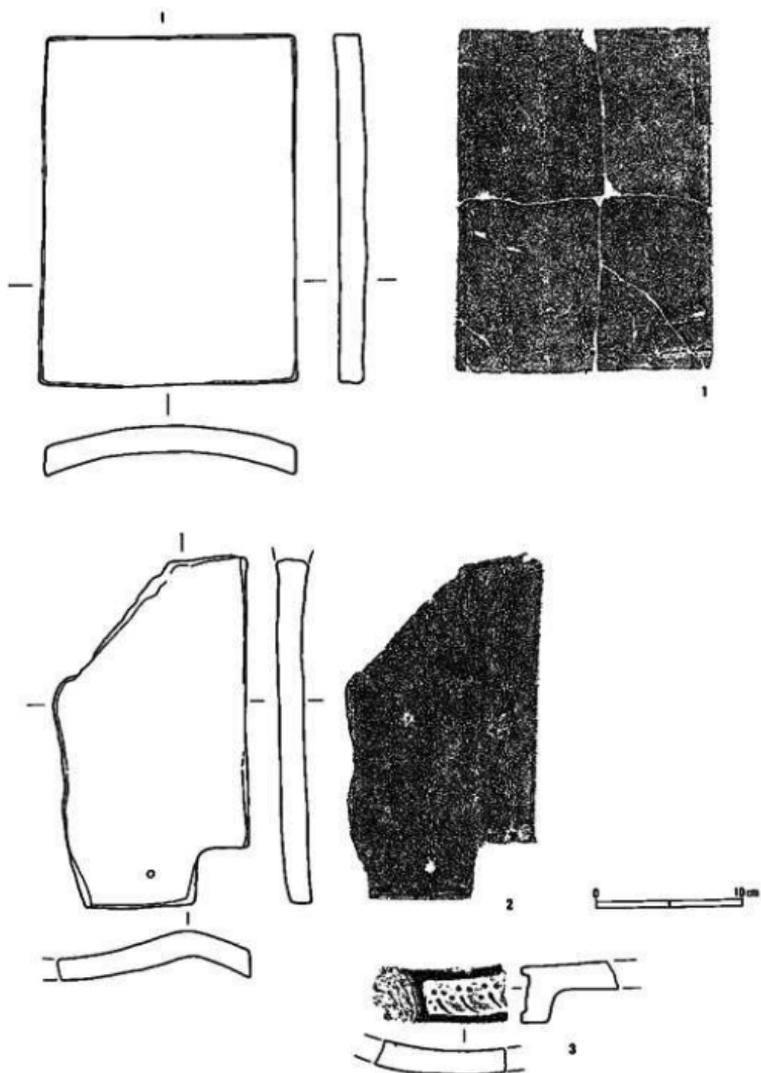
第77図 一蓮寺窯跡位置図



第79圖 下向坊ヶ峰瓦窯跡位置圖



第80圖 下向坊ヶ峰瓦窯跡全体圖



第81圖 下向坊ヶ峰瓦窯出土遺物

24. 不動窯跡（ふどう）

場所 甲府市塚原町不動字茶碗屋

時代 江戸時代～明治初期か

製品 土師質土器 鉢 蓋

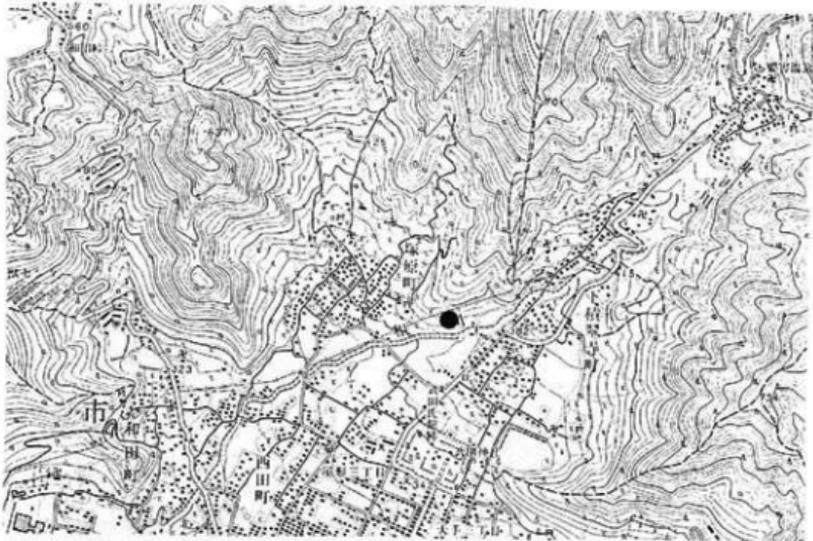
甲府盆地の北縁、相川の右岸にあり、山の尾根先端が相川によって削られた傾斜地に立地する。遺跡は道路と畑によってほぼ完全に破壊されているものと思われるが、一部より壁体及び土師質土器破片が出土する。なお、この調査には甲府市史編纂室数野雅彦氏の協力を得た。

参考文献 甲府市教育委員会 1986

『甲府の遺跡』



不動窯跡



第82図 不動窯跡位置図



第83図 不動窯出土遺物

第3節 近代の窯

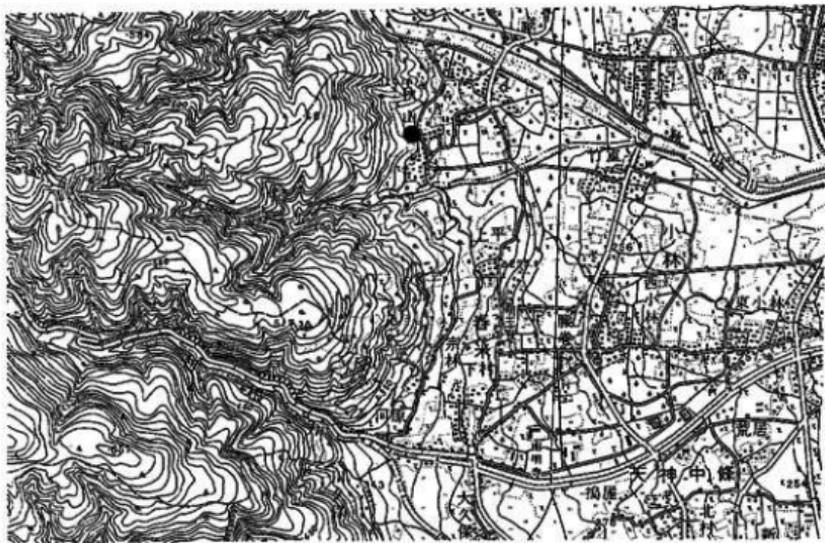
25. 秋山焼窯跡（あきやま）

場所 中巨摩郡甲西町秋山1136番地

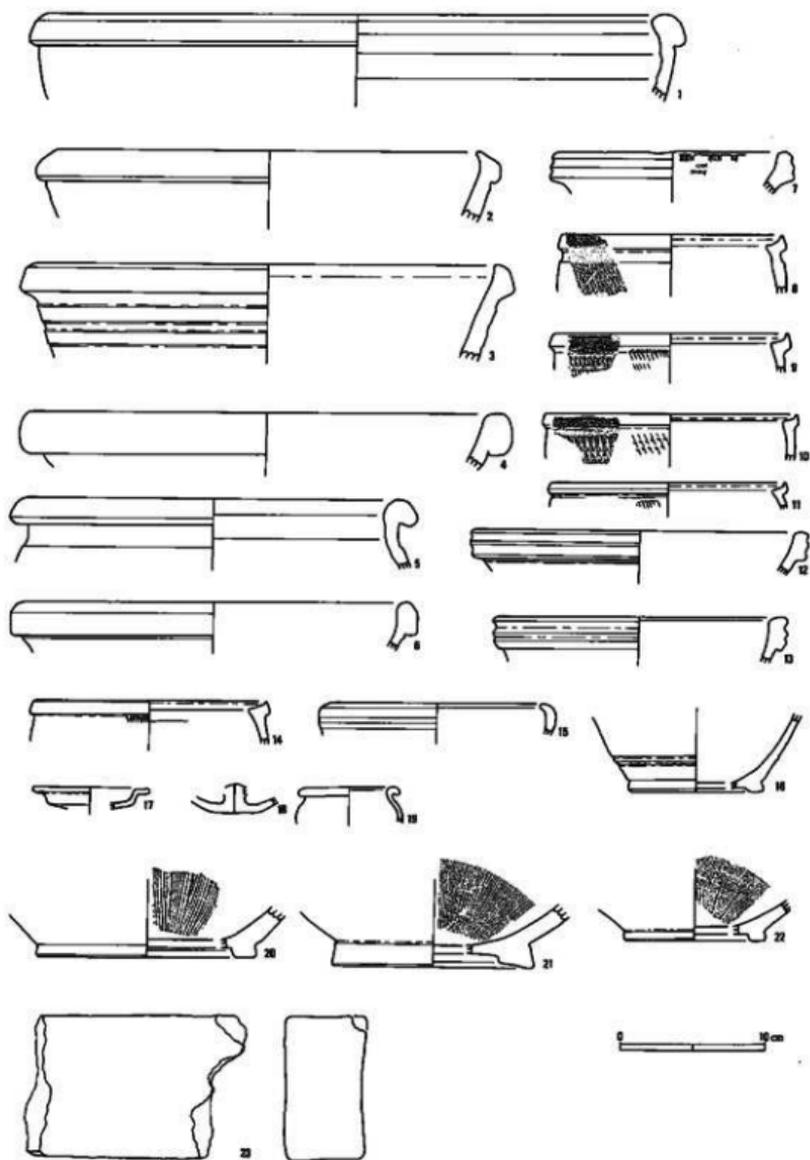
時代 明治時代

製品 壺・壺・徳久利・土瓶・玩具・置物など

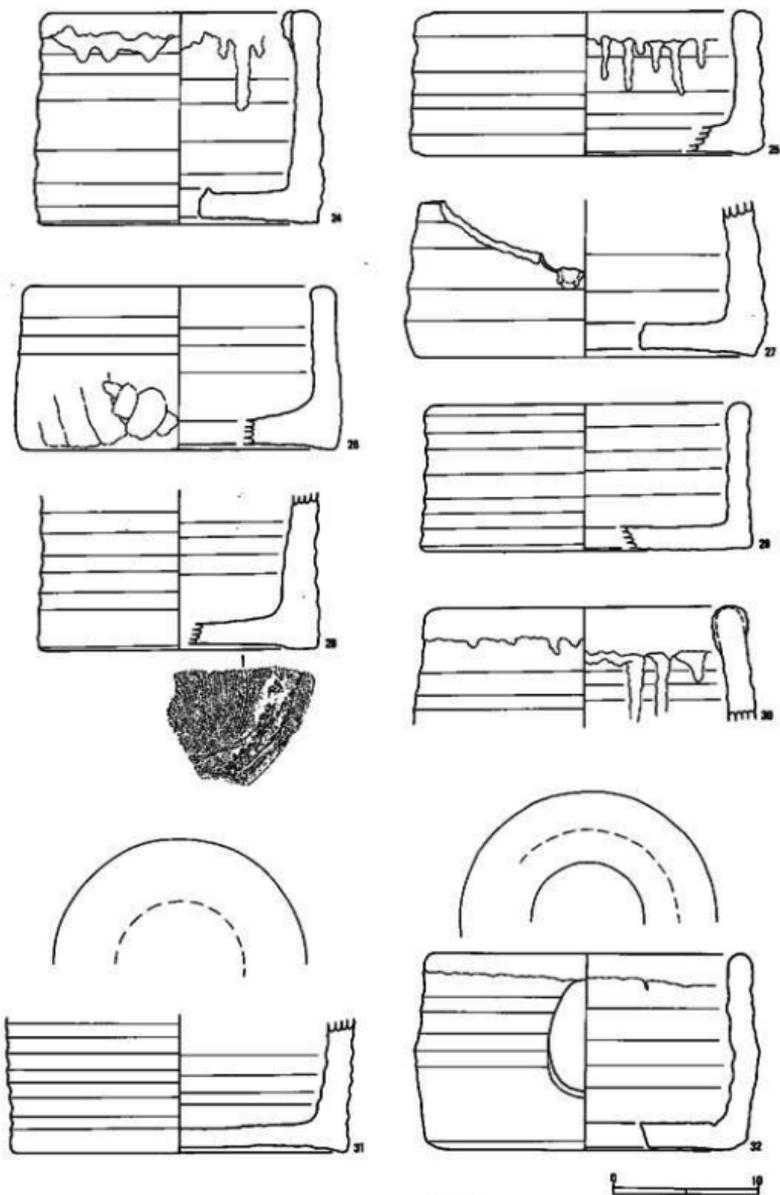
「甲西町秋山で古郡長吉が1872（明治5）年ころ瀬戸の職人を使って始めたが試作で終わり、のち弟の三四吉が分家し焼物業を受け継ぎ土びんを作った。薄い焼き物を作るには土質が悪くて割れやすく、ロスが多かったが、1887（明治20）年ころに奥田信斎が、家族と来てから厚物のつば、かめ、とくりなどを作るようになった。白地に緑色を掛けたり、茶色、墨色または常滑風のものなど、いろんなゆう薬を使って焼いた。そのほか玩具の泥面子や置物まで作った。1894（明治27）年に信斎がこの地を去り窯の火は消えた」（丹後裕美 1989 「秋山焼」『山梨百科事典』山梨日日新聞社）



第84図 秋山焼窯跡位置図



第86図 秋山焼窯出土遺物 1



第86図 秋山焼窯出土遺物 2

26. 愛宕焼窯跡(あたご)

場所 甲府市愛宕町141番地 愛宕神社旧境内

時代 明治時代

製品 土瓶 花瓶 小皿など

「愛宕焼は、明治の初年、市内若松町で酒造を業とし、傍ら山梨県酒造検査官をも動めた早川治左衛門が、5・6年のころ、帯那の水晶鉱脈下にある白土を得て陶器製造を考案し、時の藤村県令との協議の結果、種々の試行をへて深町の畑に築窯したのに始まる。京都より職人を招き、土瓶・小皿等を焼くに至ったが、その後、深町を捨て愛宕山に本窯を築き、一般日用品のほか、花瓶等も製作して次第に名品を作るようになり、博覧会で入賞するまでになった。特に女流南画家、野口小頼の絵付けによる花瓶は愛宕焼の代表として知られるが、明治15・6年ごろには工場閉鎖により生産が中止され、そのまま廃窯となった。」(1988 『甲府市史』別編Ⅱ 美術工芸)

現地は宅地化され窯の位置は明らかではない。
参考文献 丹後裕美 「甲斐の諸窯」『日本やまもの集成』2 平凡社



愛宕焼(愛宕神社蔵)



第87図 愛宕焼窯跡位置図

27. 小倉焼窯跡（ここえ）

場所 北巨摩郡須玉町小倉2738番地他

時代 明治～大正

製品 徳久利 鉢 片口 雷平 壺 甕 播鉢 内耳土器 瓦 火爐 植木鉢 花瓶
土管 その他

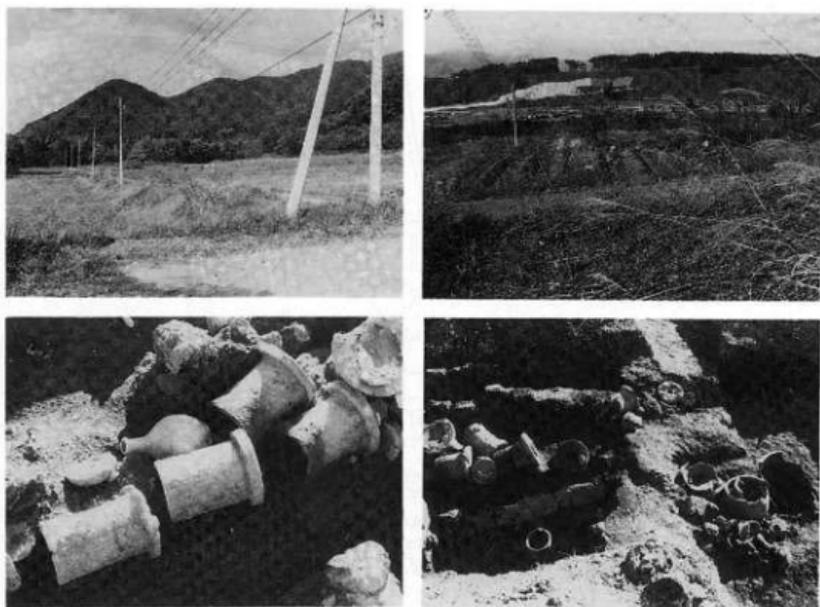
須玉川の左岸段丘縁に位置し、東側にある斑山の土を使って明治初期に焼き物生産が始まった。明治10年に行われた内国勸業博覧会に、小倉村丸茂壺左衛門が花瓶・植木鉢・火爐を出品し、内務卿従三位大久保利通より褒状を受けている。この時の製品は素焼きの陶質土器であったが、明治27年頃、秋山焼を営んでいた奥田信斎が移りすんで、釉薬を掛けた陶器を生産し、日用雑器として北巨摩地方に広く流通した。奥田信斎は明治35年にこの地で没し、近くの見本寺に葬られているが、家業は養子の雄蔵が継ぎ、大正末年まで焼き物を生産した。しかし、製品の中には瓦や土管などがあることから、最終的には、日用雑器だけでなく様々な焼き物を生産して生計を立てていた事が窺えよう。これは、1904年の中央線開通に伴い、大窯業地帯からの瀬戸物や信楽焼などが、大量に安く運び込まれた結果とも言われ、県内の零細な窯は火を消さざるを得ない運命にあったのであろう。

小倉焼窯の調査は、1988（昭和63）年12月9日から22日の間行い、9本のトレンチによって2基の窯を検出した。2号窯は削平されその規模は明らかではない。1号窯は段丘の縁にあり、西側焚口が崩落していた。このほか、上小倉集落の東斜面にも同時期の窯がある。

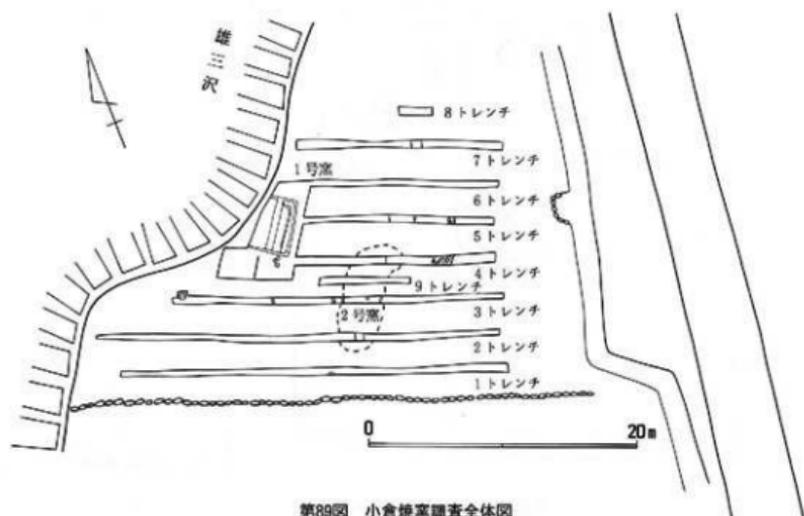
参考文献 丹後裕美 「甲斐の諸窯」『日本やきもの集成』2 平凡社



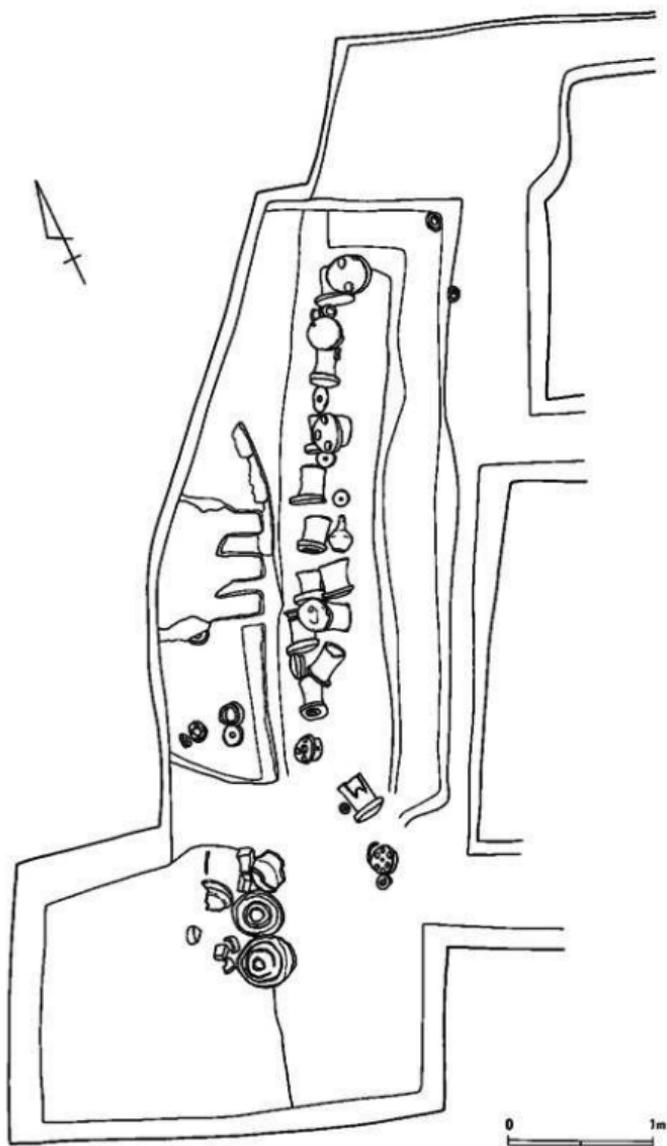
第88図 小倉焼窯跡位置図



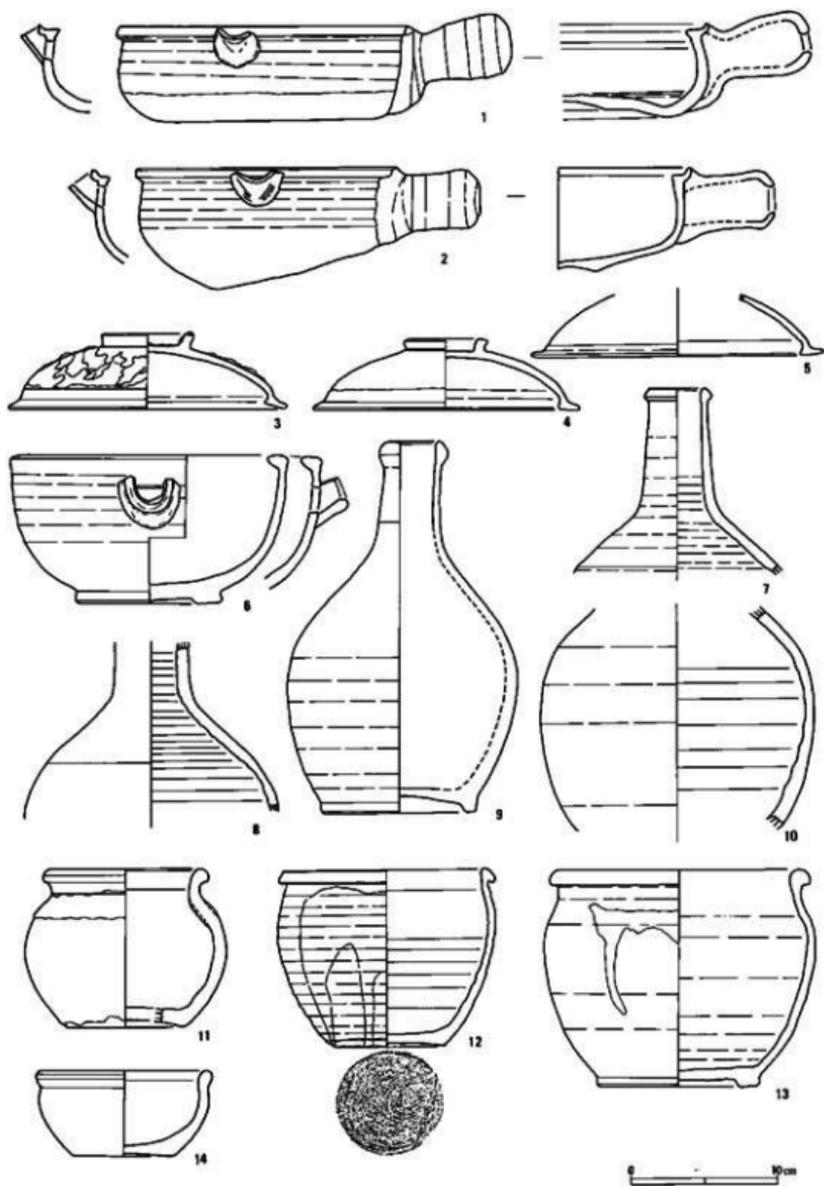
小倉焼窯跡遠景 (左上) (右上) 1号窯内部 (下)



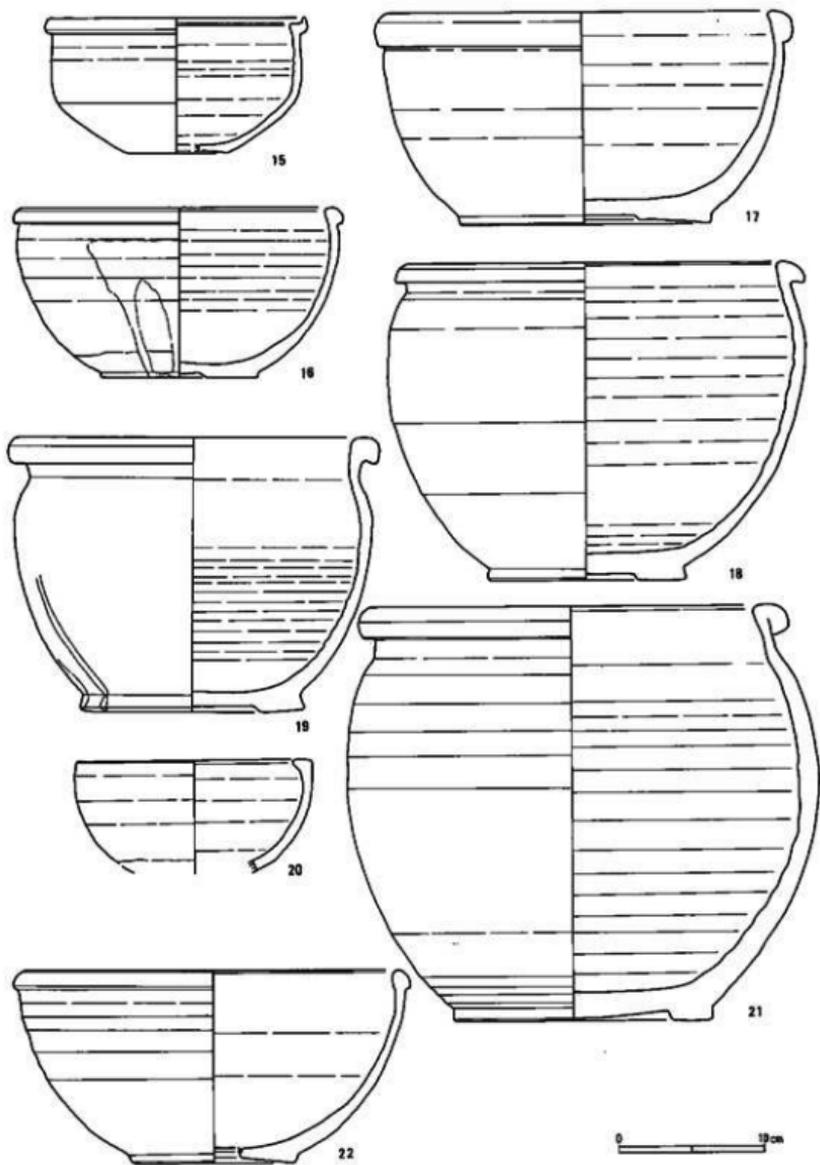
第89図 小倉焼窯調査全体図



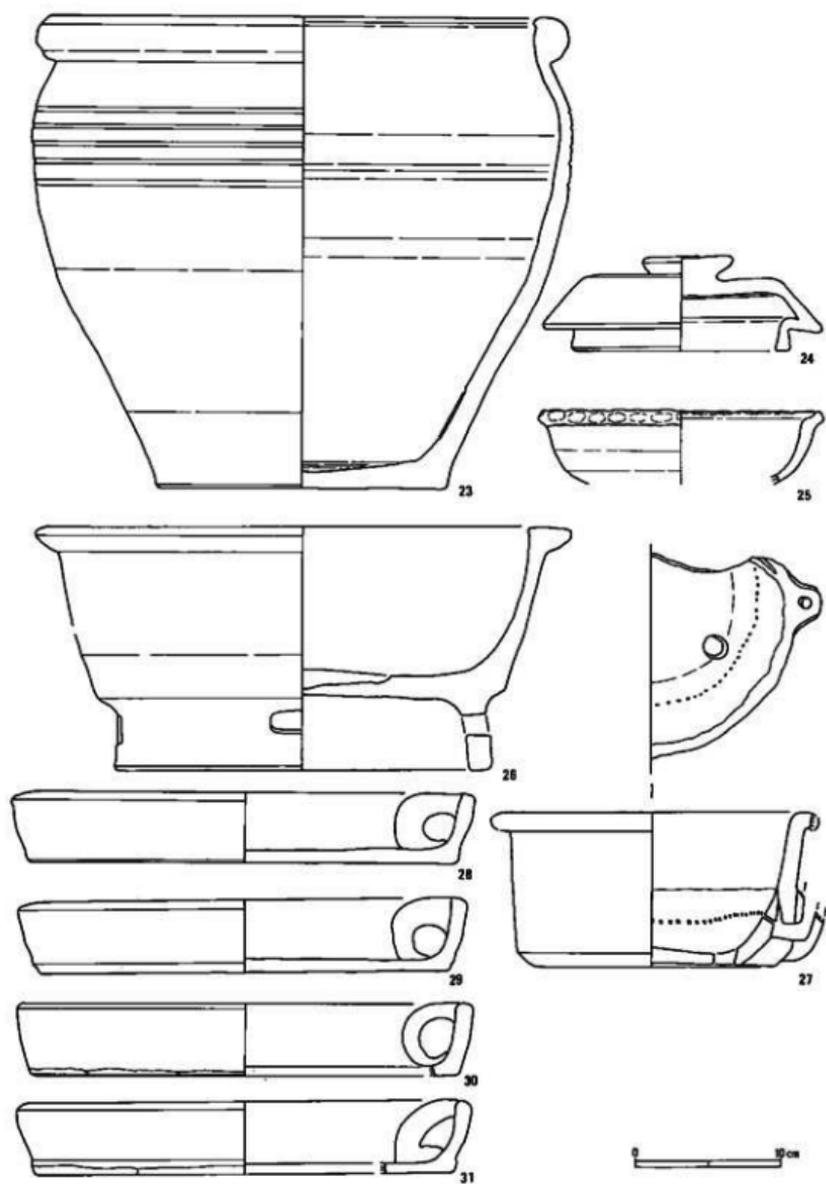
第90图 小倉焼窯1号窯平面図



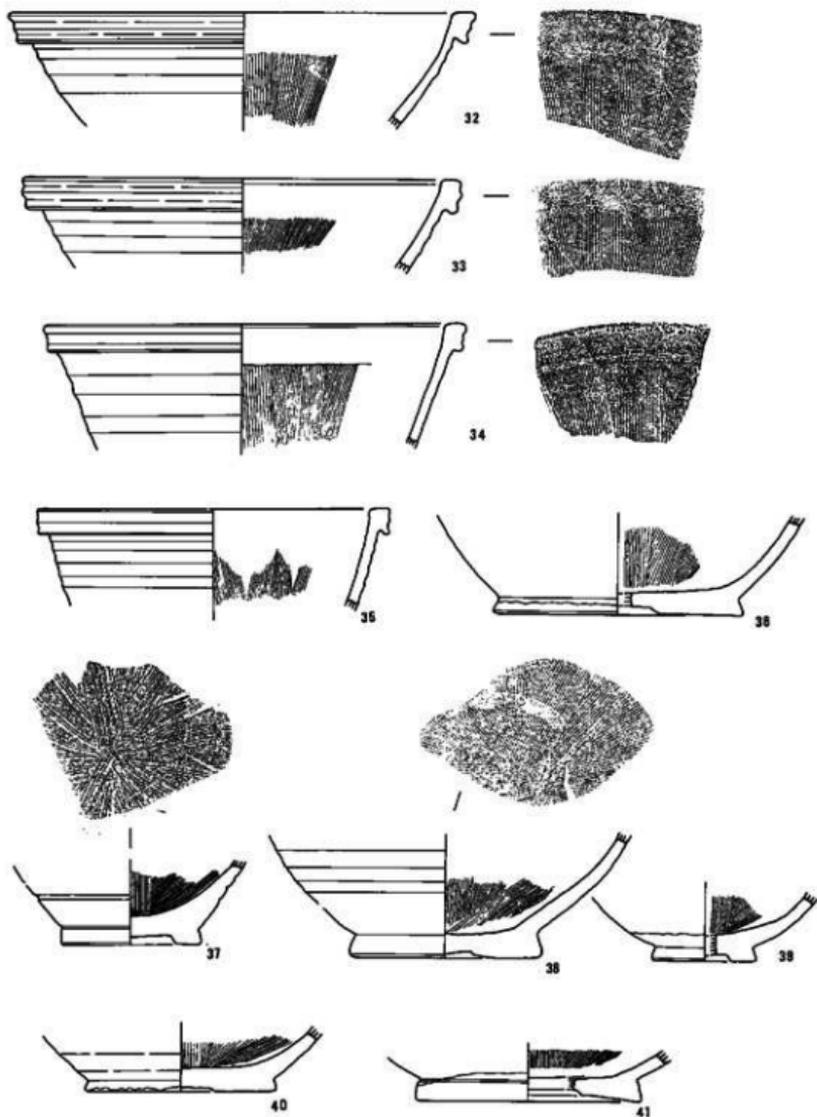
第91圖 小倉燒窯出土遺物 1



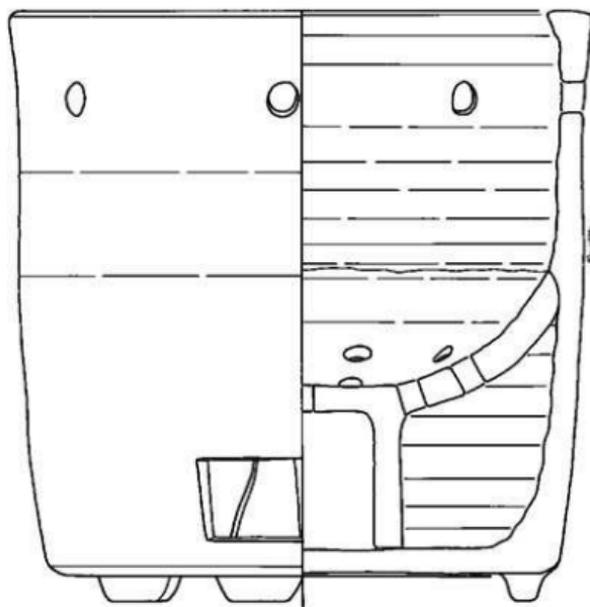
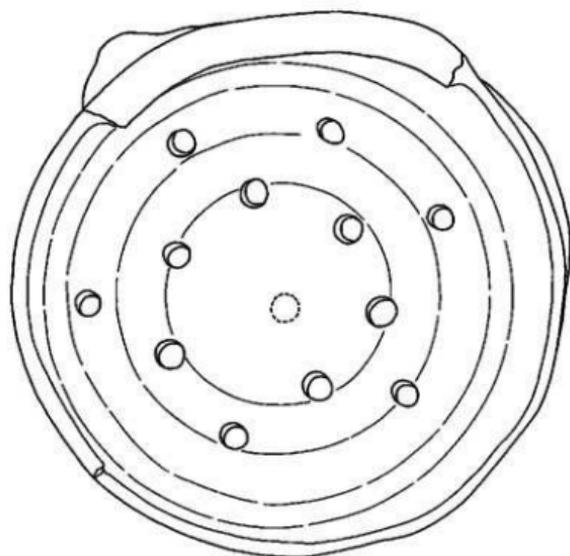
第92图 小倉焼窯出土遺物 2



第93圖 小倉燒窯出土遺物 3



第94回 小倉焼窯出土遺物 4

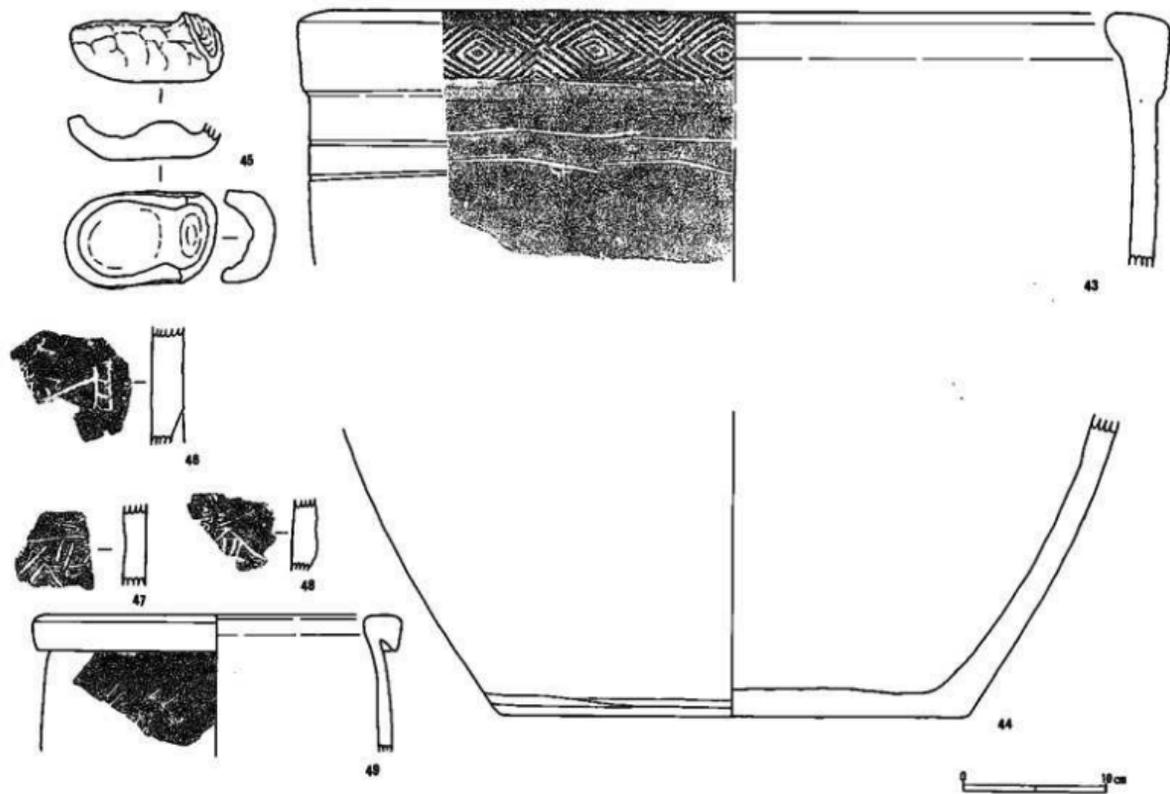


42

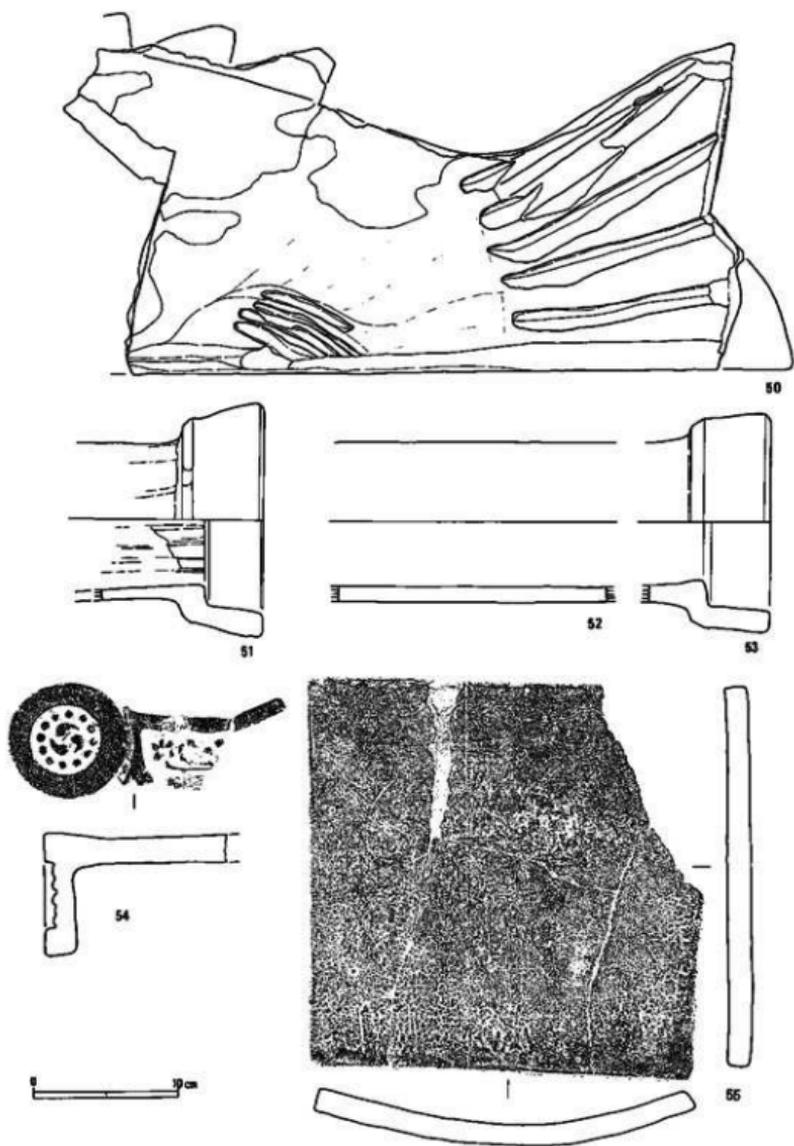


0 10 cm

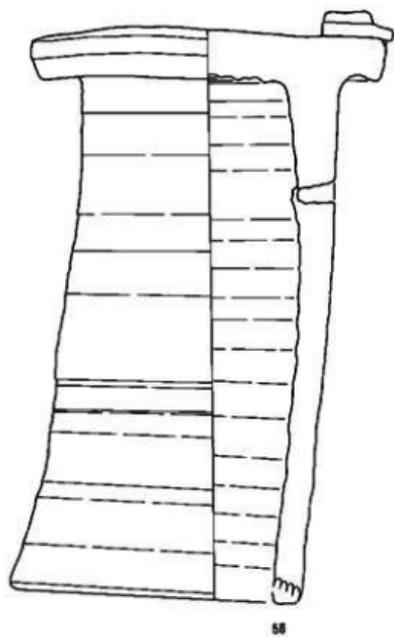
第96図 小倉焼窯出土遺物 5



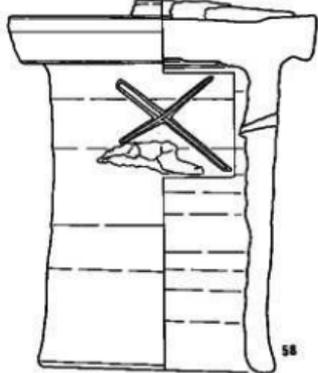
第96圖 小倉桃葉出土遺物 6



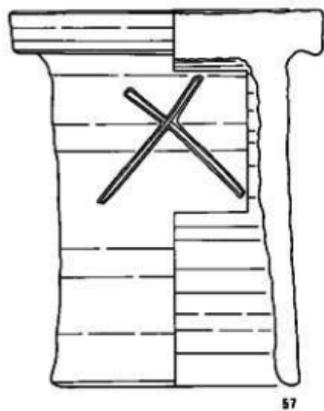
第97圖 小倉燒窯出土遺物 7



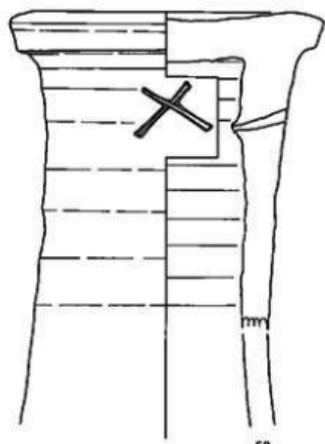
56



56



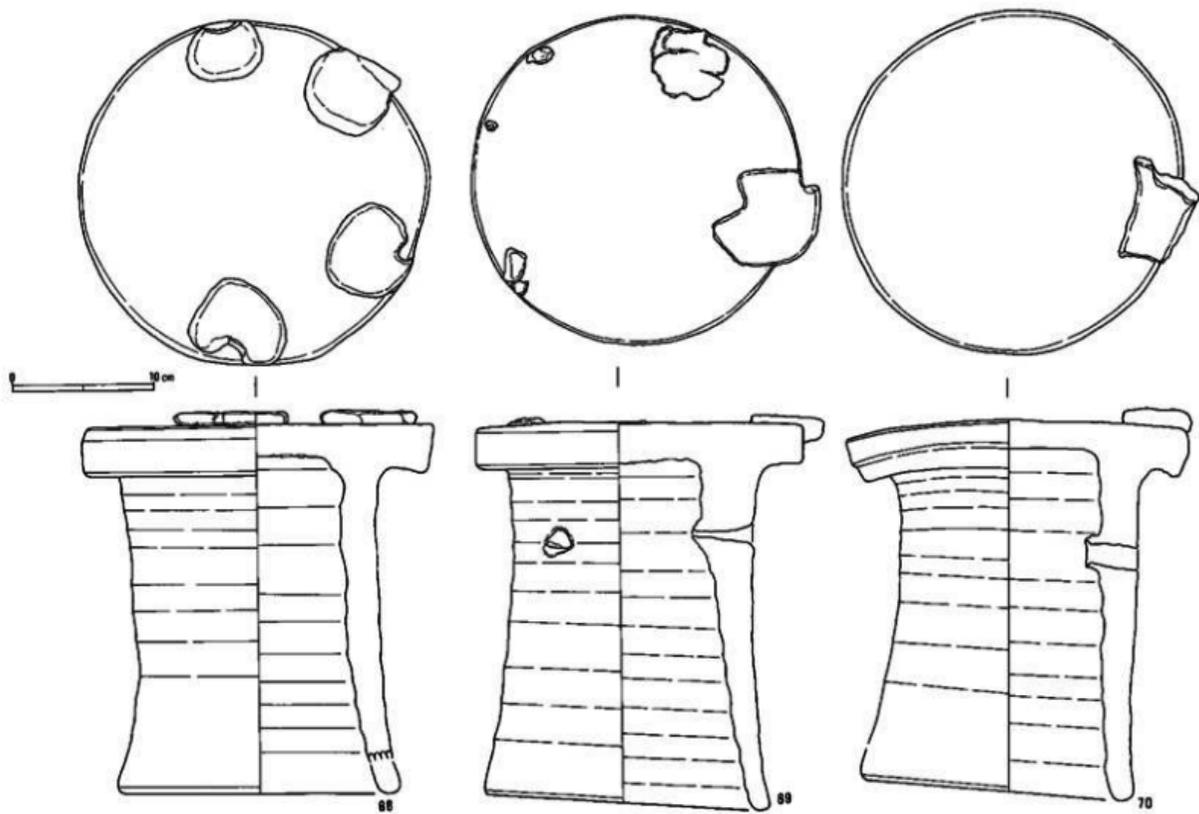
57



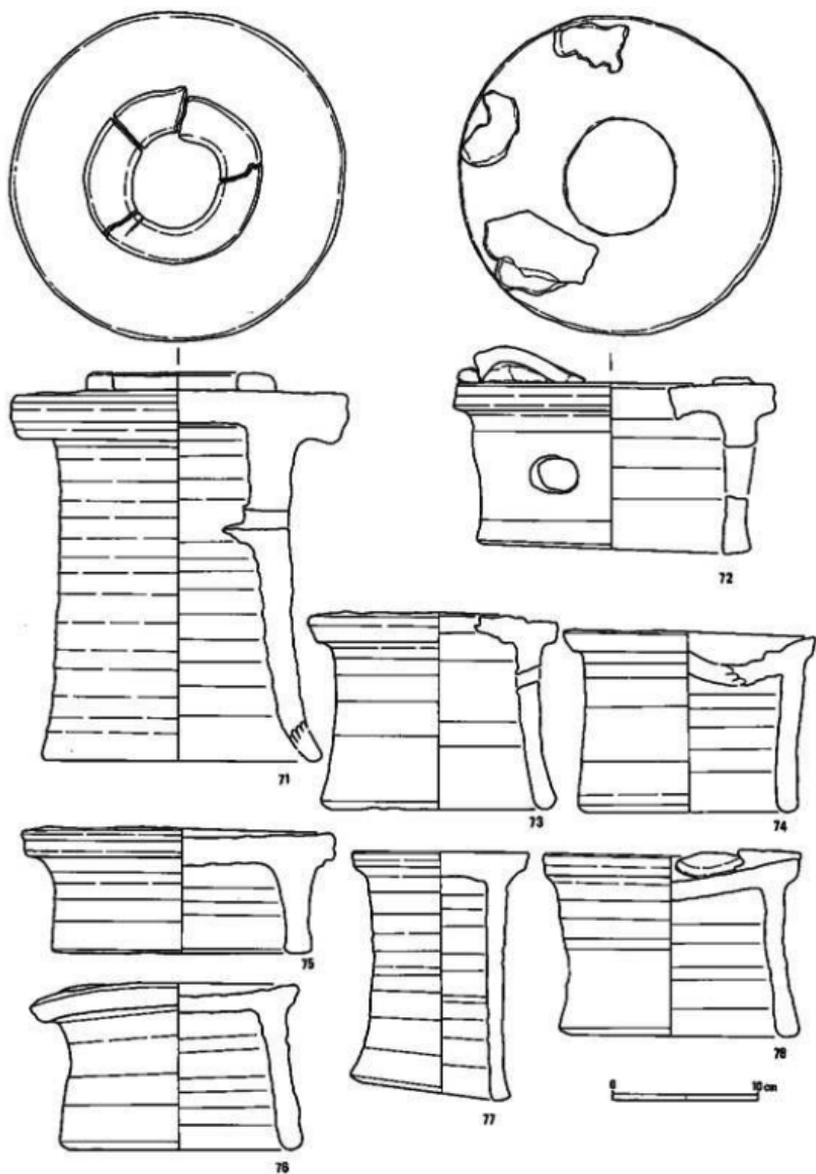
59



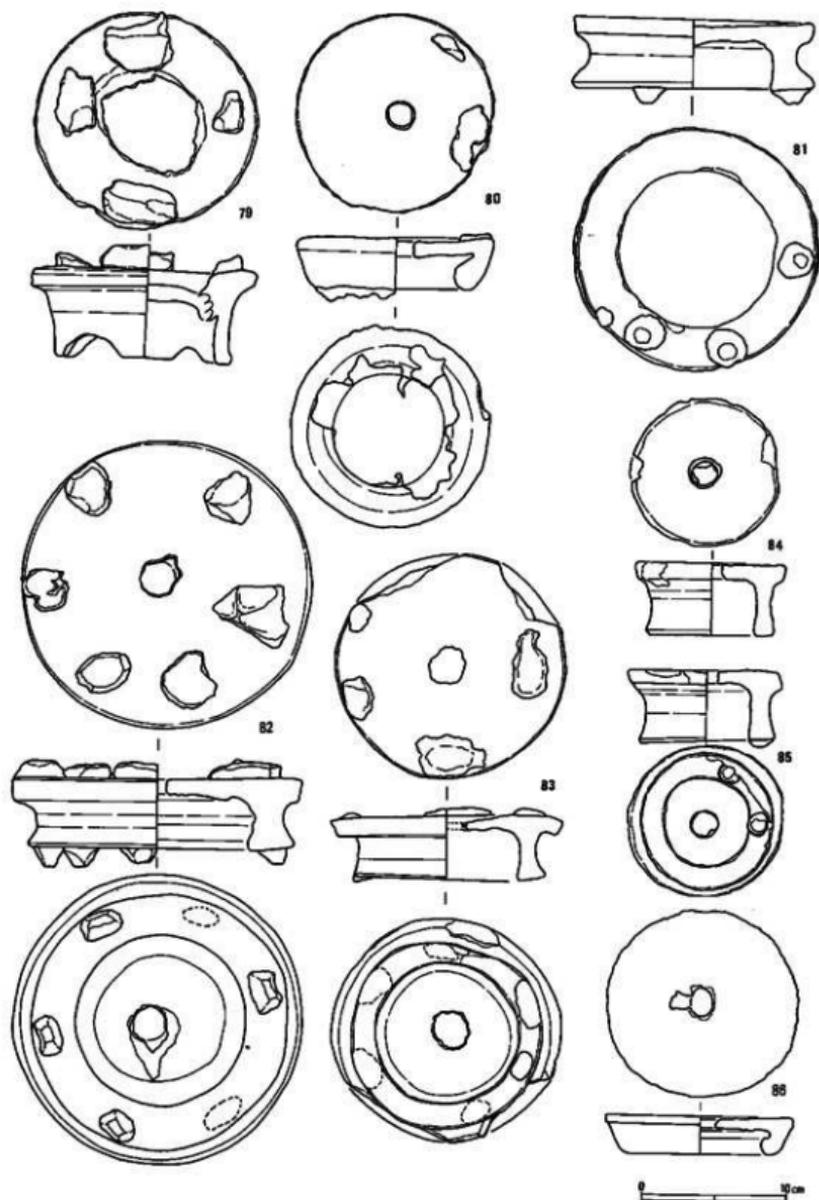
第08圖 小倉燒窯出土遺物 8



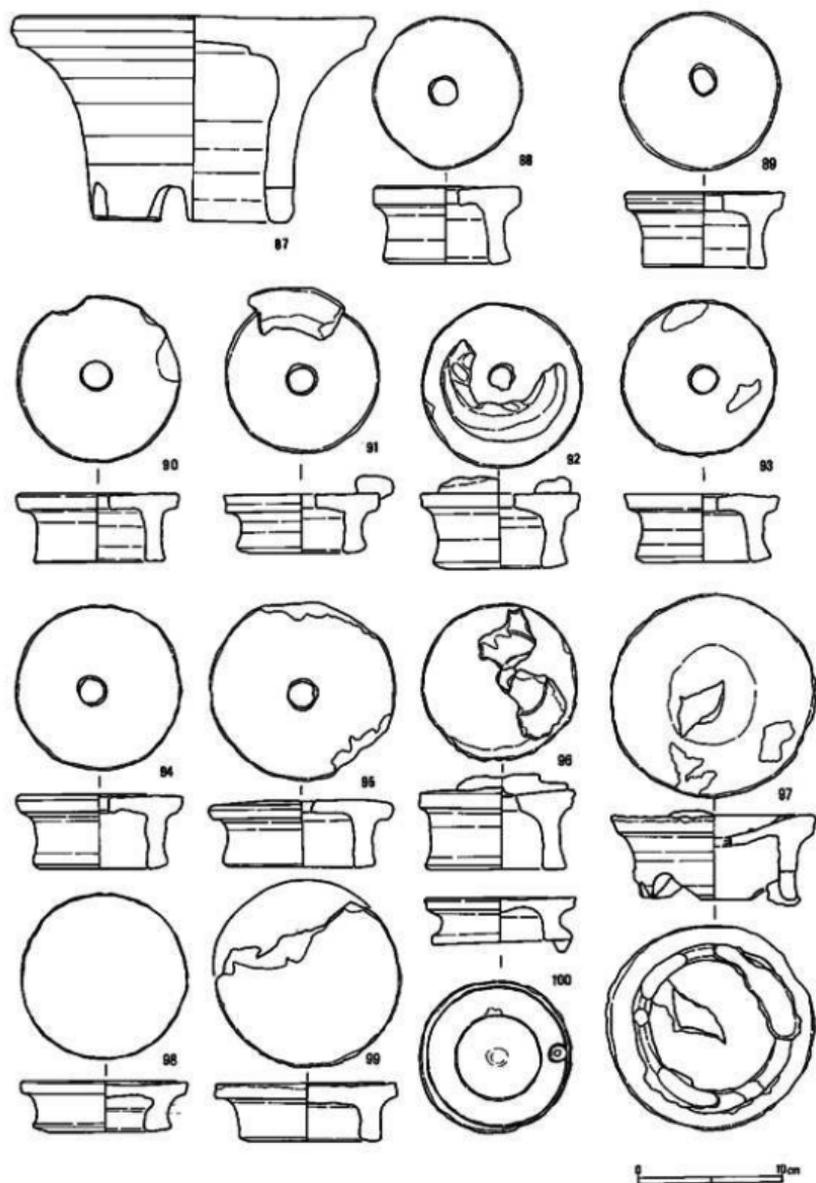
第90圖 小倉桃窯出土遺物 9



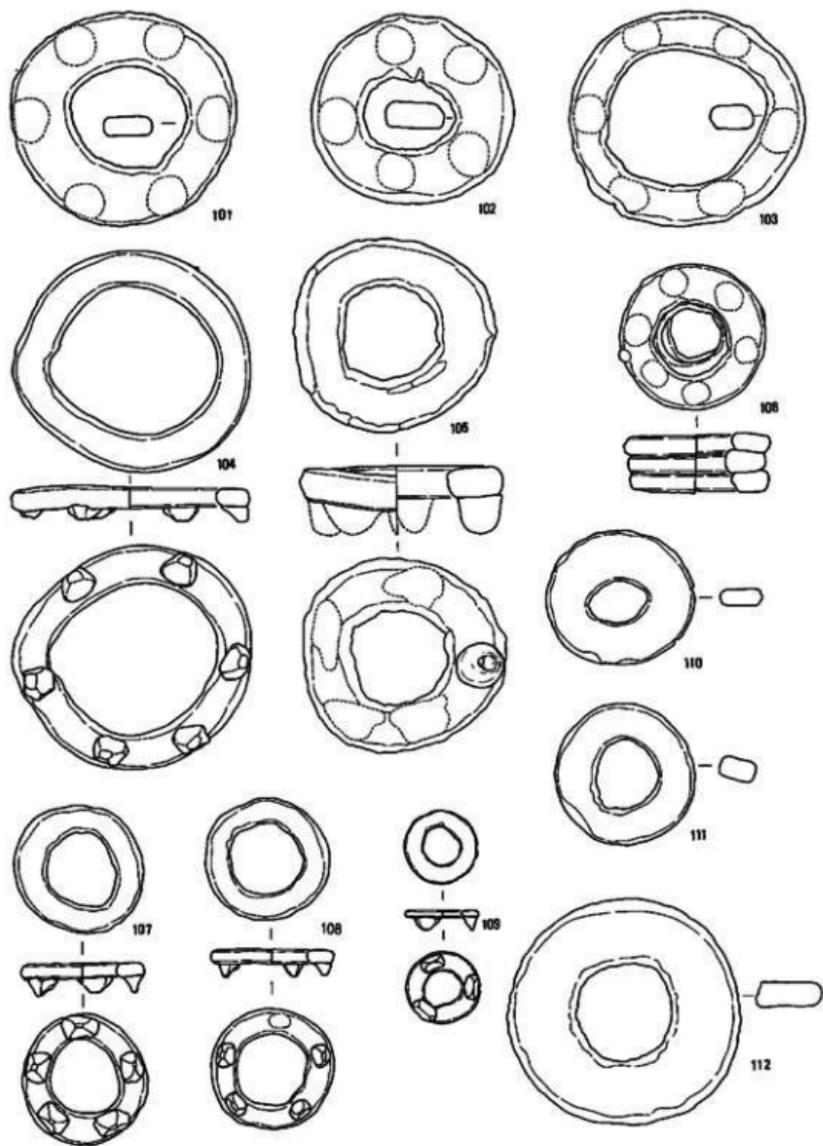
第100圖 小倉燒窯出土遺物10



第101圖 小倉焼窯出土遺物11



第102圖 小倉銀葉出土遺物12



第103图 小倉焼高出土遺物13

28. 東洞瓦窯跡・東向瓦窯・明野瓦窯跡（ひがしぼら・ひがしむき・あけの）

いずれも北巨摩郡下にある窯跡で、東洞瓦窯跡は高根町村山北割282番地の義見善光氏宅、及びその南の義見市三郎氏宅で瓦が焼かれていた。義見氏は三河の出身で、明治年間にこの地に移りすみ、近くの粘土を使って棧瓦を生産していたが、粘土不足などにより、昭和30年代には窯の火を消した。

東向瓦窯の林嘉正氏宅は、大正時代に甲府市相川町から須玉町東向に移住し、棧瓦の生産を行っていたが、現在は休業している。

北巨摩郡明野村には三河国から明治末年に瓦職人の兄弟がやって来て、兄の遠藤清秀は上神取で、弟の遠藤与重郎は浅尾新田で操業した。与重郎の子・孫の三代が瓦製造を行ったが、昭和50年に廃業した。このほか厚芝でも明治中期に三河から瓦職人がきたが、二代で廃業しているという。



東洞瓦窯跡

参考文献 山梨県教育委員会 1988

『山梨県の諸職』



第104図 東洞瓦窯跡位置図

29. 甲運瓦窯跡(こううん)

場所 甲府市横根町・和戸町・川田町・桜井町、石和町松本

時代 明治～昭和

製品 瓦

古代より窯業の盛んな地域として知られていた本地域の中世・近世の様子は、明らかではなく、文献も残っていない。明治時代の『甲府総町、西山梨郡、中巨摩郡町村誌稿』物産表に、次のように記されている。

「甲運村 明治十二年調

繭一千五百六拾五斤 蚕種百四拾六個 葡萄九千斤
佳味 実綿千五百斤佳ナラス 桑葉四万 五千斤最モ
佳 石材千五百駄質佳 瓦貳拾万枚同上

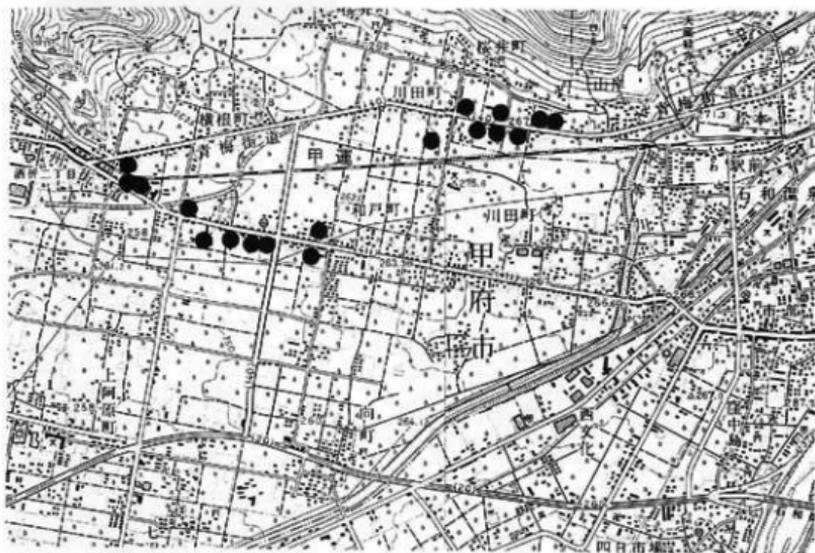
以上蚕種ハ概ネ横浜ニ其他自用ノ外ハ甲府
市中ニ輸送ス」

現在操業している窯は全くない。

参考文献 1989 『甲府市史』史料編第六巻



甲運瓦窯跡



第105図 甲運瓦窯跡位置図

30. 里垣瓦窯跡(さとがき)

場所 甲府市酒折 一帯

時代 明治～昭和

製品 瓦

窯業遺跡としての遺構は無いが、明治時代の『甲府總町、西山梨郡、中巨摩郡町村誌稿』物産表に、次のように記されている。

「里垣村 明治十二年調べ

葡萄産出高式千五百斤味稍佳ナリ概ネ市中及近村へ輸送ス下同 甘薯同貳千六百斤味最モ佳ナリ 石材同六千駄賃最モ良シ 瓦同八万枚質佳ナリ」(参考文献 1989 『甲府市史』史料編第六卷)

窯群は旧酒折村窯群は旧酒折村現山梨学院大周辺にあって、大正時代には7～8軒が操業していたと伝えられる。しかし、大正末期には廃業したか、東の川田町に移ったという。

なお、この代金は八百円とあるから、当時の瓦1枚は1銭ということになろう。



摩利支天神社の碑



第106図 里垣瓦窯跡位置図

甲運村と里垣村の境に摩利支天神社がある。この境内に大正12年2月に建てられた『聖徳太子遺徳之碑』がある。この碑は、国中地域の山梨瓦製造組合同業者が賛同人81名の名前を連ねて建立したものである。この文面には、瓦生産の遠因が、聖徳太子の仏教興隆政策によるものとし、その遺徳を偲んでいる。

31. 龍地瓦窯跡(りゅうち)

場所 北巨摩郡双葉町竜地・下今井

場所 明治時代～現代

製品 瓦

茅ヶ岳山麓の粘土を使って、焼かれた窯で、江戸時代文化文政の時、土鍋(ほうろく)を焼いていたという記録『甲斐国志』にある。瓦生産をはじめたのが何時のことか明らかではないが、近年まで生産活動を行っていたのは竜地6700番地の興石瓦工業、6445番地杉浦美知子氏、帯金氏などである。興石氏の祖先は愛知県出身で、三代前ごろ甲府市積翠寺に転入後、別れて双葉町下今井に入り、大正時代に竜地で窯を築いたという。現在は1軒も瓦生産を行っていない。

下今井では2415番地興石宇一氏、2421番地興石アキ子氏、2422番地興石義幸氏、2697番地斉藤喜次氏などの家で瓦を製造していたが、現在は廃業している。



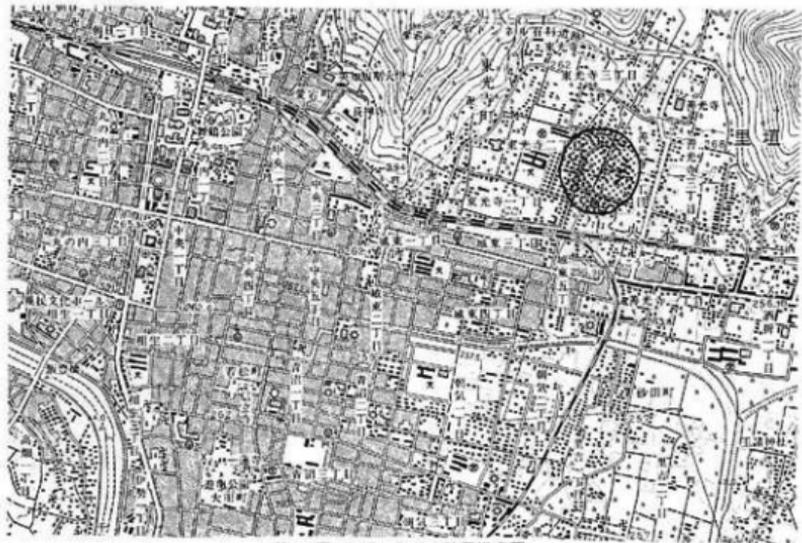
第107図 龍地瓦窯跡位置図

32. 甲斐ヶ根焼窯跡（かいがね）

「藤村紫朗県令が名付けた愛宕焼の成功により、山梨でも良質の焼き物が焼けることがわかり、その技術を受けて1914（大正3）年甲斐ヶ根焼がおこった。甲府市深町（現城東二丁目）の近藤安信（瑞雲）が愛宕焼と同様に帯那町や御岳塔岩の白さ、また、南湖の土を混ぜて日用雑器を焼いたが、1924（大正13）年に柳宗悦が山梨を訪れ木喰五行上人の仏像に巡り会い、安信もそれに感化されて木喰上人像、御岳の土鈴や民芸風の花瓶、菓子器を焼いた。万葉にちなみ甲斐ヶ根焼と名付けて甲府駅前や御岳の土産品店で販売、1930（昭和5）年ごろまで焼いた」（丹後裕美 1989 『山梨百科事典』 山梨日日新聞社）



甲斐ヶ根焼



第108図 甲斐ヶ根焼窯位置推定図

第IV章 結 語

本県の窯業遺跡については、近年の天狗沢瓦窯跡の概報を除けば、過去の正式な調査もなければ、確実な遺構の報告も無い。窯跡と想定される遺跡で、最も古い報告は昭和7年(1932)仁科義男氏による「富士山麓の古代窯跡について」『山梨県史跡名勝天然記念物報告』第7輯である。この窯は、現在の知識で判断すれば、平安時代の竪穴住居に築かれた<竈>と考えられるものである。昭和23年、甲府市川田町から瓦窯が発見され、この報告書が中島正行氏によって「甲斐国分寺瓦窯址発見経過報告—巴瓦製作の一考察」として発表されている。窯を直接掘ったものでなく、微高地南面裾に流れる水路中から、多量の瓦、焼土などを採取したもので、このことから窯の存在を確信したと言われる。採取資料は1989年12月に中島氏から県立考古博物館に寄贈されたが、この中には窯の中で溶けて接合してしまった瓦などが含まれており、軒丸瓦にも焼き歪みが見られるなど、窯跡出土品として以外には考えられない資料ばかりで、中島氏の卓見に恐れ入る次第である。また、今回試掘調査したトレンチでも焼土が一部検出され、窯跡であることはほぼ確実であろう。

山本寿々雄氏は『山梨県の考古学』(1968 吉川弘文館)の「窯跡」で、<牛居沢>、<上ノ段>、<川田>についてとりあげている。

『境川村誌』「境川村内の窯跡」で、上野晴朗氏は藤壱字蘇在家・牛居沢、小黒坂立石、大久保の子ノ神社の敷地、手古松の北の台地(山田)、小黒坂の熊野神社境内の5カ所をあげている。この地域の窯については、橋本博文氏が「甲斐における須恵器生産」(1979 『丘陵』6号)に著し、ここでは前記の外に三瀬下向窯址を取り上げ、その出土品及び編年的な位置付けを行っている。しかし村誌や橋本報告は、いずれも正式な発掘調査の報告でなく、二次的な追認作業であった。また、下向窯・牛居沢窯跡以外の窯跡推定地は、一応試掘調査を実施したが、窯跡として認められる遺構は無かった。

窯跡の正式な調査は、数島町天狗沢瓦窯跡が最初で、すでに概報『天狗沢瓦窯跡』(1988 数島町教育委員会)が出されている。この窯は7世紀後半の白鳳時代瓦だけでなく、須恵器も生産していた、瓦陶兼業窯であることから、県内の窯業活動の初期の年代を知るうえで、基準となる窯である。このほか、甲府市史編纂に伴って、上土器1号瓦窯が調査され、報告(1989 『甲府市史』史料編第1巻)されているが、窯としての遺構は残存していない。

このように、調査以前には、窯跡として明らかになっている遺構は少なかったが、窯跡推定地の試掘調査を実施してみると、以外と遺構が残っていたり、新たに発見できたものもあった。特に、境川牛居沢窯跡は既に消失したものとされ、最も1基しかないと思定したところ、3基が確認されたことは、本県の窯業遺跡初期の様子を把握するうえで価値が高い。3号窯は焼成部と煙道部が道路によって削除されているが、本体の大部分と灰原が残っており、学術上貴重である。また、最も古いと思われる下向の須恵器窯は、基地の為に破壊されているが、土葬の為に穴を掘ったときに、ドーム状の焼土と須恵器が多量に出土したと言われている。この資

料は村教育委員会資料室に展示されているが、明らかに窯の内部で焼き歪みのできたものを含んでいる。この窯の所在を明らかにするために、トレンチを2本、基地の縁に沿って設定したが、灰原・窯本体は検出できなかった。そこで、地中レーダーによって、基地の中央を通る道を探索したが、窯と思われる反応は見当たらなかった。

また、江戸時代の窯の発見は、本県の窯業史にとって貴重な資料となろう。『甲斐国志』に記載された4カ所の窯のうち、その所在が明確になったのは双葉町宇津谷の窯跡である。宇津谷窯跡は2カ所あり、それぞれ窯の所在する字名や場所を冠して<峠の腰窯跡>と<諏訪神社窯跡>と命名してある。この二つの窯は、峠の腰窯が甕、諏訪神社窯が茶碗類を焼いている。諏訪神社窯の壁が、峠の腰窯で生産された水甕の口縁部を、レンガ状に積み重ねて築いていることから、その築造順番を推定することができよう。『甲斐国志』に記載されている水甕を主として生産したのは、峠の腰窯と見て間違いないところであるが、諏訪神社窯の釉薬をかけた上品な製品は、税を収めなくなった後に、余力を傾注して製作したものであろうか。いずれにしても、諏訪神社窯は県内の古代・近世の窯のうち最も遺存状態の良い窯であり、史跡としての価値は高い。また、峠の腰窯も一部は壊れているものの、ほぼ全体が残っている可能性があり、正式調査が望まれよう。近世の窯としてこの2基の窯は貴重である。近世・近代の瓦窯や陶器窯の概要も調査し、得られた所を掲載したが、小さな窯は各地で築かれていたようである。悉皆調査を心がけていたが、古代の窯跡の試掘に時間がかかり、近世・近代の調査が不十分となってしまった。明治・大正時代の窯の所在が分からなくなったものも多く、その製品がすでに散逸している場合がおおい。これらの調査は、今後も継続して行い、この報告書の充実を図るつもりである。

今回発見できなかったが、古墳時代の埴輪製作所やその窯、古墳時代の須恵器大甕の窯、北巨摩地方の奈良平安時代で多量に出土する須恵器の窯、あるいは大小久保遺跡出土の瓦窯、古代・中世寺院の屋根瓦の窯、中世の土師質土器・土鍋などの生産地が、どこかにあるのではなからうか。これも継続調査の対象である。それらの遺物が、総て県外から搬入された、と考えるのは困難であろう。

また、窯の存在を想定して試掘調査を行った箇所は、ここでは省略した。その概要については『年報』4～6号(1988～1990 山梨県埋蔵文化財センター)に記載してあるので参照してもらいたい。

今回の調査に関して、文化庁記念物課佐久間豊氏、山崎信二氏には現地の調査指導や遺物についてご指導をいただいた。また、窯跡の所在する市町村教育委員会には、地理的な案内や過去の経過などご教示をいただいた。試掘調査にあたっては、地元の地権者の方々のご理解をいただき、立ち入りが可能となり、作業には郷土研究会の方々に協力をしていただいたところも多い。文末ではあるが、関係者の方々に厚く感謝し御礼を申し上げたい。

付 編

1. 牛居沢遺跡における炭化材の樹種について

千野 裕 道

山梨県東八代郡城川村牛居沢遺跡において古墳時代の6世紀末から7世紀初めのもたとされる須恵器の窯跡が3基発見された。このうち2基の窯跡から炭化材が採取された。これらの樹種の同定を行い、須恵器を含む焼き物の焼成のための燃料材にどのような樹木を用いたかについて明らかにしたい。

1号窯からは1サンプル、3号窯からは3サンプル発見された。これらは破片となってしまうが、中には1個体あるいは1つの枝のものから割れたものとわかるものもある。これらはそれぞれ、すべての破片を実体顕微鏡(×6~40)によって観察を行った。この観察によってすべての破片はクヌギ類であることがわかった(表参照)。さらに横断面、接線断面、放射断面をそれぞれ観察できるように面をカミソリで切断し、電子顕微鏡用の試料台上に接着し、金蒸着を施し、電圧20~25KVで観察、写真撮影を行った。写真用のフィルムは6×7判のモノクロネガフィルムを用いており、トリミングは行っていない。また、炭化材はすべて原形を保っているものとは限らないが、2~5年輪の樹皮をも付着したサンプルの存在は、薪材が小径の枝材であったことを想像させる。以下にその識別根拠を示す。

年輪の始めに大導管が2~3列並び、そこから円形で厚膜の小導管が夏材部に配列する環孔材。放射組織は単列同性のものと複合放射組織をもつなどから、ブナ科コナラ属のクヌギ(*Quercus. acutissima* Carr.) かアベマキ(*Q. variabilis* Blume.)のいずれかの材であることがわかる。これらの材構造は類似しており識別は困難である。

クヌギは落葉高木で高さは15m、胸高直径は60cmになる。本州、四国、九州、台湾、朝鮮、中国、ヒマラヤにかけて暖帯地方に広く分布するが、わが国では薪炭材として植えられたので自然の分布地域は不明である。人里の近辺に多く分布し、奥山にはほとんど分布しない。アベマキはクヌギに似ており、山形、長野、静岡以西、四国、九州、台湾、朝鮮、中国にかけての暖帯に分布する。

以上のように、燃料材がクヌギ類によって占められるという結果を得た。このような結果が他の窯跡に用いられた燃料材とどのような関連性をもっているものなのか、若干考えてみることにしたい。

牛居沢遺跡における炭化材樹種

牛居沢 1号窯			クスギ類+
3号窯	871127	Na.1	クスギ類+
3号窯	871127	Na.2	クスギ類+ (2年輪部分) 直径2cm
3号窯	871126	Na.3	クスギ類+ (5年輪部分) 直径2~3cm
3号窯		Na.4	クスギ類+ (2年輪部分) 樹皮付

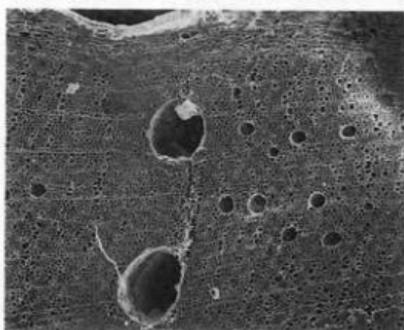
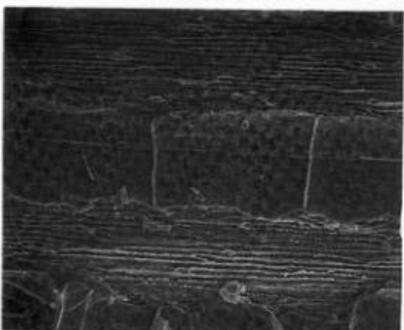
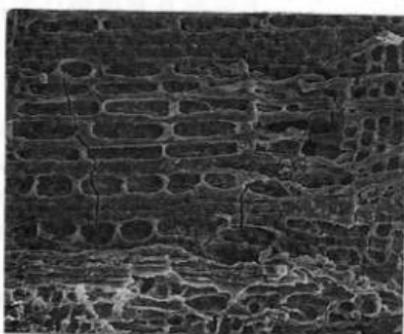
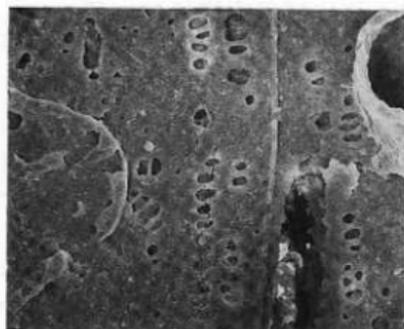
+ ; 破片の中にその種類が存在するという意味。

大阪府陶邑窯跡群では5~6世紀には主にカシなどの広葉樹が燃料材に用いられていたが、7~8世紀になると燃料材の主体はマツになるという。窯跡の密集する地区では燃料材の度重なる伐採によって窯跡樹林はマツの二次林に変化したとされている。いっぽう、先行する時期の窯跡が見られなく新たに窯を構築する地区では依然として広葉樹が用いられているという(西田 1978)。このように遺跡群において体系的に分析が行われた例は他にないが他の窯跡における分析例は陶邑の結果とは異なった傾向が出されている。7~8世紀に属する京都府周山1~4号窯では主にコナラ亜属が(西田 1982)、8世紀に属する群馬県天沼瓦窯ではコナラなどの広葉樹が(松谷 1982)、9世紀前半に属する愛知県石崎45号窯では主にクスギ、コナラが(木方 1984)、11世紀に属する岐阜県正家1号窯ではナラ類が多く(木方 1983)、12世紀に属する愛知県上白田1号窯ではクスギ類とマツが(バリノ・サーヴェイK.K. 1988)それぞれ燃料材として用いられていた。僅かな分析例ではあるが、これによるとマツの利用よりもコナラ類、クスギ類の利用の方が多いようである。

このように燃料材のマツ材利用が古代においてはあまり多くなく、むしろナラ材が多く用いられていたのであれば、その背景や、マツ材利用の開始期などについて用材選択および周辺自然植生のあり方に関する問題と共に今後明らかにして行かなければならないと考えている。

参考文献

- 木方洋二 1983 木炭の樹種同定 正家1号窯発掘調査報告書 恵那市教育委員会
 1984 岩崎45号窯出土木炭の樹種の識別 株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書
 日進町教育委員会
 倉田 悟 1971 原色日本林業樹木図鑑 1~5 (改訂版) 地球出版
 島地 謙・伊東隆夫 1982 図説木材組織 地球社
 西田正規 1978 須恵器生産の燃料について 陶邑Ⅲ 大阪府教育委員会
 1982 木炭の樹種同定 丹波周山窯址 京都大学文学部考古学研究室
 バリノ・サーヴェイ株式会社 1982 上白田古窯出土炭化材同定 上白田古窯址群 常滑市教育委員会
 松谷暁子 天代瓦窯跡出土炭化の樹種について 天代瓦窯遺跡 中之条町教育委員会



1. クスギ類 (1号窯出土)

Q. cf. acutissima Carr.

上; 放射縦断面 ×300

中; 接線縦断面 ×100

下; 横断面 ×50

2. クスギ類 (3号窯871126)

Q. cf. acutissima Carr.

上; 放射縦断面 ×150

中; 接線縦断面 ×100

下; 横断面 ×50

2. 天狗沢瓦窯遺跡における炭化材の樹種について

千野 裕 道

山梨県中巨摩郡敷島町天狗沢遺跡において古墳時代終末期・白鳳時代のもとの瓦窯が3基発見された。このうちの2基の窯跡と溝などから炭化材が発見された。この樹種同定を行うことにより、瓦を含めた焼き物の焼成のための燃料材にどのような樹木を用いたかについて明らかにし、古代の木材利用についての基礎資料を示すこととした。

1号窯から9サンプル、2号窯からは1サンプル、溝などから1点が発見されている。それらは破片となってしまうが、中には1個体あるいは1つの枝のものから割れたものとわかるものもある。これらはまず、すべての破片を実体顕微鏡（×6～40）によって観察を行った。この観察によってこれらの破片はコナラ類、クヌギ類、広葉樹環孔材、広葉樹散孔材であることがわかった。さらに横断面、接線断面、放射断面をそれぞれ観察できるように面をカミソリで切断し、電子顕微鏡用の試料台に接着し、金蒸着を施し、電圧20～25KVで観察、写真撮影を行った（表参照）。写真用のフィルムは6×7判のモノクロのネガフィルムを用いた。図版に用いた写真は密着焼き付けをそのまま用いており、トリミングは行っていない。以下にそれらの樹種についての記載とその識別根拠を示す。

1. 針葉樹 (Coniferous Wood) 1号窯たき口 (図版①-1)

垂直・水平樹脂細胞が共になく、分野壁孔は窓状ではないことから、少なくともマツ類ではないことがわかる。しかし、その他の性質は不明な点が多いため針葉樹とした。

2. コナラ類 (*Quercus cf. serrata* Thunb.) ブナ科 1号窯たき口、灰原870526、灰原炭化物870528、8区、灰原870529、灰原870530、灰原炭化層中、灰原3層870530、2号窯灰原3層870603、地区名なし870624 (図版①-2)

年輪の始めに大道管が2～3列並び、そこから薄膜で角ばった小道管が火炎状に配列する環孔材である。放射組織は単列同性のものと複合放射組織をもつなどから、ブナ科コナラ属コナラ (*Q. serrata*) かミズナラ (*Q. mongolica*)、カシワ (*Q. dentata*)、ナラガシワ (*Q. aliena*) のいずれかの材であることがわかる。これらの材構造は類似しており識別は困難である。

カシワは南千島から日本、台湾、中国東北部、モンゴルにかけて分布し東北地方から北海道にかけての温帯の沿岸に多く分布する。ミズナラは南カラフト、南千島から日本では九州の大隅、中国東北部、朝鮮にかけて分布し、ブナと共に日本の温帯林を構成する代表樹種である。ナラガシワは本州（岩手、秋田県以南）から九州（鹿児島北部まで）、さらに朝鮮、中国などに分布し、適潤またはやや乾いた陽地に生ずる。コナラは北海道南部から九州、朝鮮にかけての温帯から暖帯に分布し、ミズナラよりも低位帯に多い。

3. クヌギ類 (*Quercus cf. acutissima* Carr.) ブナ科 1号窯たき口、灰原870526、灰原炭化物870528、8区、灰原870529、灰原870530、灰原炭化層中、⑦870601、2号窯灰原3層

870603、地区名なし870624 (図版②-3)

年輪の始めに大道管が2~3列並び、そこから円形で厚膜の小道管が夏材部に配列する環孔材。放射組織は単列同性のものと複合放射組織とをもつなどから、ブナ科コナラ属のクヌギ (*Q. acutissima* Carr.) かアベマキ (*Q. variabilis* Blume.) のいずれかの材であることがわかる。これらの材構造は類似しており識別は困難である。

クヌギは落葉高木で高さは15m、胸高直径は60cmになる。本州、四国、九州、台湾、朝鮮、中国、ヒマラヤにかけて暖帯地方に広く分布するが、わが国では薪炭材として植えられたので自然の分布地域は不明である。人里の近辺に多く分布し、奥山にはほとんど分布しない。アベマキはクヌギに似ており、山形、長野、静岡以西、四国、九州、台湾、朝鮮、中国にかけての暖帯に分布する。

4. 広葉樹環孔材 (Ring Porous Wood) 1号ミゾA-4 ベルト870530 (図版②-4)

炭窯で焼成されたものと同様な質感を持っている炭化材である。環孔材。孔圏2~3列、夏材部の小道管と柔細胞は接線状または帯状に配列する。道管の穿孔は単穿孔。放射組織は異性で2~4細胞幅である。これらの性質は判明しているが同定できなかった。

5. 広葉樹散孔材 (Diffuse Porous Wood) トレンチ1 861210

非常に硬い炭化材で表面は金属質の光沢を帯びており、炭窯などで焼成されたものと思われる。試料台は作成していない。

以上のような結果が明らかにされた。1号窯、2号窯共にクヌギ類、コナラ類によって炭化材が構成されていた。このことは大半の互窯燃料材にこれらブナ科コナラ亜属(多分クヌギとコナラ)に属する樹種が用いられていたことを示すものであろう。では、このような傾向が他の窯跡にも該当するものであろうか、他の分析例を少し見てみたい。

天狗沢互窯遺跡における炭化材の樹種

天狗沢1号窯	焚口	No	樹種
1号窯	灰原870526	No. 1	クヌギ類+(6~7年輪)直径2cm, コナラ類+, 針葉樹+
1号窯	灰原870528	No. 2	クヌギ類+, コナラ類+
1号窯	8区	No. 3	クヌギ類+, コナラ類+
1号窯	灰原870529	No. 4	クヌギ類+, コナラ類+
1号窯	灰原870530	No. 5	クヌギ類+, コナラ類+
1号窯	灰原炭化層	No. 6	クヌギ類+, コナラ類+
1号窯	⑦ 870601	No. 7	クヌギ類+, コナラ類+
1号窯	灰原3層870530	No. 8	クヌギ類+直径4cm (2~3年生)
1号窯	灰原3層870530	No. 9	コナラ類 (1個体)
2号窯	灰原3層87060	No. 10	クヌギ類+, コナラ類+

天狗沢1号溝	A-4BELT870530	№11	広葉樹環孔材+
トレンチ1	861210	№12	広葉樹散孔材+
	870624	№13	コナラ類+

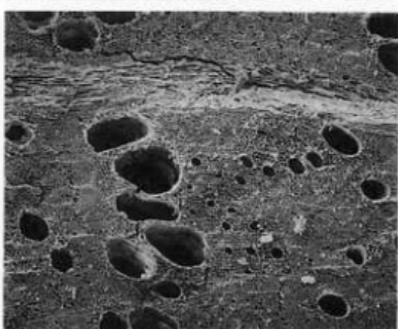
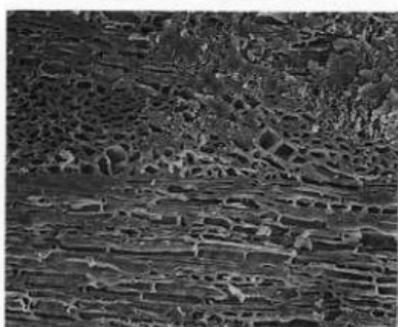
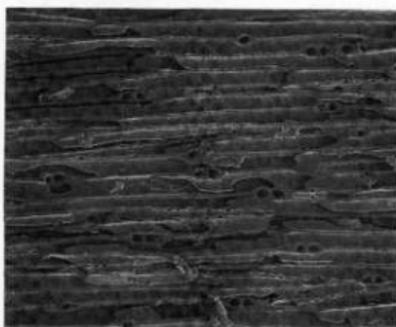
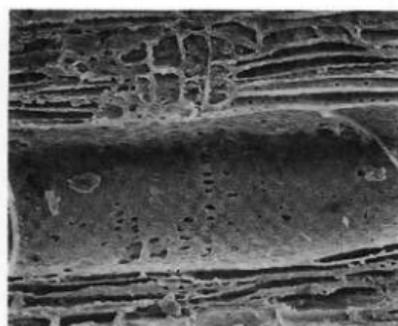
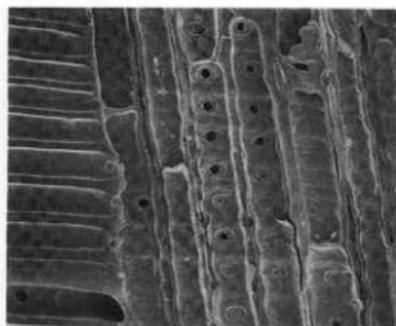
+ ; 破片の中にその種類が存在するという意味

大阪府陶邑窯跡群では5～6世紀には主にカシなどの広葉樹が燃料材に用いられていたが、7～8世紀になると燃料材の主体はマツになるという。いっぽう、先行する時期の窯跡が見られなく新たに窯を構築する地区では依然として広葉樹が用いられている。また、窯跡の密集する地区では燃料材の度重なる伐採によって照葉樹林がマツの二次林に変化したとされている(西田 1978)。このように遺跡群において体系的に分析が行われた例は他にないが他の窯跡における分析例は陶邑の結果とは異なった傾向が出されている。7～8世紀に属する京都府周山1～4号窯では主にコナラ亜属が(西田 1982)、8世紀に属する群馬県天沼瓦窯ではコナラなどの広葉樹が(松谷 1982)、9世紀前半に属する愛知県石崎45号窯では主にクヌギ、コナラが(木方 1984)、11世紀に属する岐阜県正家1号窯ではナラ類が多く(木方 1983)、12世紀に属する愛知県上白田1号窯ではクヌギ類とマツが(バリノ・サーヴェイK.K. 1988)それぞれ燃料材として用いられていた。僅かな分析例ではあるが、これによるとマツの利用よりもコナラ類、クヌギ類の利用の方が多いようである。

今のところ、陶邑におけるあり方は特殊であり、窯のための燃料材には広葉樹、特にコナラ亜属の樹種を多く用いられることが多かった。本窯跡におけるあり方もこの傾向にほぼ符号するものであろう。ところが今日も、焼き物の燃料材にはマツ材が最適であるとされ、多く用いられており、古代においてもマツ材が多いに違いないとされて来たのである。このように燃料材のマツ材利用が古代においてはあまり多くなく、むしろナラ材が多く用いられたのであれば、その背景などや、後世のマツ材利用の開始期などについて用材選択および周辺自然植生のあり方に関する問題と共に今後明らかにして行かなければならないと考えている。

参考文献

- 木方洋二 1983 木炭の樹種同定 正家1号窯発掘調査報告書 恵那市教育委員会
 1984 岩崎45号窯出土木炭の樹種の識別 株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書
 日進町教育委員会
- 倉田 悟 1971 原色日本林業樹木図鑑 1～5 (改訂版) 地球出版
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 図説木材組織 地球社
- 西田正規 1978 須恵器生産の燃料について 陶邑Ⅲ 大阪府教育委員会
 1982 木炭の樹種同定 丹波周山窯址 京都大学文学部考古学研究室
- バリノ・サーヴェイ株式会社 1982 上白田古窯出土炭化材同定 上白田古窯址群
 常滑市教育委員会
- 松谷暁子 天代瓦窯跡出土炭化の樹種について 天代瓦窯遺跡 中之条町教育委員会



1. 針葉樹 (1号窯たき口)

Conifereous wood

上; 放射縦断面 ×300

中; 接線縦断面 ×150

下; 横断面 ×100

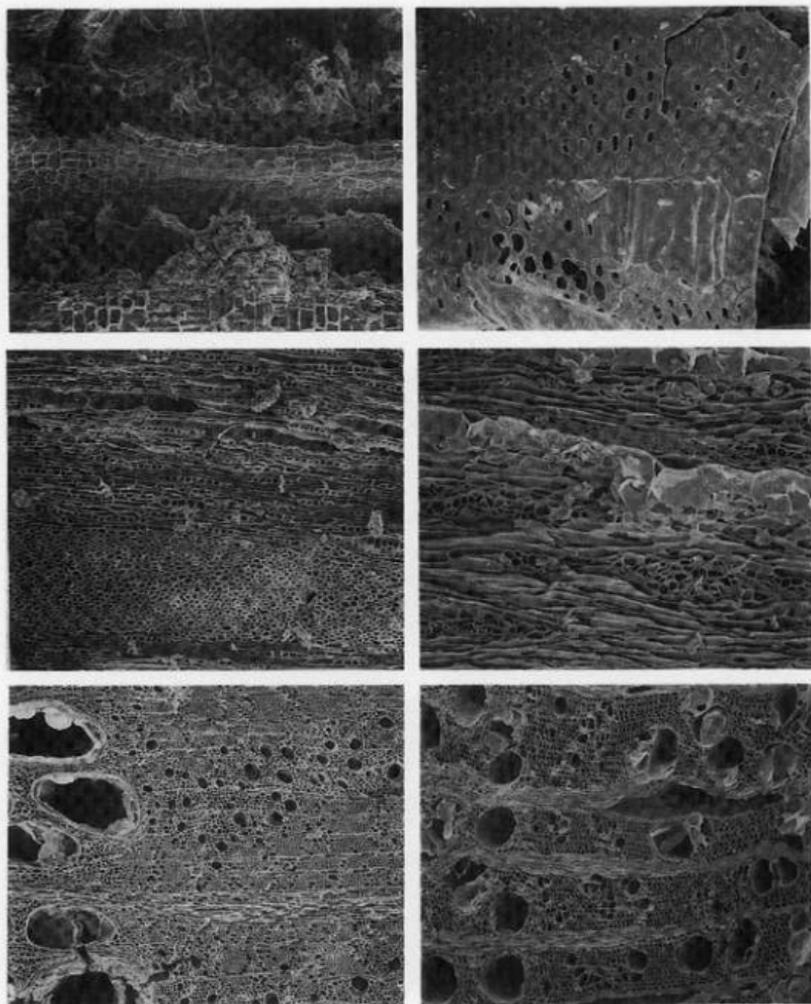
2. クヌギ類 (1号窯たき口)

Q. cf. acutissima Carr.

上; 放射縦断面 ×300

中; 接線縦断面 ×150

下; 横断面 ×50



3. コナラ類 (1号窯たき口)

Q. cf. serreta Thunb.

上:放射縦断面 ×100

中:接線縦断面 × 60

下:横断面 × 50

4. 広葉樹 (環孔材) (1号窯A-4ベルト)

Broad leaf tree (Ring Porous wood)

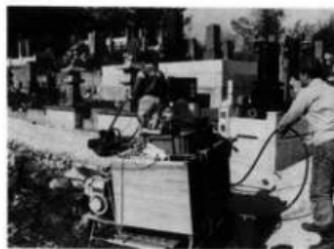
上:放射縦断面 ×500

中:接線縦断面 ×100

下:横断面 × 50



下向窯調査風景



下向窯地中レーダー探査風景



天狗沢窯出土須恵器



同左出土軒丸瓦



上土器瓦窯跡全景



川田瓦窯跡

(右) 川田瓦窯跡瓦出土状況



(上)

土器瓦窯跡2号窯調査風景



平林瓦窯跡



平林瓦窯製作祠（深沢親氏宅）



秋山焼窯（古郡計也氏宅）



下向坊ヶ峰瓦窯



小倉焼窯出土品

平成2年 3月26日 印刷

平成2年 3月31日 発行

山梨県埋蔵文化財センター調査報告第51集
生産遺跡分布調査報告書

編集 山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曾根923
TEL. 0552-66-3881

発行 山梨県教育委員会
印刷 尚ヨネヤ印刷

